

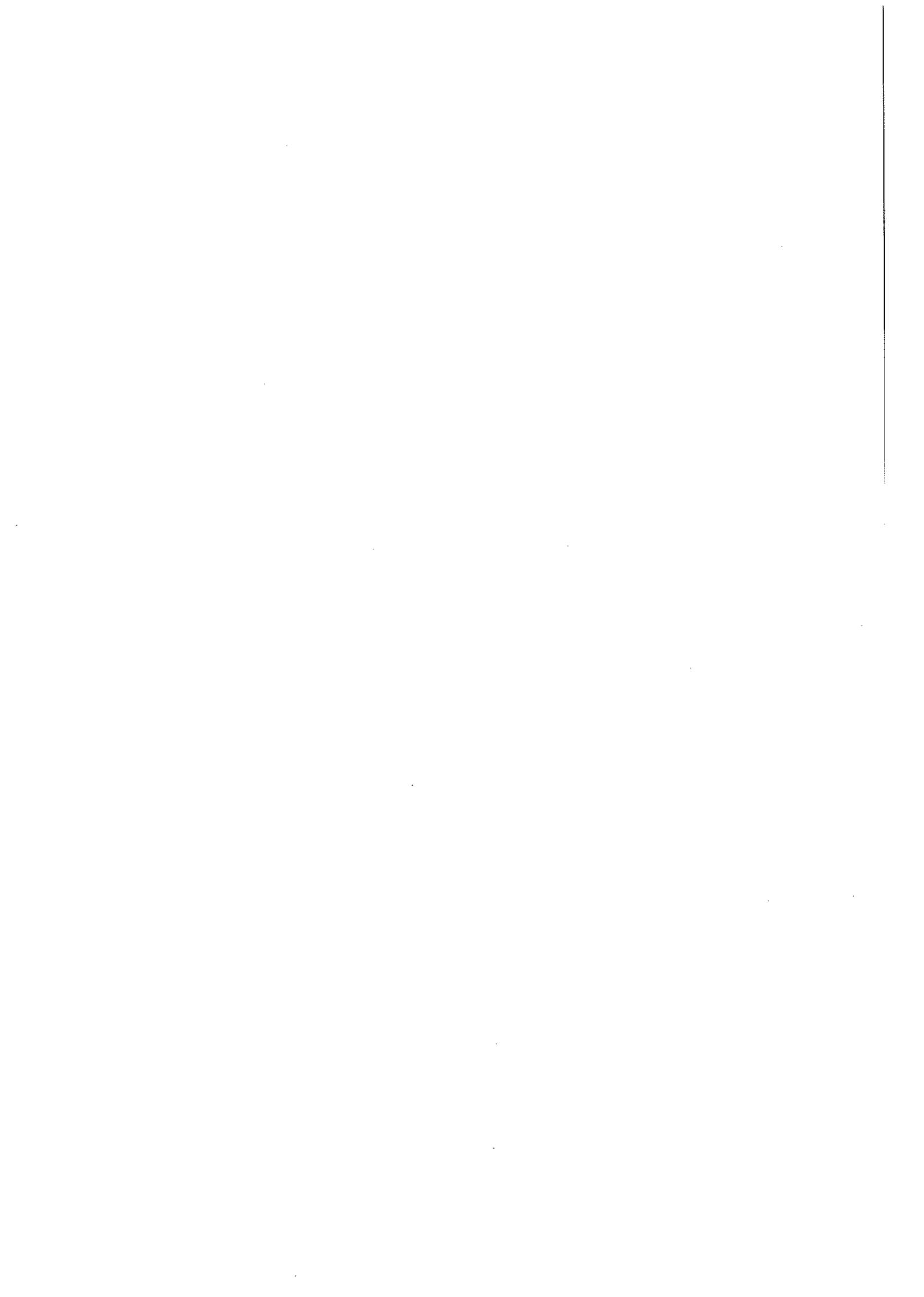
平成 20 年度

大分大学

高等教育開発センター報告書

目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センターの事業概要	
1. 事業概要	2
2. 活動記録	4
II 各部門・委員会活動報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	6
2. メディア・IT活用部門	8
3. FD・授業評価部門	23
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門	60
III 特別報告	
1. 平成21年度特別教育研究経費所要額調（教育改革）	75
2. 高等教育開発センターの統合効果の検証について	80
IV 付 録	
1. センター関係諸規則（投稿規程を含む）	90
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	96



はじめに

大分大学高等教育開発センター長
西村善博

高等教育開発センターの平成20年度報告書をお届けします。

本センターは、平成20年度、旧高等教育開発センターと旧生涯学習教育研究センターの統合による新センターとして出発することができました。本センターの事業については、従来のいわゆる高等教育関係事業にくわえて、生涯学習関連の事業を担当することになり、事業の運営・推進にあたっては、従来に増して、より幅広い人々のご協力を仰ぐことになりました。関係者の皆様方には厚く御礼を申し上げます。

さて、今回の年次報告書ですが、昨年度と同様に、本センター各部門のルーチンワーク的な成果を基本に据え、平成20年度特別教育研究経費（政策対応経費）による実績、平成21年度特別教育研究経費（政策対応経費）の申請（採択決定済み）を取上げています。また、平成21年2月に、学長から指示を受けた「統合効果の検証」に関連して提出した文書を収録しました。

なお、昨年度から実施している年次報告書への論文等の投稿原稿の収録については、センターの統合により、収録原稿の増加のため、センター紀要を別冊として刊行しましたので、そちらをご参照いただければ幸いに存じます。

本報告書では、こうした本センターの事業について、センター内に設置している部門報告として、以下の5つの部門ごとに、とりまとめています。

- 新規授業・カリキュラム開発部門
- メディア・IT活用部門
- FD・授業評価部門
- 大学開放推進部門
- 生涯学習支援システム部門

各部門の事業として、取扱いが難しいものについては、本センター全体として取組んだ事業として位置づけ、「特別報告」として取り扱っています。そこには、特別教育研究経費の申請書、統合効果の検証に関する報告を掲載しています。

本センター事業の取組みの円滑な推進は、学内教職員のご協力とご支援、ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり、この場を借りて感謝を申し上げますとともに、今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いに存じます。

平成21年4月



I 高等教育開発センターの事業概要

1. 事業概要

本センターは「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されている。こうした事業の2008年度成果について、部門ごとに列挙すると以下のような

◎新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・センター教員の教養科目等の担当の調整
- ・きっちよむフォーラム2008（学生教職員合同研修会）の実施
- ・日本人学生による英語スピーチコンテスト
- ・中期目標達成のための学生のTOEIC試験申込手数料の一部負担

◎メディア・IT活用部門

- ・授業のオンデマンド化，モデル事業の実施
- ・FD，授業記録システムの利用拡大
- ・LMSとの連携推進
- ・公開講座のビデオコンテンツ化の推進及び活用手段・方法等の検討
- ・遠隔授業の運用改善
- ・遠隔学習プログラムの実施体制の整備

◎FD・授業評価部門

- ・学部（大学院担当教員も含む）対象のFD活動の実施
 - WebClass講習会
 - 大分大学ティーチング・カフェ
 - オンラインFD
 - 先進的eラーニング研究会
 - きっちよむフォーラム2008（学生教職員合同研究会）
 - FDとeラーニングに関する講演会
 - 公開授業・検討会
- ・大学院FD講演会
- ・授業改善のためのアンケートの実施
- ・教員の自己点検レポート集の刊行

◎大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・自治体との連携事業の企画・運営
- ・大学開放事業のあり方の検討

◎生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体との連携
- ・社会人を中心とした生涯学習の場の整備

◎その他の取組み

- ・平成21年度特別教育研究経費への申請（採択済み）：申請書を「特別報告」に掲載
- ・平成22年度特別教育研究経費への申請支援
- ・統合の検証について：学長宛ての報告書を「特別報告」に掲載

2. 活動記録

平成20年

- 4月22日 FD講習会「WebClass利用講習会」（総合情報処理センター 第1実習室）
- 5月8日 運営委員会
- 5月9日 県教育委員会生涯学習課との平成20年度の取り組みについての意見交換（県教育委員会生涯学習課）
- 5月30日 第1回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス：学生センター会議室 挾間キャンパス：多目的会議室）
- 6月9日 県教育委員会と同行して、県内各市町村教育委員会との情報交換会の開始
- 6月15日 公開講座「大分大学米水津塾」開講式（全8回、2月15日まで）
- 6月17日 大分大学ティーチング・カフェA日程（高等教育開発センター センター室1）
- 6月20日 大分大学ティーチング・カフェB日程（高等教育開発センター センター室1）
- 7月3日 第2回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス：学生センター会議室 挾間キャンパス：多目的会議室）
- 7月4日 第1回大学開放推進部門及び地域生涯学習システム部門合同会議（学生センター2F会議室）
- 7月24日 大学院FD講演会「大阪大学大学院における教育改革」（旦野原キャンパス：教養教育棟32号教室 挾間キャンパス：医学部211教室（遠隔講義システム利用）
- 8月10日 公開講座「身近な大分の化石収集～化石が出る理由から、化石掘り、標本づくりまで」A日程
- 8月11日 「生涯学習関連業務に係る大分大学への期待」に関する第1回アンケートの依頼（県教育委員会及び市町村教育委員会生涯学習主管課長）
- 8月21日 平成20年度大学教育研究センター等協議会（広島大学中央図書館ライブラリーホール）（22日まで2日間）
- 8月23日 公開講座「身近な大分の化石収集～化石が出る理由から、化石掘り、標本づくりまで」B日程（24日まで2日間）
- 10月1日 オンライン授業公開・検討会（10月16日まで）
- 10月10日 第3回運営委員会（旦野原キャンパス：学生センター会議室 挾間キャンパス：病院第一会議室） 10月11日 第3回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス学生センター会議室）
- 10月14日 「生涯学習関連業務に係る大分大学への期待」に関する第2回アンケートの依頼（県教育委員会及び市町村教育委員会生涯学習主管課長）
- 10月21日 市町村教育委員会生涯学習主管課長会（県教育委員会主催）で情報交換
- 10月23日 第29回全国国立大学生涯学習系センター協議会（アウイーナ大阪）（24日までの2日間）
- 11月2日 大分市委託事業「豊の都市学び直し講座」（6回シリーズ）の開講（会場：大分市コンパルホール）（全6回、12月7日まで）
- 11月7日 大学院・学部合同FD講演会（メンタルヘルス）（旦野原キャンパス：教養教育棟32教室 挾間キャンパス：看護学科211号教室（遠隔授業システムを利用））
- 11月14日 先端的eラーニング研究会（高等教育開発センター センター室1）
- 11月26日 きっちよむフォーラム（旦野原キャンパス：教養教育32号教室 挾間キャンパス：看護学科211号教室）

- 12月9日 第4回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス高等教育開発センター室）
- 12月15日 後期授業公開FDワークショップの授業公開（12月19日まで）
- 12月19日 後期授業公開FDワークショップ授業検討会A日程（「エレクトロニクスの世界Ⅱ」、「キャリアデザイン入門」、「西洋経済史Ⅱ」、「経営学Ⅱ」）（旦野原キャンパス学生センター会議室）
- 12月20日 公開講座「食育とコミュニケーションを親子一緒に考える講座」（ゆふの丘プラザ、21日までの1泊2日）
- 12月22日 後期授業公開FDワークショップ授業検討会B日程（「人間と教育」、「地域と情報」、「人間関係学」、「情報科学の世界」）（旦野原キャンパス学生センター会議室）
- 12月25日 第4回運営委員会（旦野原キャンパス学生センター会議室）

平成21年

- 1月23日 公開講座「生涯スポーツとしてのスキーをやってみよう」（広島県八幡高原191スキー場）（車中泊で24日に帰着）
- 1月27日 第2回大学開放推進部門及び地域生涯学習システム部門合同会議
- 1月30日 大学院・学部合同FDとeラーニング講演会（旦野原キャンパス：教養教育棟32教室 挟間キャンパス：看護学科211号教室（遠隔授業システムを利用））
- 2月6日 第5回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス：学生センター会議室挟間キャンパス：多目的会議室）
- 2月8日 「トキの住める里づくり体験ツアー」
- 2月28日 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会（国東市「梅園の里」）（3月1日までの2日間）
- 2月28日 里海体験実習（大分水フォーラムの行事に協力）（佐伯市蒲江マリンカルチャーセンター）（3月1日までの1泊2日）
- 3月5日 日本人学生による英語スピーチコンテスト（旦野原キャンパス教養教育35号教室）
- 3月13日 県教育委員会生涯学習課との平成20年度の取り組み状況についての意見交換（県教育委員会生涯学習課）
- 3月19日 第6回FD・授業評価部門会議（旦野原キャンパス：学生センター会議室挟間キャンパス：病院第1会議室）
- 3月27日 第5回運営委員会（旦野原キャンパス：学生センター会議室 挟間キャンパス：病院第一会議室）

Ⅱ 各部門・委員会活動報告

1. 新規授業・カリキュラム開発部門

(1) 新規授業・カリキュラム開発部門の活動の目的

本部門は旧高等教育開発センターの高等教育開発部門を継承し、全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する。

(2) 活動報告（経過および成果を含む）

① 全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

平成20年度発足の全学教育機構運営会議にセンターから2名（センター長、次長）、全学教育機構主題科目専門部会にセンターから3名（センター長、次長、専任教員1名）が選出され、平成20年度の教養教育科目の策定作業に参加し、カリキュラム作成作業に貢献した。

② センター教員の教養科目等の担当の調整

全学教育機構における検討により、本センター専任教員による教養科目の開設は平成21年度4科目程度の増加を見込むことになった。また、前期に実施している「大分大学の人と学問」については、前期収録のビデオを活用し、後期にも実施することとなった（これも含めれば5科目の増加）。

③ きっちよむフォーラム2008第1部「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

きっちよむフォーラムの第1部として実施されたシンポジウム（11月26日開催）では、以下の4組の学生による問題提起があり、それを受けての討論があった。

報告1: ワーキングスキル～アルバイトで単位認定～ 田中啓太、堀田祐馬、安部泰記(経済学部)
報告2: DSを使って授業改善 関あずさ、加藤芙夕子、福田里砂(教育福祉科学部)
報告3: 大分大学の英語教育への提案 久保沙也華(教育福祉科学部)
報告4: 少人数クラス VS 大人数クラス 永利勇樹、井島紘、香田薫、森田理恵、西健四郎(教育福祉科学部、経済学部、工学部)

報告1では、学生がアルバイトで習得したスキルを単位認定する可能性の提案であった。本学の「インターンシップ」、「教育実習」、「第二外国語の検定資格」等による学外活動の単位認定の例、授業シラバスの例、他大学での事例が、その根拠として紹介された。報告後に、具体的な単位数と講義との関連について質問があり、単位として2単位を想定していることなどの回答があった。

報告2では、携帯型ゲーム機（ニンテンドーDS）を授業に導入することで、学生が個々のレベルに合った学習活動を主体的に進めることが可能との提案であった。他大学での実践例、利用可能な学習ソフトの例、DSの導入による長所と短所が紹介された。報告後に、充電の問題、費用、1セメスターあたりのソフトの数について質問があり、充電器の貸し出し、DSの価格、1セメスター1ソフトが目安との回答があった。

報告3では、大学に期待する英語授業の内容や授業方法について提案があり、それを実現するための参考として、他大学や本学での事例、TOEICの活用方法等が紹介された。報告後に、TOEICの受験目的についての質疑応答があった。

報告4では、学生の授業への意欲を向上させ、効果的な授業とするため、大人数クラスと少人数クラスのそれぞれの長短所が寸劇とともに提示された。前者ではグループワークの採り入れ、学生とのコミュニケーションを図る等の工夫により、よい授業になるとの提案があった。その後の討論では、大人数と少人数のクラスの境界は約40人であること、学生同士のコミュニケーションが学習意欲に繋がることの認識がしめされた。

4件の報告が終了後、全体での討議となった。英語の授業については、学生のニーズが多様であること、授業選択の幅が学部により異なること、シラバスと実際の教育内容との関連が議論された。クラス規模については、教員と学生とのコミュニケーションの問題としても考えられるとの意見があった。アルバイトの単位化の是非については、その意義やインターンシップとの違い等が議論されるなど、教員学生双方で熱心な議論が交わされた。

④ 日本人学生による英語スピーチコンテスト

本コンテストは、本学の中期計画「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る」を実践するため、語学能力としての英語、学習内容と関連した英語能力、プレゼンテーション能力の育成をはかることを目的としている。

コンテストは、3月5日、教養教育棟35号教室で実施され、体調不良による辞退者を除く、3名の発表となった。それは、①自身の米国滞在経験をもとにした教育への提言、②環境問題に対する身近な取り組み、および③米国の前国務長官の演説に触発された今後の自分の決意をテーマとするものであった。審査員から、参加者が少なかったものの、どれも非常にレベルの高いスピーチで審査が難航した旨の講評をいただき、解散となった。なお、コンテストは平成21年度も実施予定である。

⑤ 中期目標達成のための学生のTOEIC試験申込手数料の一部負担

昨年度、TOEIC試験申し込み手数料として192,600円、年会費として100,000円を負担した。

(3) 特別報告関係

当該部門に係る特別報告として、「授業・講演会等のオンディマンド化とFD活動の推進にもとづく教育環境の質的な改善」（平成21年度特別教育研究経費の申請書）、「高等教育開発センターの統合効果の検証について」を別途掲載した。

2. メディア・IT活用部門

メディア・IT活用部門では、平成20年度は主として以下の4領域について業務にあたった。

- (1) 遠隔授業の支援と改善
- (2) 大分大学グローバルキャンパスの開発・運営（授業収録とオンデマンド配信）
- (3) FD関連講演会等への協力
- (4) 概算要求への対応

以下、それぞれについて概略を述べ、最後に(5) その他について報告する。

(1) 遠隔授業の支援と改善

遠隔授業への支援

4科目の遠隔授業に対する支援を行った（表1）。前期学期は、且野原キャンパスと挾間キャンパス間の遠隔授業として、山下茂先生「自然とゆらぎ」を開講した。また、後期学期は且野原キャンパスと挾間キャンパス間の遠隔授業として、藤井弘也先生の「地域と情報」。且野原キャンパスと大分県立看護科学大学間の遠隔授業として、本学から看護大に対しては仲本大輔先生の「経営学の基礎」と、看護大から本学では吉村匠平先生の「人間関係学」の遠隔授業を行った。

仲本先生の講義については機器の不調のため1回分は、実施ができなかったが、それ以外の60回近い授業については、ほぼ安定した配信を行うことができた。

いずれの授業もビデオ収録し、大分大学グローバルキャンパスで配信を行った。

表1 遠隔授業への支援

実施時期	教員名（所属）	講義名
前期（且野原）	山下 茂（教育福祉科学部）	自然とゆらぎ
後期（且野原）	藤井弘也（教育福祉科学部）	地域と情報
後期（看護科学大）	仲本大輔（経済学部）	経営学の基礎
	吉村匠平（看護科学大）	人間関係学

機器故障・トラブルへの対応

遠隔授業にあたっては平成17年度に導入された遠隔授業システムを中心として利用してきたが、後期学期からIP-8000の機器不調により、接続が不安定となった。当該機器について（図1）、メーカーによる修理が不可能という状況に対応し、ソニーのテレビ会議システムXG-80を利用するシステムへと移行した（図2）。一部機器は、業者からのレンタルであり、来年度は対応が必要である。

問題が生じる以前

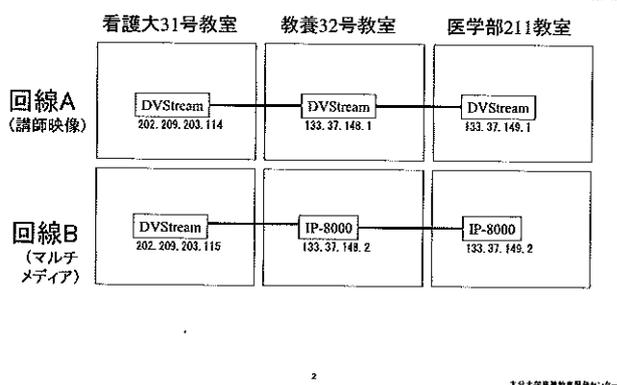


図1 平成17年度～20年前期までの構成

今後の対応策(案)

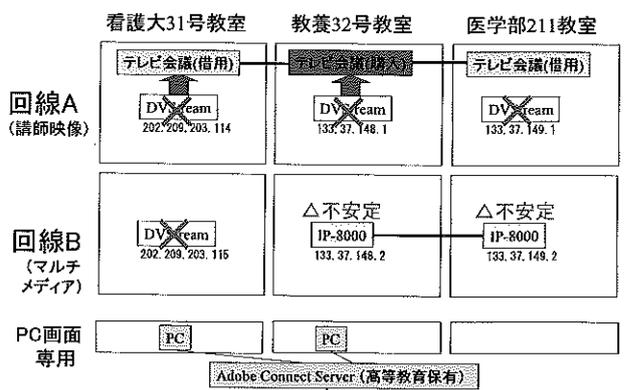


図2 20年後期の体制(案)

(2) 大分大学グローバルキャンパスの開発・運営(授業収録とオンデマンド配信)

前期10科目、後期8科目の合計18科目を対象に収録・配信を行った。収録・配信数は162コマ(1コマは90分)となった。その他、通学期とならない2科目(3コマ)の授業収録・配信を実施した。

その他、高等教育開発センター主催の、各種FD講演会、きっちよむフォーラム、経済学部主催のシンポジウム、フォーラムや、キャリア開発課主催のキャリアガイダンス、学生支援課の薬物乱用防止のための講演会、研究・社会連携課の科研費の説明会等の収録・配信を行っており、合計で24件、90分を1コマと換算すると40コマ近い収録と配信を行っている。

授業によっては中間、学期末試験前の利用数が増加するなど、授業の復習用途で活用されている。また、意欲の高い学生、やむを得ない理由で授業を欠席した学生などの活用事例も見られている。

授業収録や配信等の概要については、「授業・講演等収録・配信のご案内」(付録1)を作成し、教職員向けに公開した。また、昨年度のアシスタントの手引きに続き、技術的な要件も含め、「授業ビデオ収録・配信事業の概要」(付録2)を作成し、公開した。なお、大分大学グローバルキャンパスを参照されたい(<http://www.he.oita-u.ac.jp/ogc/>)。

(3) FD関連講演会等への協力

メディア・IT活用部門として、FD・授業評価部門の企画に協力したものについて表2に整理した。それぞれの企画の詳細については、FD・授業評価部門報告を参照されたい。なお、「オンライン授業公開・検討会」「先進的eラーニング研究会」「FDとeラーニングに関する講演会」については、「大分大学グローバルキャンパス」を用いて、学内のみに対してオンデマンド配信している。

また、メディア・IT活用部門の業務と関連して、「授業改善のためのポイント7」を作成した。

表2 遠隔授業への支援

日程	内容
4月22日	WebClass 講演会（旦野原キャンパス） 講師：山下茂（教育福祉科学部）
5月27日	WebClass 講演会（挾間キャンパス：看護学科対象） 講師：高等教育開発センター 尾澤重知
10月1日～15日	オンライン授業公開検討会の実施 対象授業：「アカデミックスキル」（高等教育開発センター尾澤重知）
11月14日	先進的eラーニング研究会（講師：慶應義塾大学 松田岳士）
11月26日	きっちよむフォーラム
1月30日	FDとeラーニングに関する講演会 （講師：東京農工大学 加藤由香里・江木啓訓）
随時	WebClass等について、支援サポート（看護学科、医学科、工学部等）

（4）特別教育研究経費概算要求への対応

平成20年度概算要求（政策課題対応経費）：「授業のオンディマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組み」での予算措置に対応し、「授業配信システム」「授業収録システム」の導入を、メディア・IT活用部門が中心となって検討した。

授業収録システムでは、本学第1大講義室を対象として、授業収録をHD画質で収録できるようにした（図3、図4）。また、32号教室では既存システムとの連携を図り、遠隔授業の収録に対応させた。



図3 収録機器

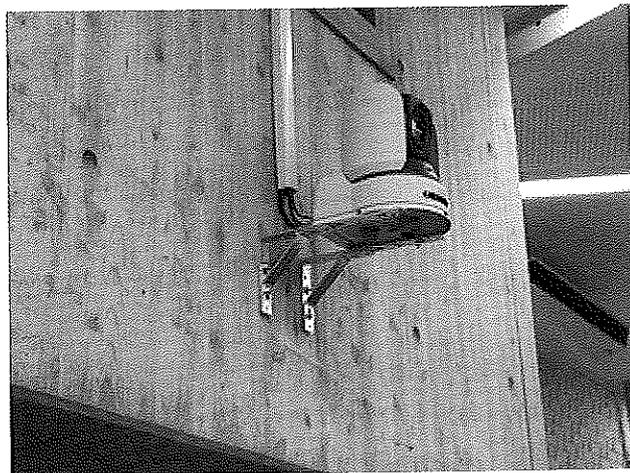


図4 収録用固定カメラ（第1大講義室）

「授業配信システム」については、数社に対する検討と実証実験に基づいた仕様策定を行い、入札を実施した。仕様策定と技術審査は、メディア・IT活用部門から藤井、藤村、山下各委員にご協力をいただいた（表3）。結果、日本SGI社の「Bluesky」の導入を行うことになった。既に運用しているシステムの後継として、2009年4月より本格稼働している。

表3 授業配信システム仕様策定メンバー

業務	教員名 (所属)
仕様策定	藤井弘也 (教育福祉科学部)
	藤村賢訓 (経済学部)
	尾澤重知 (高等教育開発センター)
技術審査	山下 茂 (教育福祉科学部)

その他、学長裁量経費による第1大講義室のAVシステム更新と、戦略的大学連携GPによる遠隔会議システム及び第2大講義室のAV・収録システムの仕様策定に部門として協力した。

その他

メディア・IT活用部門と、高等教育開発センター全般の業務に関連して、学会等で以下の5件の発表・報告を行った。

- 尾澤重知(2008). 教育改善に向けたICTの利用—大分大学の事例—. 大学教育学会第30回大会 (2008年6月7日, 目白大学)
- Shigeto Ozawa, Harutoshi Makino, Yoshihiro Nishimura(2008). A Trial Evaluation of Blended learning Using On-demand Omnibus Lectures and Face-to-face Group Learning. In Proceedings of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2008: 3220-3225 (2008年7月2日, Vienna, Republic of Austria)
- 尾澤重知, 牧野 治敏, 西村 善博(2008). 講義型学習とグループ学習の連携をいかに図るか～オンデマンドによる授業配信と対面授業の効果的な融合に向けての予備的検討～. 日本教育工学会 第24回全国大会 (2008年10月13日, 上越教育大学)
- 尾澤重知, 牧野治敏, 西村善博(2009). 自校教育の深化を目的としたグループ学習のデザインと評価. 第15回大学教育研究フォーラム (2009年3月19日, 京都大学)
- 尾澤重知(2009). ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップから見た今後の課題と可能性—メンティとして—. 第15回大学教育研究フォーラム (2009年3月20日, 京都大学)

また、論文・報告書等で以下の2件について刊行された。

- 加藤由香里, 江本理恵, 尾澤重知, 細川敏幸, 中島平, 江木啓訓, 田口真奈(2008). 教育改善に向けたICTの利用. 大学教育学会誌, Vol. 30, No. 2 : 88-92.
 - 尾澤重知(2008). 「電子ポートフォリオのリソースとしての授業ビデオの活用.」『日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題—ワークショップから得られた知見と展望—』(大学評価・学位授与機構「評価結果を研究教育の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書」) : pp.157-166
- 上記学会発表等の一部は、高等教育開発センターのWebページからも閲覧が可能である。

付録1 高等教育開発センター 授業・講演等収録・配信について(旦野原)

授業のビデオ収録・オンデマンド配信のご案内

高等教育開発センターでは、07年度から「学長裁量経費」ならびに、08年度から「概算要求（政策課題対応経費）」「授業のオンデマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組み」の支援を受け、授業や各種講演会のビデオ収録と、学内外へのビデオ配信（インターネットを利用したビデオオンデマンド）を実施しています（図1、2）。この2年間延べ37科目、各種講演会の収録も20件を超え、400以上のコンテンツを作成、配信し、学生の予復習や、ファカルティ・ディベロップメント(FD)での利用、また、生涯学習・社会貢献として活用しています。

09年度からは、さらに規模の拡大と、質の向上を図り、授業・講演等の収録と配信のサービスを実施します。前期学期に実験的に旦野原キャンパスで実施し、後期学期からは挾間キャンパスにも拡大する予定です。ご関心のある教職員の皆さんは、お気軽にお問い合わせください。

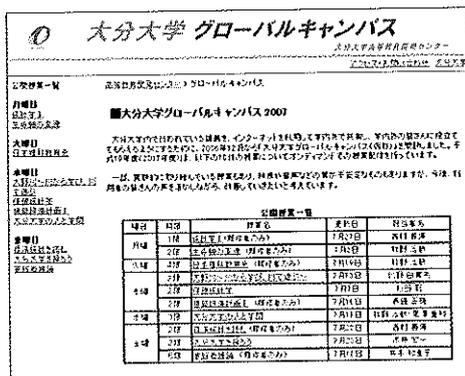


図1 大分大学グローバルキャンパス

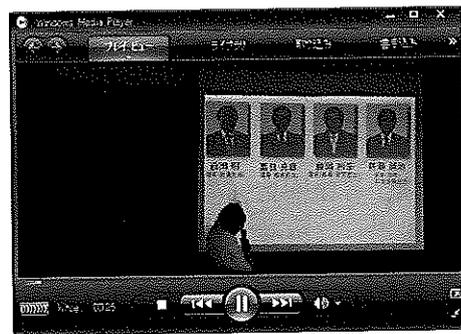


図2 授業ビデオ配信画面例

高等教育開発センター「授業・講演等収録」事業の概要

授業・講演収録・配信の対象

- (1) 大分大学で開講されている授業科目
- (2) 学生、教職員向けの各種講演会

収録は授業・講演会等1回分から、半日程度のシンポジウム、全14～15回の講義まで対応します。

お申し込み期限と費用：授業収録の場合は2週間前、単発の講演会やシンポジウム等は、3週間前までにご連絡ください。とくに土休日実施の場合は、事前調整が必要です。収録・配信は無償ですが、条件によっては費用が生じる場合があります。

少ないリソースで実験的に実施しています。必ずしもご希望に添えない場合があります。

収録・配信の用途：以下の用途以外は事前にご相談ください。

- (1) 授業を履修している学生の「復習」や、実習などやむを得ない欠席時の「補講」用として
- (2) 各種講演会・講習会、研修会の共有
- (3) 自分自身の授業、教授法の見直し。教員研修（FD）の一環としての利用

申し込み・お問い合わせ先

問い合わせ、申し込みにあたっては、裏面の「収録・配信の条件」をご覧ください。

hecenter@cc.oita-u.ac.jp まで電子メールで。電話での問い合わせは受け付けていません。

授業・講演等収録・配信の条件

授業・講演会等の収録には、一定の条件があります。ご依頼の前に、必ずご確認ください。

(1) 収録内容をインターネットで一定期間配信すること

配信の範囲は、「履修者のみ」「学内のみオープン」「学内外すべてオープン」など、相談に応じて設定することが可能です。収録内容のDVD化等は、実費相当をいただきます。「収録のみ（DVD作成のみ）」は受け付けていませんが、「配信のみ」は可能です。ご相談ください。

(2) 授業・講演内容が第三者の著作権を侵害していないこと

ビデオ配信は、著作権法（第35条等）が認めている著作物等の「例外的な無断利用」の適用範囲外となります。「引用」「出典」が明確ではない資料の収録、放映はできません。また、テレビ録画、市販のDVD・ビデオなどは一切、収録・配信はできません。

詳細は「著作権なるほど質問箱」等をご覧ください。

<http://bushelover.nime.ac.jp/c-edu/outline.html>

内容によっては、許諾申請の支援を行います。ご相談ください。

(3) オンデマンドビデオの受講者から対価を得ないこと

授業・講演収録は、原則として無償で行います。大学が主催・開催する公開講座の場合を除いて、受講者から別途対価を得ることはできません。

(4) 高等教育開発センターが実施する各種実態調査や事業評価への協力

依頼者や、対象となった学生などに、質問紙調査、インタビュー調査などを行う場合があります。

(5) 無保証

収録は、一定のトレーニングを積んだ学生アシスタント（本学学部生・大学院生）が行います。確実な収録は保証できません。また、専門的な収録もできません。

その他の留意点とお願い

(a) 学外者の講演の収録や、オムニバス形式での授業収録の場合、代表者がビデオ収録と、配信等についての説明を行い、収録・配信にあたっての許諾を事前に文章等で得てください。

(b) 収録ではマイクの利用が必須です。教室環境によっては、教室用と収録用の2つのマイクを装着していただく場合があります。カメラは家庭用のハイビジョンカメラで収録撮影し、できるだけ学生や聴

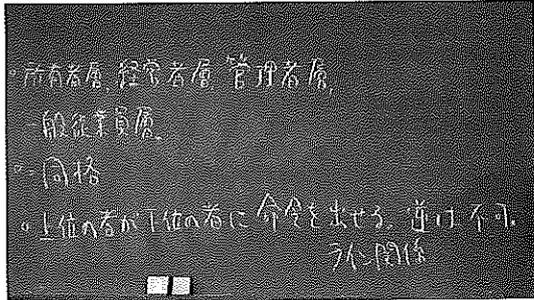


図3 授業ビデオ配信画面例（黒板の例）

き手の迷惑をかけないように配置しますが、一定の制約が生じます。

(c) PC画面（パワーポイント）型の授業でも、黒板・ホワイトボード利用の授業のどちらも対応していますが、一定以上の文字の大きさを確保していただかないと収録や配信が困難になります。

※通常の教室環境で、多くの学生が「見やすい」と判断する文字の大きさであれば問題ありません。

実験的な試みではありますが、本事業は全国的にも先進的な事業です。制約はいくつかありますが、ぜひ多くの教職員の皆さんにご利用いただければと願っております。

hecenter@cc.oita-u.ac.jp まで電子メールでのお問い合わせ・お申し込みをお待ちしています。

付録2 高等教育開発センターの授業ビデオ収録・配信事業の概要

ここでは、大分大学高等教育開発センターメディア・IT活用部門が実施している授業収録と、インターネットを利用した配信（オンデマンド配信）について整理した。

1. 授業収録・配信の目的と概要

高等教育開発センターが支援する授業収録・配信事業は、大分大学学生に対する教育や学習支援、また、教職員に対する研修・情報提供、大学外の社会・地域貢献の促進を目的として、07年に正式運用を開始した。

収録は原則として学内で実施し、授業収録・配信の主たる対象は、以下の2点である。

- (1) 大分大学で開講されている授業科目（以下、「授業」と総称する）
- (2) 学生、教職員向けの各種講演会

授業ビデオの配信（オンデマンド配信）は、「大分大学グローバルキャンパス」（図1）を利用し、一定のインターネット環境さえ用意すれば容易に視聴が可能である。

科目	日時	授業名	講師	担当教員
1学期	2月	法科生1(授業録のみ)	2月27日	渡辺 義博
1学期	2月	生命理工学 (授業録のみ)	2月28日	川野 弘毅
1学期	2月	生命理工学 (授業録のみ)	2月28日	川野 弘毅
1学期	2月	大分大学 (授業録のみ)	2月28日	川野 弘毅
1学期	2月	健康福祉学 (授業録のみ)	2月28日	中田 七
1学期	2月	健康福祉学 (授業録のみ)	2月28日	西崎 正樹
1学期	2月	大分大学 (授業録のみ)	2月28日	川野 弘毅・渡辺 義博
1学期	2月	健康福祉学 (授業録のみ)	2月28日	渡辺 義博
1学期	2月	生命理工学 (授業録のみ)	2月28日	渡辺 義博
1学期	2月	健康福祉学 (授業録のみ)	2月28日	渡辺 義博

図1 大分大学グローバルキャンパス

授業収録と配信は、ワンセットの事業である。収録・配信の条件として定めているのは、

- (1) 収録内容をインターネットで一定期間配信すること
- (2) 授業・講演内容が第三者の著作権を侵害していないこと
- (3) オンデマンドビデオの受講者から、対価を得ないこと
- (4) 高等教育開発センターが実施する各種実態調査や事業評価への協力
- (5) 無保証

以上5点である。例えば、ビデオ収録をDVD等に記録するだけの場合や、テレビ番組や市販のDVD教材などの配信はできない。また、販売等の二次利用もできない。「無保証」については後述するが、学生アシスタント（学部生、大学院生）が中心となって実施する収録であり、確実な収録や一定以上の品質を保証することはできない。

授業収録・配信の全体の流れは、「授業収録」→「ビデオ編集」→「授業配信」となる。以下、それぞれについて概要を説明する。

2. 授業収録の概要と留意点

以下、講演等の収録も併せて「授業収録」と総称する。

授業の収録は、以下の3つのパターンで行っている。

- (1) PC画面（もしくは電子ホワイトボード、タブレットPCなど）と教員音声の収録
- (2) 教室内にビデオを持ちこんでのビデオ収録
- (3) PC画面収録とビデオの組み合わせ

以上のうち、(1)は、PCとワイヤレスマイクを用意すれば教員1人でも収録が可能なシステムであり、(2)で言及するビデオ収録と比べて収録にあたっての負荷が少ない。ただし、高等教育開発センターが利用普及に努めている電子ホワイトボードシステム（スマートボード）を利用する場合、プロジェクタ等の機器の設置が必要となる。この場合、収録対象となるのはPC画面と教員音声のみとなる。

(2)のビデオの収録は、黒板を利用する教員など多様な授業形態への対応が可能である。一方、撮影者が必要となり、多様な教室環境や教員の授業スタイルの相違への対応や、撮影にもノウハウが必要となる点で、安定した収録には準備が必要である。一方、PC画面もビデオ映像として収録が可能であり、利用者にとっての利便性は高い。

(3)は、両者の組み合わせであり、両者のニーズがあった場合に対応している。

収録開始当初の06年度は専任教員が中心だったが、07年度からは学部生の学生アシスタント制度を設け、一定のトレーニングをつんだ後に収録を担当している。

以下、授業配信を視野に入れた際の授業収録の留意点について整理する。

2.1 PC画面（電子ホワイトボード、タブレットPC）収録の留意点

電子ホワイトボード（スマートボード）システム等を用いたPC画面の収録を行う場合、PowerPoint等のデジタルプレゼンテーションを作成する際に、フォントサイズや文字色などでの留意が必要である（図2、図3）。

スマートボードを利用する場合の PowerPoint等の設定について

- 文字サイズ: 32ポイント以上
- 最低でも28ポイント以上が理想的
- フォント: 原則としてゴシック系
- 明朝系は見にくいため用いない
- 文字色: 白地系の背景に黒字
- 環境によるが、ダーク(黒)系の背景を用いると、入力文字が見にくい場合がある。

図2 設定について

フォントサイズの例

- 読みやすい文字サイズで(28)
- 読みやすい文字サイズで(32)
- 読みやすい文字サイズで(36)
- 読みやすい文字サイズで(40)
- 読みやすい文字サイズで(44)
- 読みやすい文字サイズで(48)

図3 フォントサイズの例

授業配信で生じる技術的制約については後述するが、08年時点では、文字サイズは32ポイント以上を原則とし、フォントはゴシック系を利用することが望ましい。また、文字色は、白地系の背景に黒字（必要に応じて濃青字や赤を用いることは可）、もしくは黒や濃青などの背景に白地（必要に応じて黄色や赤を利用することは可）を用いる。この基準は、一般的な教室（80～150インチ）で、座席後方からでも文字が見やすいという利点があり、授業収録以外でも学生にとっての利便性が高い。

PC画面の収録と併せて、教員・講演者の音声を明瞭に収録することが欠かせない。音声の収録についてはシステム別にマニュアルがあるので、参照されたい。

2.2 ビデオ収録の留意点

ビデオ収録については、収録の対象となる教員・講演者への留意点と同時に、収録を行う側のカメラワークが問題となる。教員・講演者と、収録担当者（学生アシスタント）との事前調整が必要となる。なお、収録を担当する学生アシスタントに対しては、以下のような「手引き」を提示している。

教員の上半身の3分の2程度がカメラに収まるようにし、教員の移動の加減に応じて左右にカメラを移動する（図4、図5）。

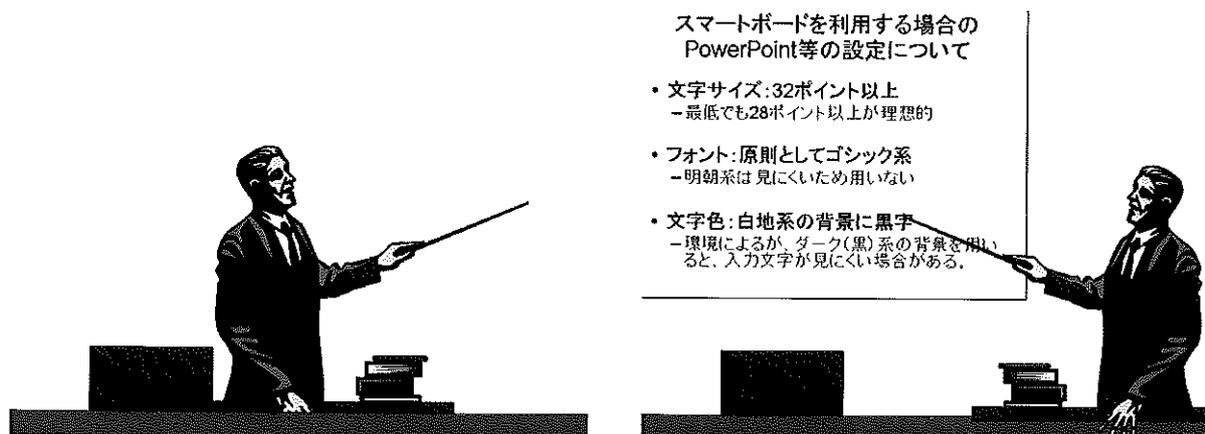


図4 基本的な収録範囲（正面から）

図5 プロジェクタ利用型授業（正面から）

教員の講義の仕方に応じて、カメラの操作を以下のように工夫すること。

板書やPCを用いず、レジメ（資料）を使って講義をする教員の場合：ビデオでの履修者が飽きないように10～15分に1度くらい、ズームアウトして教室全体の光景を1分程度写し、元に戻す。合計2分程度の操作が望ましい。ゆっくり操作する。

黒板を利用する教員の場合：板書している姿（後ろ姿）を捉えるように、カメラを適時、左右に移動する。あちこち板書するタイプの教員の場合、常に教員がカメラ内に入っていなくても良い。字が小さい先生は、ズームアップ（ズームイン）して文字が読めるように、ビデオカメラの液晶画面で、黒板の字がある程度読める程度まで拡大し、しばらくしたら（目安として20～30秒）、教員の姿に戻る。あくまで黒板重視で、教員の姿を必ずしも追い続ける必要はない。学生がノートを取りやすいように工夫すること。

プロジェクタ（PC）を使う教員の場合：写真2のようにできる限り、画面も一緒に映す。画面全てを収録する必要はない。

教室を動き回る教員の場合：教室を動き回る教員の場合、できるだけ引いて（ズームアウト）し、教員の動きに応じて、ゆっくりとカメラを左右に動かすこと。PC画面に基づいた説明を行っている場合は、教員ではなくPCの画面を収録し、動画だけを見ている学生が授業についていけるように工夫すること。また、教員が教壇の上に戻り、教壇で講義を始めた場合は、「教壇の上で講義する教員の場合」と同様の収録を行うこと。

これらの対応以外に、ビデオ収録では音声の管理や、教室の管理も重要な要素である。以下の3点について学生アシスタントに留意を促している。

(a) 音声の管理

授業収録では映像と同時に、映像以上に「音声」が配信されないと授業に集中できません。教員が講義に集中するあまり、マイクが口元から遠ざかり、教室内の音声が聞き取りにくくなった場合は、教員に対して手をあげるなどして、支障があることをアピールしてください。質疑応答など、教員がマイクを使わない場合があります。マイクを使わないと収録できません。マイクを使うよう手をアピールしてください。

(b) 遅刻者のマネジメント

遅刻者はただでさえ、授業全体の妨げになりますが、カメラの前や近辺を移動されると収録に支障を来し、収録記録に残るばかりか、受講生に迷惑をかけます。遅刻者に対しては厳しく対応し、遅刻者がカメラの前を移動しないよう注意してください。

(c) 採光・ライティングの管理

教室がある程度、明るくないと教員がはっきり映らず、撮影の意味がありません。プロジェクタを使っていない場合は、教室を明るくするなどの補助をしてください。

音声の管理は、収録の対象となる教員・講演者だけでは難しいが、「遅刻者のマネジメント」や「採光・ライティング」については通常の授業以上に意識が必要である。また、収録者の負担を減らすためにも、事前に授業展開についての情報提供を行うなどして、「収録を学生アシスタント任せにしない」ことも重要である。

とくに黒板を使う教員・講演者は、以下の2点も留意が必要である。

- (1) 黒板の文字は「大きめ」かつ「はっきり」書くことを意識する
- (2) 文字色は「白」もしくは「黄」を原則とし朱字（赤）は読みにくくなるため、下線や強調の際のみに利用する

なお、ビデオ収録の際は、収録担当者もしくは収録補助者が、表1のような「タイムライン」を記録（付録1）し、後のビデオ編集の際の資料としている。タイムラインでは、話題の大きな転換点や、演習・小テスト時間などを明記する。後述するように90分の授業の場合、タイムラインに基づき3～5分割することを目指している。

表1 タイムライン記録の例

	時刻	概要（出来事、見出し、編集指示等）
1	10:42	授業開始（「前回のフィードバック」）
2	10:58	第2章「大分大学の特徴」開始
3	11:22	演習(1)開始。11:29までカット
4	11:44	YouTubeのビデオを利用。11:48:20までカット

2.3 著作権について

授業配信は、著作権の例外措置がある「教育目的」に該当しないため、著作権者の権利を侵害する可能性がある内容の配信には、著作権者の許諾が必要となる。

書籍（国内出版物、論文）などに含まれる第三者の著作物をPowerPointなどのデジタルプレゼンテーションに含める際は、引用の範囲内で、引用元の情報を同時に提示する必要がある。書籍に含まれる写真や図版などは、引用扱いにならない場合があり、また、本人が撮影した写真であっても、対象物の著作権、肖像権が含まれる場合があるため、事前もしくは配信前に、高等教育開発センターへの事前相談が必要である。

なお、テレビ番組や市販のDVDの配信は一切行えない。例えば、テレビ番組等で本人が出演していても著作権は第三者に帰属しており、配信等の二次利用のためには許諾と相当な費用が必要となる。音楽等についても許諾と、一定の費用がかかる。

著作権者への許諾申請は、高等教育開発センターが行うが、内容によっては対応ができない場合があり、このような場合は編集時に削除することを原則としている。

なお、著作権については以下のサイトが参考になる。

<http://bushclover.nime.ac.jp/c-edu/>

<http://www.nime.ac.jp/tyosakuken/>

3. ビデオ編集について

3.1 ビデオ配信の概要と、配信に必要な編集について

授業ビデオの配信（図6）は、Windows Media Player、QuickTime Video、Real Video、Flash Videoのいずれにも対応し、さまざまなPC環境に対応している¹。また、PC収録の場合はスライドの文字の見やすさや、ビデオ収録の場合は、黒板の文字の見やすさなどに配慮している。

収録したビデオは、市販のビデオ編集ソフトを利用し編集を行い、また配信に必要な処理（エンコード）を併せて行っている。編集作業は原則として、学生アシスタントが実施し、自動化が可能なエンコード等は自動処理を加えている。

¹ 08年度後期にはAdobe Flash Video (FLV) の実証評価を行い、09年度からはFLVを中心に行う。



図 6 授業ビデオ配信画面例

編集に当たっては、Mac OSではiMovie もしくは Final Cut Proを利用し、WindowsではAdobe Premiere を用いている。編集は、とくに教員からの要望がない限りは、

- (1) 著作権法上公開ができない部分（許諾が得られない内容）
- (2) 無音・無動作の部分、個人情報等に関わる部分
- (3) 演習時間

などの「削除」を中心とした編集である。要望に応じて、時間等の明確な指示があればテロップ（文字字幕）の挿入を行い、利用者の利便性を高めることは可能である。

また、前述したように授業実施時に記録したタイムラインに基づき90分のビデオを、3～5つに分割する場合もある。これは配信時にかかるサーバへの負荷を軽減すると同時に、利用者の利便性を高めるためである。

3.2 ビデオ編集の技術的背景と配信までの処理

ビデオ収録の際は、MPEG2での収録が可能なビクターのハイビジョンHDDカメラもしくは、HDVでの収録が可能なソニーの収録システムを利用し、これをMacで処理がしやすいサイズのQuickTime(mov)ファイルに変換し、Adobe Premiere Pro CS3もしくは、Final Cut 6を用いて上記の編集を行っている。

配信のための書き出しはQuickTimeのH.264で行い、480×270の解像度で10～15fpsを原則としている。エンコードはQuickTimeストリーミングの場合は、QuickTime Proで行い、Flash Video(FLV)の場合は、Adobe Flash CS3 Professionalで行っている。Windows MediaやRealの場合は、カノープスのProCoder 3を利用して行っている。

エンコードの際は、ビデオ収録で黒板を使う授業では480×270の解像度で512kbpsを原則として、必要に応じて768kbpsで設定している（図7）。一方、PC画面の場合は512×384の解像度で384kbpsもしくは512kbpsで設定している。いずれもPC画面でノートを取ることができる標準かつ、できる限り少ない帯域での配信を目指している。

ビデオ編集の流れや処理の詳細については、別途技術マニュアルを用意している。

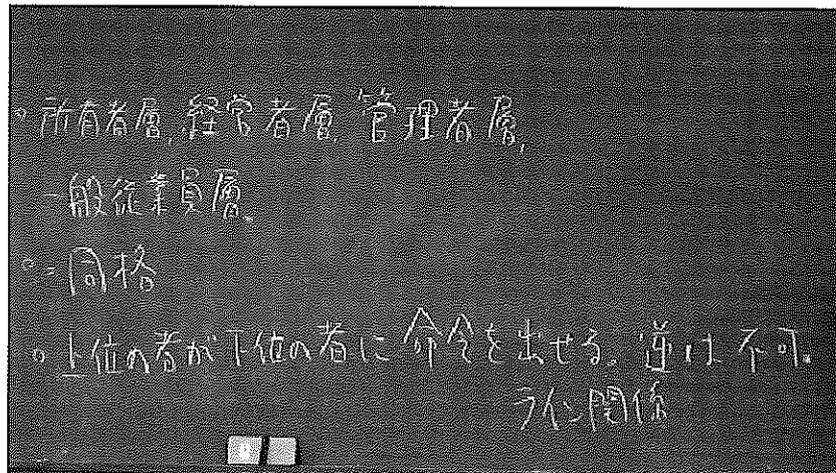


図7 授業ビデオ配信画面例（黒板の例）

4. 授業配信、およびビデオ視聴について

授業ビデオ配信は、高等教育開発センターのWebサイト内に設置している大分大学グローバルキャンパスで実施している。利用者は、ブロードバンド環境（光、ケーブルテレビ、ADSLなど）と、一定のPC環境があれば授業の視聴が可能である。

授業配信は、「誰」に対して、どの程度の「期間」配信するかの設定が必要である。現時点では、対象については以下の4つのニーズに応じて配信先を決定している。

- (1) 履修者のみ（特定の共通パスワード入力）
- (2) 学内のみオープン（学内端末からは誰でも視聴が可能）
- (3) 学内オープンかつ学外からはパスワード
（学外から視聴しようとする場合のみパスワード入力）
- (4) 学内外すべてオープン

履修者のみの制約はApacheのhtaccessの機能を用いて簡易的に実施している。これは授業全体の共通のユーザ名と、パスワードを設定し、知っている人のみアクセスできるようにする仕組みである。例えば、表2のような設定を行うと、ユーザ名とパスワードを知らない利用者は、ビデオの再生ができないことになる。

表2 履修者のみ設定の例

共通ユーザ名：career2008

共通パスワード：hirakegoma

理想的には、(1)については授業履修者（教務情報システム等）と連携させることが望ましいが、現時点では簡易的な方法でしか制約はかけられない。また、高等教育開発センターの事業としては、可能な限り「学内のみ」のオープンもしくは、「学内外すべてオープン」化を目指している。一学期（14～15回）収録の場合は、1回分は公開していただくなどで、学内や学内外の認知度を高めるためのご協力を得たいと考えている。

なお、ビデオ配信の利用履歴は07年後期以降、断片的に取得している。

高等教育開発センターとして、把握可能なのは、

(1) 視聴者のIPアドレス

(2) 利用開始時間

の2点である。学内の視聴の場合は、条件によっては個人を特定することも原理的に可能だが、現時点では利用履歴の取得を個人の特定に結びつけることを利用規程として明示していないため、個人を特定することはできない。

以上

3. FD・授業評価部門

(1) 部門活動の目的

本部門は、旧高等教育開発センターの教育方法開発部門と授業評価部門を統合し、本年度よりFD・授業評価部門として発足した。本部門の主な活動は、全学の教員が3年に一度のFD活動に参加するための事業の企画実施と、全学において統一された授業評価アンケートの立案・作成及びアンケート調査結果の集計と分析の実施である。いずれも本学の教員の教育改善、教育方法の開発のために教務部門会議の要請を受けて本センターの業務として実施するものである。同時に、本学の中期計画・目標において本センターが取り組むよう定められている実施事項をふまえて活動している。

(2) 活動報告

1) 部門会議

本部門の事業を企画、実施するための部門会議を開催した。部門会議の概要は以下のようである。

第1回

日時 平成20年5月30日（木）16：30～17：30

場所 学生センター会議室(旦野原キャンパス)多目的会議室(挾間キャンパス)

- 議題
1. 「魅力的な授業デザインのための新任者研修会」について
 2. 学生による授業評価アンケートの検討について

第2回

日時 平成20年7月3日（木）09：30～10：30

場所 学生センター会議室(旦野原キャンパス)多目的会議室(挾間キャンパス)

- 議題
1. 授業評価の見直しについて
 2. 授業評価実施科目として指定されていない授業の評価について
 3. 自己点検レポートへの協力依頼について
 4. 授業評価報告会について
 5. FD講演会の実施について
 6. 授業公開検討会（オンデマンド）の試行について
 7. その他（本年度の「きっちよむフォーラム」）

報告事項

- ・大分大学ティーチングカフェ
- ・平成19年度前期・後期 概要版と自己点検の依頼
- ・FD講演会（大学院部門会議、保健管理センターと共催）

第3回

日時 平成20年10月11日（木）14：50～15：50

場所 第3回FD・授業評価部門会議 学生センター会議室(且野原キャンパス)

- 議題
1. 大学院・学部合同FD講演会（11月7日）開催について
 2. きっちよむフォーラム2008の開催について
 3. 平成19年度 学生による授業評価：各学部、教養科目の評価について
 4. 平成19年度 学生による授業評価：教員による自己点検レポートの発行時期について
 5. 平成20年度前期 学生による授業評価 速報の発行について

報告事項

- ・オンラインFD授業公開・授業検討会について

第4回

日時 平成20年12月4日（木）16：30～17：30

場所 高等教育開発センター室(且野原キャンパス)

- 議題
1. 日本人学生による英語スピーチコンテスト開催について
 2. 授業公開FDワークショップについて

報告事項

- ・授業公開FDワークショップ(12月15日～)について
- ・FDとeラーニングに関する講演会
- ・「きっちよむフォーラム2008」
- ・学部・大学院合同FD講演会

第5回

日時 平成21年2月6日（金）15：30～16：30

場所 学生センター会議室(且野原キャンパス)多目的会議室(挾間キャンパス)

- 議題
1. 学生による授業評価アンケートについて
 2. FD事業のありかたについて
 3. その他

報告事項

- ・FDとeラーニングに関する講演会(1月30日)について
- ・日本人学生による英語スピーチコンテストについて
- ・その他

第6回

日時 平成21年3月19日（火）09:00～10:00

場所 学生センター会議室(且野原キャンパス) 病院第1会議室(挾間キャンパス)

- 議題
1. 2009年度のFD事業について
 2. 学生による授業評価について
 3. 各学部、各研究科が独自で実施したFD事業について
 4. その他

報告事項

- ・日本人学生による英語スピーチコンテストについて
- ・その他

(3) FD活動報告

(ア) WebClass講習会

① 目的

授業を効率的に進めるための本学のeラーニング支援システムであるWebClassについて、メディア・IT活用部門との共催により、初心者を対象に講習会を実施する。

② 実施の概要

日時 平成20年4月22日（火）18時10分～20時

場所 情報基盤センター(且野原) 第1実習室

講師 牧野治敏（本センター）、山下茂（教育福祉科学部）、尾澤重知（本センター）

本講習会はWebClassの初心者を対象に、「授業コンテンツの作り方」をテーマとして実施した。講習内容は、『WebClassコース管理者マニュアル(Ver. 7.0 2008/4)』による以下の項目とした。

1. WebClass (ウェブクラス) とは
2. WebClass の内部構成
5. 解説 (コンテンツの作り方)
6. テスト (テスト/アンケートの作り方)

講習会では、上記マニュアルに基づいて、項目1、2及び5についての解説とともに、具体的な操作実習のために、実際に授業で使われている「解説(授業コンテンツ)」を閲覧した。閲覧対象は、初心者でも作成や利用が容易な、手入力による例、ワープロやプレゼンテーションを変換した例とした。また、参考としてオンデマンド配信による授業記録ビデオも閲覧した。

これらの作業のあと、実習として「解説」や、簡単な「試験問題（選択肢による解答、記述問題、レポート提出等）」を作成した。

参加者から、WebClassでの多人数の試験方法に関する質問があり、講師等も交えて意見交換を行った。

③ 参加者名簿

所 属	氏 名
教育福祉科学部	中島俊男、山下茂（本センター部門会議委員）
工学部	石松克也、堀内陽子、中島誠
本センター	岡田正彦、尾澤重知、牧野治敏

④ アンケート集計

項 目	平均値
本日のFD講習会全般の感想	4.25
内容等	3.75
進め方・方法	4.0

（5段階評価（n=4））

⑤ 感想・課題

- ・この講習会がある事を知ったのが当日の午後でした。WebClassとは何の事かも知らないで受講しました。事前に概略を勉強しておくべきでした。
- ・試験時のカンニング対策は重要課題と考えます。
- ・WebClassの可能性、有効性については実感することができた。受講者のモニターと講師のモニターの食い違いにより進行がスムーズでないところがあった。
- ・WebClassの利用は積極的に活用したい。
- ・はじめての講習で前期教養に間に合わせたいので、まず、今回はこのレベルでよかったです。また、よろしくお願いします。
- ・難しかったです。数回講習会をお願いいたします。
- ・導入前の講習として役立ちました。有難うございました。

（イ）大分大学ティーチングカフェ

① 目的

本学の教員が日頃授業に関して考えていることや悩みなどを、話しやすい雰囲気の中で、情報や意見を交換することにより、授業改善を図る。

② 実施の概要

日時 A日程：6月17日（火）17時～19時10分

B日程：6月20日（金）17時～19時10分

場所 高等教育開発センター室

2回に渡る日程設定は参加者の便宜を図るためであり、それぞれの内容は独立したものである。

本企画は初めての試みであるので、事前に、本センターのFD・授業評価部門研究員からの意見を参考に、進行方法を検討した。そして、「ティーチングカフェ」は和やかな、発言しやすい雰囲気で行われることを旨とするが、雑談で終始しないように、参加者からは予め「授業での課題、問題点」を挙げてもらい、話題のヒントとすることや、他のFD活動等で提案された授業改善の課題も当日の話題として取り上げて、進めることとした。

A日程：6月17日（火）

司会者から本企画の趣旨説明により、本ティーチングカフェが始まった。続いて参加者の、日頃の授業に対する取り組みや思いを含めての自己紹介があった。この日の参加者は、大学での授業は2年目という教員から20年以上というまで幅広く、それぞれの授業の経験や取り組みの方針を交えての自己紹介であった。当日の主な話題を以下に示す。

<技術的な問題に関するもの>

- 学生とのやりとりの端緒となる効果的な問いかけや指名の仕方
- パワーポイント、板書等による効果的な提示の仕方、ノートのとらせ方
- 授業中の教室内での教師の立ち位置（黒板との距離）
- 効率的なレポートの返却方法

<授業のねらいに関するもの>

- 基礎的な知識を身につけさせる授業のあり方
- 思考の訓練の授業、議論に参加させる授業等の設定の仕方

<学生とのコミュニケーションに関するもの>

- 出席カードを配布する際に、短いコミュニケーションをとること
- レポートの返却とその際の指導方法の実際
- 上記の話題について、体験を元に活発な意見交換が行われた。参加者同士が顔を合わせて話すことで、始めて可能となる意見交換もあり、有意義な時間となった。

まとめとして司会者が本学と他大学のティーチングティップスを紹介した。最後にセンター長からの挨拶により、第1回目の日程を終了した。

B日程：6月20日（金）

A日程と同様に、司会者からの趣旨説明に続いて、参加者からの自己紹介によって、始まった。参加者の経歴と共に授業への取り組みや、学生への接し方等の紹介があった。当日の主な話題を以下に示す。

<学生への対応に関するもの>

- 私語を抑制する効果のあった手法の紹介
- 学習意欲を喚起するための教材の開発や小テストの工夫
- 小テストの実施回数と用紙の形式などの紹介

<学生の受講態度に関するもの>

- 授業中の教室の出入り、教室外での学習時間の減少
- 学生の学習履歴の多様化と、それに対応した提示・配付資料の作り方
- 学習意欲を喚起させるための話題

それぞれの話題が具体的な事例とともに紹介され、積極的な意見交換が行われた。また、外国の大学におけるシラバスの位置づけについての興味深い事例が紹介された。

まとめとして、前回と同様に本学と他大学のティーチングティップスの紹介があり、最後に、西村センター長からの挨拶により、ティーチングカフェを終了した。

③ 参加者名簿

A日程：6月17日(火)

所 属	氏 名
教育福祉科学部	黒川勲、望月聡
経済学部	相浦洋志、藤村賢訓
工学部	加藤義隆
本センター	西村善博、岡田正彦、牧野治敏

B日程：6月20日(金)

所 属	氏 名
教育福祉科学部	園山大祐
経済学部	鴻上喜芳、丸山武志
工学部	飯尾心、和泉志津恵
国際教育研究センター	南里敬三
本センター	西村善博、岡田正彦、尾澤重知、牧野治敏

④ <感想・コメント>

・先日はお世話になりました。8名ほどの少人数で最初は時間をもつかと心配しましたが、それぞれの具体的な課題が提示され、話題は尽きませんでした。そうして見れば、結果的に、10名程度の人数が適当なのかなと思います。

私自身の問題にも、解決への手がかりを得ることができ有意義な時間でした。授業に対する悩みは教員に共通してあると思いますし、特に着任間もない先生方には、率直に疑問をぶつけられる、このような機会は貴重だと思います。

・個人的には今回のティーチングカフェに参加して、大きな収穫が無かったと感じます。そのように感じた理由は参加目的であり、学生が自ら教科書を探さない問題に対するヒントを求めることだったからだと思われます。しかしヒントが得られないことも覚悟の上なので、失望はありません。

今回印象深かったことは、学生指導に対する価値観の違いを感じたことです。私は、社会や受講する学生に対する責任、仕事として対価に見合う作業量、卒研生の質の確保などを意識しています。この違いは分野の違い以上だと思います。授業における手段以前の段階で違いがあったように感じます。

今回紹介して頂いた名古屋大学の「ティーチングティップス」のサイトをざっと読んで、もっと前に知っていれば良かったと感じます。自分で試行錯誤したことで、随分と時間を無駄にしましたし、学生にも迷惑をかけました。

・他の先生方の講義の進め方・アイデアがすごく参考になりました。このFDがなければ、自分の講義の在り方を自主的に考えることはなかなかできないと思いますので、今後も続けていただければと思います。

今回のFDで話の流れで成績評価の話になってしまいました。今回の目的には直接は関係のない話になってしまったのかなと思います。話題がずれた場合に元に戻すようなことを司会の方がなされたほうが良いかもしれません。

・議事の進行としては、議題を事前に調査し、大凡の時間配分をして全体の流れを決めてみてはどうか。教養教育と専門教育に分けた話し合いもあってもよかったのでは。特に、教養科目の位置づけ、内容、評価の水準など、整備しなければならないことが多い。

学部間の学生の意識の違いについては、入学動機の違いをどのように変えていくか、あるいは維持、向上させるかと言う問題について共有できた点は今後の課題。各学部で工夫している、基礎ゼミ、大学入門授業の工夫等については、十分に話し合いができず、残念。最後に、このような試みを、各学部ごとに開催してもおもしろいかもしれません。

・講義中の私語・居眠りへの対処方法、講義資料の有効な使用法、学生の理解度確認について、各先生方と考え方・ノウハウを意見交換でき、参考になりました。

・受講の学生数が多数のときの対処方法について、体験、処方等が聞けて良かった。他大学での学生の授業に対する「やる気」「動機付け」などを参考にして、大分大学全体でも学生に対して大学導入教育として必要ではないかと感じた。

・ティーチングカフェの雰囲気作りに、工夫がされていたと感じました。そのおかげで、参加した教員から率直な意見や経験談が次々と提供され、今後の指導に対するTipsを見つけることができ、とても参考になりました。今後、センターの先生方を含めて今回参加された先生方の公開授業があれば、ぜひ参加したいと思います。また、指導方法の実験など、何かと一緒に指導方法についてプロジェクトをもてれば、うれしいです。今回の企画を立てていただき、どうもありがとうございました。

・授業を推し進めるにあたり、少しは役立つことがあったが、あまり役立つことがなかった。その点は自分で工夫するしか無いのかもしれない。授業を良くしようと皆さん努力されていることがわかり、よかった。

(ウ) オンラインFD授業公開・授業検討会ワークショップ

① 目的

FDの新しい試みとして、インターネットを利用した「授業公開・検討会」を実施し、インターネット上の授業公開・検討会等での情報交換により、教授法・教材の改善や、教育課題と各授業の関連、成績評価のあり方などについても検討を深める。

② 実施内容

ア. 公開対象授業

教養教育科目「アカデミックスキル（調査法入門）」

（高等教育開発センター 尾澤重知 担当。2007年1月23日実施分）

本授業は、社会調査法（質問紙調査）の習得を目的としている。今回、公開した授業は、質問紙作成法についてのまとめと、観察法の基礎として、分かりやすい説明や使いにくい道具のあり方（情報デザイン）を検討したものである。

イ. 実施期間

10月1日（水）～10月16日（水）まで

ウ. 参加条件

大分大学内で授業を担当しており（予定も可）以下の条件を満たす教員。

(1) 学内もしくは自宅等で、Windows Media Player もしくは、QuickTime、Flash Video を利用したビデオ視聴ができること。

(2) 掲示板もしくはメールで、感想コメント等の提出ができること。

(必要なサポートは、高等教育開発センターが行う。)

エ. 実施内容

WebClass上に設定した、授業公開・授業検討会用の掲示板には、期間中に9件の感想、意見及び質問が提出され、それぞれについて、応答や新たな意見が書き込まれた。掲示板で意見交換された、話題の項目を以下のようにまとめた。

- ・ミニッツペーパーの活用について
- ・授業を視聴して
- ・授業を拝見しての感想・意見
- ・調査法入門・感想
- ・大講義室に於ける授業での演習の取り入れ方
- ・教壇から離れる授業スタイルについて
- ・授業ビデオの形式について
- ・授業シラバスの添付
- ・学外からのアクセスの仕方

公開された授業は、大講義室での学生たちとのコミュニケーションによって進行する授業であったので、話題は大講義室での授業の進め方に関することが多かった。特に、学生とのやりとりの仕方についての意見や質問が多く、ミニッツペーパーを書かせること、教室を歩き周り、学生たちにマイクを向けること等の手法やその意図や効果についての議論があった。授業を担当した教員にとっても、自分の授業に対する様々な観点を知る機会となり、今回の企画は、参加者全員にとって、授業改善にむけての示唆が得られたことが成果である。

<参加者>

所 属	氏 名
教育福祉科学部	三次徳次
工学部	和泉志津恵、行天啓二
本センター	西村善博、中川忠宣、尾澤重知、牧野治敏

(エ) 合同FD講演会

大学院・学部合同FD講演会「学生とのよりよい関係を目指して」

① 目的

大学院・学部教育において、学生に対していかなる接し方が望ましいのか、メンタルヘルス関係では我が国の第一人者の一人である講師から、そのヒントを得るために企画・実施する。なお、今回の講演会は学生支援をテーマとしているので、大学院と学部の合同による講演会とした。

② 講演会の概要

日時 平成20年11月7日(金)15:00～16:30

場所 教養教育棟32号教室(且野原キャンパス)

医学部看護学科第211講義室(挾間キャンパス:遠隔講義システムによる配信)

講師 早川東作氏(東京農工大学保健管理センター)

講演に先立ち、本センター長より本講演会のスケジュール説明と講師の早川先生の略歴紹介があった。引き続き、嘉目教育担当理事より、本日の講演では、本学が取り組んでいるアウトリーチGPへの示唆を頂けるのではとの挨拶があった。

講演は、精神健康度測定の例として、森林浴によるリラックス効果をPOMS(気分プロフィールテスト)による数量化の例示と、講師の早川先生自身の学校メンタルヘルスの原点として「朋友を作る場としての大学」の機能に関する話題から始まった。

学生の実態について、学生の悩みに関するカウンセリング利用者の数が年々増加していることや、その相談内容が多岐にわたり、考えられる原因は「多元的」であることが紹介された。また、カウンセリングの多い時期について、従来の入学後の早い時期から、最近は学年の進行に伴って増加していることが紹介された。

学生の悩みの原因の一要素でもあるハラスメントについても、解説があった。ハラスメントという言葉は学術的なリファインを受けていないという指摘があり、ハラスメント概念の由来に関して、「パワーハラスメント」「アカデミックハラスメント」の初出や最新定義として「アカデミックハラスメント」防止等対策のための5大学合同研究協議会報告書2004、2005の紹介があった。さらに新しい問題としてハラスメントの被害者と加害者の逆転についても言及された。

メンタルヘルス不全の学生への対応として、問題を教員一人で抱え込まないように、情報を共有化すること、教員自身の人生観・教育観を学生に押しつけないこと、現代日本では青年期は30才までと心得ておくこと等の提言もあった。学生に対する各大学の取組として「メンタルヘルス協議会平成17年度報告書(分科会助言者、大分大学藤田長太郎先生)」から事例の紹介があり、この報告書が大変参考になるとのことであった。

学生を理解するためには、多くの大学教員が経験した学生時代とは現在の学生達が置かれている状況を認識する必要があるとの観点から、文部科学省統計による大学生の数と教員一人あたりの在学学生数の変遷が示された。近年においては、大学教員一人あたりの在学学生数は、小学校のそれとほぼ同数であることから、教員の負担も増えているとのことであった。

最後に、講師の早川先生から、学生が受講する「教員心理」「生徒指導論」を大学教員が聴講し単位をもらう、教員自身の精神的健康維持とゆとりを回復する、授業評価だけではなく個人指導や研究室経営による教員評価があってもよいのでは等の提案があり、講演は終了した。

講師との質疑応答に関連して、本学保健管理センター藤田長太郎先生からコメントがあった。

最後に、本学の保健管理センター所長寺尾英夫先生から、大変有意義なご講演をいただいたとのお礼の挨拶があり、講演会は終了した。

③ 意見交換会の概要

講演会の後、講師の先生を囲んで、17時より約1時間の意見交換会を開催した。この10月にオープンしたばかりの「びあROOM」のラウンジを会場として、和やかな雰囲気の中で意見交換会が進められた。

参加者は学生支援に直接に係わる教職員を主としており、主な話題は、学生支援の現状の傾向、学生の気質が変化していること、実態に基づいた対応方法、相談窓口の明確化、集団での支援体制のあり方について取り上げられ、早川先生の助言をもとに、活発な質疑応答や意見交換が行われた。

④ 講演会への意見や感想

- ・教員のメンタルヘルス、教育学必要論など、大変有意義なお話しでした。ありがとうございました。
- ・具体的取組の結果についての客観的評価のお話しを聞けると想定していたが、こんな事をしたら良いかも知れないという提案であったようだ。
- ・もう一度、早川先生のpart 2をききたいです。
- ・メンタルヘルスの変容についてが、分かりやすかったです。被害者なのか加害者なのか。精神病の存在もそうですが、人格障害との鑑別等が困難で苦勞します。もう少し個々の事例についてご教示いただければと思いました（アカハラ、パワハラ等）。
- ・今日の早川先生のご講演大変ためになりました。「学生によかれ」と思っていたことがハラスメントになってしまう時もあることに驚きました。自分の担当科目以外の科目で同一学生の出席状況や成績がわからないことや、学生の家族環境などまったくわからないことが多いので、教員間での情報の共有などが必要だと思っています。
- ・カメラを不必要に振られると酔いそうです。演者の先生を追いかけるのも大切なことかも知れませんが、スライドを見せていただいた方が良いかと思います。
- ・非常に重要なテーマであり、有意義でした。
- ・参考になりました。学生の親に問題のある場合についてもっと聞きたかった。
- ・とても参考になる良い講演会だったと思う。ただ、講演会の方法を企画準備者に学んで欲しい。（照明が明るかったりとか、細かなことですが）教員としてのメンタル面、研究者としてのメンタル面、大学の特に理系の教員は両面で問題を抱える可能性があり、それらについても焦点を当てた講演会を企画して欲しい。“Best Teacher賞”をもうけることは良いことだと思う。理系では研究室に配属されたから問題が起こる可能性もあるが、それ以前、研究室に配属決定される時点で問題を抱える可能性もあり、その時点へのケアが必要だと思っています。（直接関係はないが、昨今の学生の薬物汚染特に大学としてのケアが必要だと思っています。学生のメンタルヘルスから起因する問題の具体例だと思っています）
- ・最近、対応を誤ると保護者（モンスターペアレント）が出てきて、教員にもものすごいストレスがかかっている。大学としてどのように対応すればよいのか知りたいです。
- ・とてもわかりやすかったです。「なるほど」と思うことがたくさんありました。
- ・最後の質疑応答であった情報の共有の重要さが印象に残りました。
- ・大分大学内で事例報告会を企画してはどうでしょう。
- ・メンタルヘルスをもっとやってほしい。

・今後の学生指導をする上で、とても参考になりました。藤田長太郎先生のメンタルヘルスの講演会とイコールパートナーシップの二宮先生のパワハラ講演会を合同にして二部制のFDを開いてはいかがでしょうか。カウンセラーと法律家の異なる見方やとらえ方に興味があります。学生の言動から教員を保護するケアも、これからは必要だと思いました。

・具体的な事例が紹介されたことが参考になった。極端な事例を紹介したとのことであるが、中には類似の経験があり、決して極端な例ではないと思う。本学の事例を共有する機会があれば（個人情報保護の問題はあるが）、学生指導の参考になると思う。

・大変参考になりました。授業や研究室運営の中でも本日の話に考えさせられることが多くありました。良かれと思ってとった行動が思いもよらない結果になったりすることもあります。粘り強く取り組んで学生に向き合っていきたいと思います。

・具体的事例が非常に参考になりました。

・学生のメンタルヘルスに関するFD講演会は、今後も継続して実施していただきたいと思います。今回の講演は大変参考になりました。自分で気づかない点が多くあり、目からウロコが取れた感じがします。

・興味ある話でしたが、この問題はもっと時間をかけても良いと思います。

・学生がこれだけ多くの精神的な課題を持っている、多種多様な精神障害を抱えていることにビックリした。小・中学生とよく似たものではあるがレベルが違う。30才まで青年期というものも「なるほど!」と思う。ハラスメントが出やすい環境、人的関係を日常的に作っておくことの大切さがわかった。

⑤ 講演会参加者名簿

所 属	氏 名
教育福祉科学部	仲野誠、高濱秀樹
経済学部	中達俊明、宮町良広、吉田初志
医学部	上野徳美、佐藤晶子、久保田直治、佐野孝之、田中賢一、万年和明、長谷川英男、広瀬英子、由布文枝、阿部航、藤原作平、横井功、
工学部	田中充、濱本誠、松尾孝生、戸高孝、上見憲弘、末田直道、高坂拓司、近藤隆司、藤田米春、大久保志津恵、鹿毛一之、前田寛、井上正文、真鍋正規、広本太郎、宇都宮孝一、西野浩明、原恭彦、大賀恭、石川雄一
その他	嘉目克彦(教育担当理事)、寺尾英夫、藤田長一郎、甲斐道子、高橋陽子(保健管理センター)、渡辺幸恵、大塚洋子(ぴあ ROOM)、武宮律子(キャンパス SW 相談員)、本城光信 都築亜矢子、安部梨沙、小林浩司(教育支援課) 西村善博、中川忠宣、岡田正彦、尾澤重知、牧野治敏(本センター)

(オ) 先進的eラーニング研究会

メディア・IT活用部門との共催により、松田岳士氏（慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構）を講師として迎え、表記の研究会を開催した。

① 目的

eラーニングの先進的な事例をご紹介いただくとともに、講師、参加者相互の意見交換により、本学でのeラーニングのあり方を検討する。

② 実施の概要

日時 11月14日（金）

場所 高等教育開発センター室（学生センター2階）

講師 松田岳士氏（慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構専任講師、青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター客員研究員）

内容

講師の松田岳志氏の経歴の紹介があった。その経歴との関連からeラーニングを取り巻く世界的な動向とともに、我が国での先進的な取り組みとして、慶應義塾大学や青山学院大学での具体的な事例について、詳細な紹介があった。

後半では、講師と参加者との意見交換の場となり、活発な意見交換がなされた。

③ 参加者名簿

所 属	氏名
経済学部	豊島慎一郎、高見博之、宮町良広、松岡輝美
工学部	和泉志津江、真鍋正規
国際教育研究センター	酒井恵美子、金森由美
総合科学研究支援センター	万年和明
地域共同研究センター	森岡勝彦
イノベーション機構リサーチフ ァクトリー	梅木育世
高等教育開発センター	西村善博、中川忠宣、岡田正彦、尾澤重知、牧野治敏

(カ) きつちよむフォーラム2008 (学内合同FD研修会)

① 目的

本学の学生と教職員が一堂に会し、大学教育における課題や、教育技法の改善について検討を深める。

第1部「学生教職員教育改善シンポジウム」では、学生から教育、授業について日頃疑問に思っていること、改善してほしいこと、教員に求めていることを挙げ、学生の視点からの授業やカリキュラムへの疑問・意見に対して教職員とともに改善策を検討する。

第2部「教育課題・教育実践検討会」では、全学・学部の教育課題、教育技法の改善等について実践報告を元に検討する。

② 実施の概要

期日 平成20年11月26日 (水曜日)

場所 且野原キャンパス教養教育棟32号教室

抜間キャンパス看護学科第211講義室(遠隔授業システム)

内容

開会にあたって、西村センター長より開会の挨拶と、嘉目教育担当理事より開会の辞があり、本フォーラムへの期待が述べられた。

第1部「学生教職員教育改善シンポジウム」は市原教授(経済学部、本センターFD・授業評価部門センター員)の司会により進められた。本シンポジウムの主旨、今回の報告では全国学生調査のデータを使用する旨の紹介があった。

報告者の論題は以下のとおりである。

報告 1	ワーキングスキル - アルバイトは単位認定できるか -
報告 2	DS を使って授業改善
報告 3	英語統一カリキュラムの提案
報告 4	少人数クラス VS 大人数クラス

報告1は、学生がアルバイトで習得するスキルを単位認定することの可能性への提案であった。アルバイトで学生が得たもの、本学での「インターンシップ」、「教育実習」、「第二外国語の検定資格」等による学外活動の単位認定の例、授業シラバスの例、他大学での「アルバイトの単位化」の事例が、その根拠として紹介された。

具体的な単位数と、講義との関連について質問があり、単位としては2単位を考えていること、講義をきっかけとしてアルバイトを続けるとの回答があった。

報告2は、携帯型ゲーム機(ニンテンドーDS、以下DSとする。)を授業に導入することで、学生が個々のレベルに合った学習活動を主体的に進めることができるとの提案であった。他大学での実践例、利用可能な学習ソフトの例、DSの導入による長所と短所が紹介された。充電の問題、費用、1 Semester あたりのソフトの数について質問があり、充電器の貸し出し、DSの価格、1 Semester 1ソフトが目安になるのではとの回答があった。

報告3では、大学に期待する英語授業の内容や授業方法について提案があり、それを実現するための参考として、他大学の事例、本学でのよい事例、TOEICの活用方法等が紹介された。TOEICの受験目的について質問があり、発表者の知人の例が紹介された。

報告4では、学生の授業への意欲を向上させ、効果的な授業とするために、大人数クラスと少人数クラスの授業、それぞれの長所、短所が寸劇とともに紹介された。大人数のクラスではグループワークを取り入れる、学生とのコミュニケーションを図る等の工夫によりよい授業になるとの提案があった。

大人数クラスと少人数クラスの境目について質問があり、約40人が境界であるとの回答があった。また、学生同士のコミュニケーションが学習意欲につながるのかとの質問に対して、それは授業を楽しいものにすると回答があった。

4件の報告の後、全体での討議となった。

英語の授業についての議論として、学生のニーズが多様であること、授業選択の幅が学部により異なること、シラバスと内容との関連が取り上げられた。クラスの規模については、教員と学生とのコミュニケーションの問題としても考えられるとの意見があった。アルバイトの単位化の是非については、その意義やインターンシップとの違い等が議論された。これらの議論の中でも他大学の例が紹介され、今後、多様な学習方法が求められることが確認された議論でもあった。

終了時刻となり、第1部を終了した。

第2部「教育課題・教育実践検討会」の開会にあたり、羽野学長より挨拶があった。「きっちよむフォーラム」が本学の教育改革に成果を上げていること、教育の質の向上がますます重要な課題となっており、熱心な議論をお願いするとの挨拶があった。

検討会では、西村センター長の司会により、学内の3名（古城教育福祉科学部教授、杉田医学部教授、越智工学部教授）からの報告を行った。それぞれの論題は以下のとおりである。

報告 1	大分大学における教員免許状更新講習への取り組み 古城和敬（教育福祉科学部副学部長）
報告 2	社会人院生を対象とした少人数ゼミでの WebClass の活用 杉田聡（医学部）
報告 3	JABEE への取り組みについて 越智義道（工学部教務委員長）

古城教授による報告1では、最初に、教育福祉科学部が現在取り組んでいる3つの課題「1）学部での教員養成として平成25年度より始まる教育実践演習。2）大学院での教員養成としてとしての教職大学院。3）新たな教員免許更新制。この報告は教員免許更新制」についての本学の取り組みの紹介である。

教員免許更新制の概要が資料に基づいて説明された後、本年8月に実施された予備講習について、その講座内容や、応募者が多く講座定員を増して開講したこと、実施された講習会の評価、さらに、来年度以降は本年度の約10倍の規模での実施となることが報告された。また、実施のためには全学の教員の協力が必要であるとのお願いがあった。

杉田教授による報告2では、WebClassの活用によって社会人院生の学習を改善する方法について、実践例をもとに報告があった。仕事と学習の両立が難しい社会人にとって、時間や場所の制約が少なく、レポート等のピアレビューが容易なWebClassの利点が、その教材とともに紹介された。一方で教材作成に手間がかかること、学生が積極的にアクセスしないことや著作権処理の問題といった、WebClassを取り巻く環境の整備に関する提言もなされた。これらの問題を克服する手法の一つとして他大学でのOCW(Open Course Ware)の紹介があった。

越智教授による報告3では、工学部（知能情報システム工学科）におけるJABEE（日本技術者教育認定機構）への取組みについて報告された。JABEEが設定する学習・教育目標、制度、審査項目の紹介があり、続いて「知能情報システム工学科」の教育理念、学習カリキュラム、卒業後の進路等がJABEEとの関連で紹介された。特に学習の達成度を評価するための方法と基準、教育点検システムが詳しく説明され、JABEEに取り組んだ事による学習効果、今後の課題について述べられた。

報告の後、西村センター長より3件の報告に対する質問があった。古城先生には、来年度への準備について、杉田先生には、準備と会議室（WebClass）の運営にかける時間について、越智先生には、4年生時での分属は学生の希望によるのか、また、他の学科での状況とGPAとの関連についての質問であった。

古城先生からは、大分県の教員数、10年に1度の受講、別府大学も会場であることを考えて約1000人が本学で受講すると考えている。教職科目担当者は他大学、県教委、附属学校からの協力を考えているとの回答があった。

杉田先生からは、WebClassに費やした時間は接続記録によると累計で1日を超えていた。また、WebClassの操作よりも一般の授業と同様に学術書の読み方、レポートの書き方等の時間が多かったとの回答があった。またWebClassを授業に利用されている先生方に対する評価の面での配慮を求められた。

越智先生からは、学生のコース変更は学生の希望によるが、教員とよく相談している。他学科の取り組みについては、1学科で申請の準備、その他の学科でも検討を進めていると聞いている。GPAが高いことについてはJABEEの審査を考慮したものだが、今後については検討しているとの回答であった。

③ 第2部へのアンケート（教職員のみ）

項目	平均値
討論会全体の感想	3.8
テーマ・内容	3.9
進め方・方法	3.6

〈5段階評価(n=19)〉

④ 感想や課題（教職員のみ）

- ・教員免許講習の話と、他の2つの発表は別に切り離してやっていただいた方が良かった。
- ・テーマを減して検討時間を増やした方がよい。
- ・医学部の方での発表がとても興味深かったので、遠隔地とのネットワークを利用した報告には技術上の問題があるとはいえ、機会をつくってぜひ続けて頂きたいと思いました。JABEEの中で、教養教育の人文・社会の科目指定については調整がすぐには難しい面もあるかと思いますが、継続的に要望を上げて実施に向けて調整されるのが良いのではないのでしょうか（何が必要なのか、外からはよく分かりませんので）。WebClassについては、今後の検討課題として各学部でも検討が必要ではないかと考えました。
- ・医学部会場でも対応できるスタッフを配置すべき。
- ・教員免許講習の概要が理解できたのがよかった。WebClassは準備とケアが大変だと思います。指摘されていたように、ぜひ学内での教員評価の対象にしていきたい。

- ・学部毎のとりくみについて特色のある話を聞くことが出来た。分野が違うことで、注目していることや問題点も多種多様で大変参考になった。印刷されたものを読むことで、同様の情報を得る場合と比べ、どこに力点を置いているのか等、紙面には表わしにくいことが伝わったように感じる。
- ・FD研修なのか職務上の説明（情報提供）なのかが、発表を聞くことから不明であった。本フォーラムを通して“研修”で終わるのか、総括を通して新しい方向性をどこかで提案していくのでしょうか。
- ・プレゼン1つずつ討論できた方が良かったと思います。
- ・各学部の直面している課題ととりくみを知る機会となって非常に良かった。他のFD講座との関係-目的や役割-が企画や広報の段階で示されていると位置づけが分かりやすい。また、FD講座選択の参考になるかも。
- ・テーマをもう少し関連のあるものにするると議論がしやすいのでは？発表の後の総括討論の時間をもう少し長く取るとよい。
- ・個々のプレゼンはそれぞれ興味深かったが3題がどういう風に関連しているのかわからなかった。参加者が少ないことは残念だった。授業の改善に力を入れようとしている教員へのバックアップをこれからもよろしくお願いします。

⑤ 参加者名簿（教職員のみ）

所属	氏名
教育福祉科学部	工藤修一、高濱秀樹、山岸治男、黒川勲、松田聡、仲野誠、藤井弘也、西山佐代子、
経済学部	高見博之、阿部誠、市原宏一、相浦洋志、片山准一、高山英男、鶴崎清貴、城戸照子、宮町良広、小野宏、
医学部	久保田直治、佐藤晶子、長谷川英男、森本梓、杉田聡
工学部	大賀恭、大谷俊浩、戸高孝、越智義道、長屋智之、福田亮治、小林正、工藤孝人、秋田昌憲、緑川洋一、和泉志津恵
その他	羽野忠(学長)、嘉目克彦(教育担当理事)、工藤達也、尾崎幸司(教育支援課)、西村善博、岡田正彦、中川忠宣、尾澤重知、牧野治敏(本センター)

(キ) 授業公開・検討会

① 目的

教員相互に授業を公開。参観しその後検討会を実施することで、教授法・教材の改善を進める。

② 実施の概要

公開された授業とその担当者、及び参観者の人数は以下のとおりである。

日程	「公開科目」(分類) 担当者(所属)	参観者
15日(月) 2限	「人間と教育」(教養科目) 山崎清男(教育福祉科学部)	4名
16日(火) 1限	「地域と情報」(教養科目) 藤井弘也(教育福祉科学部)	7名
17日(水) 1限	「人間関係学*」(教養科目) 吉村匠平(県立看護科学大学)	2名
〃 2限	「エレクトロニクスの世界Ⅱ」(教養科目) 佐藤輝被(工学部)	3名
〃 3限	「キャリアデザイン入門」(教養科目) 尾澤重知(本センター)	2名
18日(木) 2限	「西洋経済史Ⅱ」(専門科目) 市原宏一(経済学部)	2名
〃 2限	「経営学Ⅱ」(専門科目) 薄上二郎(経済学部)	3名
19日(金) 2限	「情報科学の世界」(教養科目) 行天啓二(工学部)	3名

(*大分県立看護科学大学での授業を、遠隔授業装置により且野原キャンパスで参観した。)

授業検討会A日程

日時 12月19日(金) 16時30分～18時

場所 学生センター会議室

対象授業 「エレクトロニクスの世界Ⅱ」 「キャリアデザイン入門」 「西洋経済史Ⅱ」 「経営学Ⅱ」

授業検討会は、授業担当者による当日の授業についての説明と、日頃授業を進めるにあたっての考えや工夫についての参加者からの紹介で始まった。

主なものは、「教養の授業では他学部の学生を相手にするため、興味や関心を持たせる工夫をしている」「説明を具体的にするため、できるだけ実物を提示するよう心がけている」「小テストやライティングにより学生の反応を確認して、授業を進めるようにしている」「90分の授業をさらに細分化することで授業に飽きさせない」などであった。また、「オムニバス型授業の進め方が難しい」「高等学校レベルの内容から説明しなければならないので授業展開が難しい」等の意見もあった。

授業担当者の説明に対する質疑応答の後、意見交換会となった。

分かりやすい授業とするための工夫については、参観者からも「テーマを区切り受講生を飽きさせないようにする」「小テストを毎回実施している」等の事例が挙げられた。小テストについては、ほとんどの先生が個別の返却はしていないものの、データや意見を集約して、授業に反映させている等の紹介があった。

オムニバス型の授業については、「メリットもデメリットあるので、コーディネーターの役割が重要である」という意見や、「チームティーチングとしての進め方も検討できるのではないか」との提言もあった。

学生の遅刻についても話題となり、「きちんと出席している学生からの不満が多い」「遅刻する学生への教員の対応がまちまちであると実効があげにくい」等の意見があげられた。遅刻学生への対応について、多様な意見があったが、「遅刻の対応について全学一致の基準が必要なのではないか」との意見について多くの賛同の声があった。

授業検討会(B日程)

日時 12月22日(月)16時30分～18時

場所 学生センター会議室

対象授業 「人間と教育」 「地域と情報」 「人間関係学」 「情報科学の世界」

授業検討会は、授業担当者による授業のねらいや工夫の紹介と同時に、参観者からの質問や意見を交えた意見交換となった。

本検討会の対象となった授業では、遅刻した学生への対応が極端に異なる授業が提示されたことで、遅刻に対する考え方の違いも含め、熱心な議論となった。遅刻については、「教室の学習環境を維持するために、厳しい対応が必要である」との意見が出された一方で、「遅刻した学生を注意することで、教員自身の気分が悪くなるので、注意はしないようにしている」との意見もあった。また、教室の規模によっても遅刻した学生への対応は異なり、特に大教室では難しいとの意見であった。工夫の一例として、遅刻した学生には入室の際に教室の前方で名前を書かせることで、授業への参加を認めつつ間接的に注意を喚起する方法が紹介された。

板書の仕方については、単調になりがちなパワーポイントに意図的に空欄を作ることで注目させる方法や、教材提示装置による手書きの文字をスクリーンに映しながら説明する方法が紹介された。手書きを教材提示装置でスクリーンに映し出す方法は学生のノート筆記や思考の速度に合わせて授業を進められることや、先に書いた紙を再利用することで授業の振り返りがしやすいなど、参加者から賛同があった。

授業の進め方について、「授業中は学生たちに徹底的に考えさせる時間とし、知識を伝達することは授業時間外の課題としている」「配付資料はすべてWebClass上で行う」「授業終了時のライティングにマークシートを使う」「説明の途中で『あー』『えー』等の接続音を使わないように意識している」等、事例にもとづく具体的な紹介があり、他の参加者からは、大変に参考になったとの意見があった。

③ 感想・意見

・今回は、私が担当している講義を、授業公開の対象講義とさせていただきました。授業検討会において様々なご意見をいただきまして、ありがとうございました。また、他の先生方の講義の工夫も伺うことができました。大変参考になりました。

今後、様々な先生方が工夫されている講義方法を、授業準備・授業の進め方・資料提示方法などの項目でまとめていただけると、各教員の授業組み立ての参考になると思います。また、学生からの評判が良い授業については、その講義方法を映像とともに積極的に公開していけば、各教員の参考になると思います。

・今回「地域と情報」と「情報科学の世界」に参観した。いずれの授業も提示資料をプロジェクターまたはパソコンからスクリーンまたは大型テレビに映し出しゆっくりと説明されていた。講義を始める前に資料を数枚配布し、講義中は紙にキーワード、図や簡潔な文章をTVやプロジェクターに映したり書いたあとゆっくり読み上げ、基本的な用語や文章の書き取りや穴埋めを行うやり方は、専門のさまざま異なる学生が受講する教養教育の講義においては効果的であると思う。それに加え1週ごとにテーマを決めて終了させ最後に小テストを行う形式は、テーマごとの理解を深め、90分間の講義に集中できるいい方法である。パワーポイントだけの講義では学生がその内容をノートに記録しない傾向があり、打開する上で大いに参考になった。

・授業検討会に参加して、今回は特に授業での遅刻の取り扱いについての議論や、板書の在り方、双方向性（参加型授業）の確保方法など具体的な検討がなされ、非常に参考になりました。今後も授業に対しては熱心な先生が多いことから、きつちよむフォーラムなどの取り組みを継続して行く必要があると思います。

・授業を公開していただいた先生及び検討会に参加された先生方の思いや手法を伺って、主体である学生がいかに学べる環境（授業）を構成していくかを常に念頭に置いた授業構成をされていることを知ることができました。

具体的には、板書や資料提示の方法、授業中のワーク（演習）などの取り入れ方、90分という時間の効果的な使い方など、学生に理解させるための工夫や手法が勉強になりました。さらに、現在の学生の様子や課題、授業への遅刻の対応等々多くのことを学ばせていただきました。こうした授業検討会から学んだことを、自分の授業にどう生かしていくか考えたいと思います。

・「（自分の）授業を良くするためにはどうすればよいかの観点から、話しあうとのことであったが、ディスカッションが進むにつれ、学生の学力低下、マナーの問題へと話が流れてしまったように感じました。コーディネーターの方が、何度なく舵取りを試みておられましたが、学生に対する不全感という大きな主旋律の根強さを感じざるを得ませんでした。確かに、このような形で「ガス抜き」をすることに一定の効果はあるのかもしれませんが、しかし、学生に対する不平不満、失望感をあげつらった次の段階のことを考えないと、授業の改善には結びついていかないのではないかと思います。学生がある日突然変化して、理想の学生になることはまず期待できないのですから、教員が学生との関わりの中で、自分の在り方を変えていくことを模索する方が現実的だと感じました。学生の語彙の少なさを嘆くばかりでなく、大学教育の中で学生の語彙を増やす方法について考えることが必要であり、そのためのFDではないかと感じました。

・検討会では、授業を公開してくださった先生だけではなく、他の先生方からも魅力ある授業をどのように行うことができるのかについて色々な意見を聞くことができ、大変参考になりました。しかしながら、短い検討会では、十分な討論を行うことができず、いずれの検討事項についても、少々中途半端に検討が打ち切られた点を残念に思いました。

④ 参加者名簿

A日程

所属	氏名
経済学部	市原宏一
工学部	佐藤輝被
その他	長池一美(国際教育研究センター)、 西村善博、岡田正彦、尾澤重知、牧野治敏(本センター)

B日程

所属	氏名
教育福祉科学部	古賀精治、藤井弘也、山崎清男、池崎八生、中島俊男、 富田礼志
経済学部	高見博之
工学部	行天啓二
その他	長池一美(国際教育研究センター)、吉村匠平(大分県立看護科学大学) 西村善博、中川忠宣、岡田正彦、牧野治敏(本センター)

(ク) FDとeラーニングに関する講演会

① 目的

本学でのFD活動推進のために、他大学での先進的な取り組みを紹介していただき、意見交換を行う。また、平成20年度概算要求（政策課題対応経費）：「授業のオンデマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組み」の事業の促進のために実施する。

② 概要

日時 平成21年1月30日(金)16時30分～18時

場所 教養教育棟32号教室（旦那原キャンパス）

医学部看護学科第211講義室（挾間キャンパス：遠隔授業システムでの配信）

講師 加藤由香里氏（東京農工大学大学教育センター）

江木啓訓氏（東京農工大学総合情報メディアセンター）

内容

講演に先立って、西村センター長から開会の挨拶と講師の加藤先生、江木先生の紹介があった。引き続き、嘉目教育担当理事から、先進的な取組の紹介によって、今後の我々の取り組みにとって有益な情報が頂けるものと期待している旨の挨拶があった。

講演1 「FD推進の立場から—ICT推進のためのセンター連携とeティーチング・ポートフォリオ開発—」

講師 加藤由香里（東京農工大学大学教育センター准教授）

講演は、①大学教育センターの紹介、②ICT利用のためのセンター連携、③eティーチング・ポートフォリオの紹介の3点から行われた。

最初に、大学教育センターの概要とセンターが実施するFD活動についての説明があり、続けて、教育評価の実施方法、FDセミナー・ワークショップの実際、センターからの情報提供や情報発信等が紹介された。

次に、ICTを活用したFD活動の促進を目的として、大学教育センターと総合情報メディアセンターの連携によるセミナー等の紹介があった。二つのセンターが連携することで、大学教育のPDCAサイクルが機能すること、研修と日常の教育活動が結びつくこと、教育改善活動が教員間への横の広がりを見せること等、実際の事例が紹介された。また、FD活動はピアレビュー型に、そして学科・専攻中心の教育改善へ展開されるとの提言があった。

第3の話題はeティーチング・ポートフォリオの紹介であった。これは、授業の動画と音声を記録し、また、その記録を再利用することで、教員集団による授業研究や個人による授業改善に資するシステムであり、具体的な授業場面の提示と共にシステムの説明があった。

講演の後、授業が改善された事例や、全学FDに対するセンターの位置づけ等に関する質疑応答があり、加藤氏による講演が終了した。

講演2 「eラーニング推進の立場から—ICT活用促進のための教育支援—」

講師 江木啓訓（東京農工大学総合情報メディアセンター助教）

学内に設置された二つのセンターが連携することでeラーニングを推進するとの観点から、総合情報メディアセンターの果たす役割についての講演であった。

講演1と同様に、総合情報メディアセンターの概要説明の後、eラーニングに関するセミナーの実施例が紹介された。

ここで紹介されたセミナーは、①講義と実習による約3時間のセミナー、②一週間連続した昼休みの日替わりメニューによるセミナー、③演習を含めた1時間程度のセミナーというように多様な形式の試みであった。eラーニングに関するセミナーについては、参加者のレベルに合わせた内容設定、開催時期、セミナーの形式等の決定に難しさがあり、検討が必要であるとのことであった。eラーニングに関してはITスキルを持った学生アシスタント（TA、SA）の養成によって、大学全体のITスキルを上げるとの提言もあった。

また、オンラインによる授業公開の取り組みについて紹介があり、授業観察を日常化するための教室の整備や、授業記録の蓄積システム等、センターの取り組みが紹介された。

質疑応答では、eラーニングを利用した社会人学生の指導や学生の評価、教員の教育評価導入への経緯、eラーニングセミナーのあり方が取り上げられた。

③ 参加者名簿

所属	氏名
教育福祉科学部	高濱秀樹、仲野 誠
経済学部	吉田初志、宮町良広
医学部	長谷川英男、池田八果穂、藤原作平、久保田直治、佐藤和子 加藤美由紀、吉良いずみ
工学部	大賀 泰、末田直道、富来礼次
その他	嘉目克彦、西村善博、岡田正彦、尾澤重知、酒井恵美子 小林浩司、倉本 将、都築亜矢子、安部梨沙、富金原麗 拝田透生、牧野治敏

④ 感想・意見

- ・他の大学の取り組みが聞けて、色々参考になった。それぞれいろいろ工夫を凝らしている。大学も変わりつつあるという印象を受けました。
- ・内容として大変参考になる点が多く、新しい興味も喚起されました。それだけにもう少し時間があると検討が深められたのでは？
- ・eラーニングに関して参考になった。教員の表彰制度は本学も導入しても良いと思う。
- ・今日の内容は一般教員向けではなかったのでは？（eラーニング推進する人向け？）良くなった具体例をもっと詳細に、デメリットに対する対策も含め説明して欲しかった。

- ・基礎学力が不足している学生向けにeラーニングを活用して欲しい。
- ・eラーニング・ポートフォリオにしても、eラーニングにしても実際に使えば、改善や学生のために役立つと思います。授業科目が多い教員には、なかなか使える時間がないのが実情でしょうか。
- ・自分にはレベルが高すぎる。
- ・本学でもメディアセンターと連携を強め、eラーニングへのサポート体制を整えて欲しいと思いました。東京農工大のように、あらかじめ履修学生を登録する等、サポート体制が充実していると、利用しやすくなると思いました。ありがとうございました。
- ・さすが農工大と感心しました。
- ・極めて有意義であった。参加者が少なかったのは残念である。
- ・予算を伴うFDはなかなか困難だと思う。
- ・ピアレビューは同分野の教員間では可能だが、異なる分野では困難ではないか。
- ・学生による教育支援について、教育評価はどの様に関わってもらっているのか気になった。
- ・eラーニングはやはり観念的なことではなく、実際の使い方、作成方法などの講習が良いと思う（これまで開催されたようだが出席できなかった）。

(ケ) 大学院FD講演会「大阪大学大学院における教育改革」

① 目的

大学院設置基準の改正（平成19年4月1日）により大学院教育におけるFDが義務化されたことを受け、本センターが大学院部門会議との合同で、大学院向けのFD事業を実施することを目的としている。

② 実施の概要

時間 平成20年7月24日(木) 15:00~16:30
 場所 教養教育棟32号教室（且野原キャンパス）
 医学部211教室（挾間キャンパス：遠隔講義システムによる配信）
 講師 伴金美氏（大阪大学大学院教授）

講演に先立ち、西村センター長より講師の伴先生の略歴紹介と、嘉目教育担当理事より挨拶があった。

講演は、大阪大学大学院での先進的な取組みである「存在感ある若手研究者養成のための教育改革（大学院経済学研究科教育のグローバルスタンダードを目指して）」について、その事業の目的、実際の教育プログラム、評価に関する全般的な解説であった。

目的については、「新時代の大学院教育」（答申）に示された「1. 大学院教育の実質化」、「2. 国際的な通用性、信頼性の向上」を受けての研究者養成のためのイニシアティブとして立案したと説明された。また、申請書類作成に当たっては答申の内容を十分に反映しなくてはならないが、その答申が出てから予算申請までの期間が非常に短いので、意見聴取のために提示された答申案の段階で準備を進めることが必要であったとの説明があった。

具体的な教育プログラムは、次のようなものであった。「マクロ経済」、「ミクロ経済」、「エコノメトリックス」を基礎コア科目として、基礎から最先端までの世界標準の内容を実践型学習により学べるよう設定したこと、TAセッションを教育訓練として活用したこと、授業はビデオ収録してオンデマンドのキャッチアップ教材としたこと、海外から研究者を招聘して院生への集中講義や研究指導を実施したこと。研究発表等のために院生を国内外の研究会に派遣して研究者として必要な訓練の場を提供したこと、投稿料補助やRAとしての雇用等、研究活動への積極的な支援、以上から構成される。

評価については、「ほぼ達成された」との総合評価を受け、国際化への取組みの充実が今後の課題とされたので、次のプログラムとして国際化を重視した教育プログラムの企画・構想もあったとの説明があった。

まとめとして、本事業は予算獲得のためではなく大学院存続のために必要であるとの観点から実施しているとのことばで講演は終了した。

質疑応答では、フロアからは、シンポジウムを開催しなかった理由、予算措置後の事業の継続、評価、基礎コア科目の必修化、TAセッションの単位化、等についての質問があった。シンポジウムについては対費用効果を考えたこと、事業は現在も継続していること、評価はホームページ等も含め公開されたものが対象となること、基礎コア科目間の連携強化は学部経済学教育の問題点を補うもので実質必修化の取り扱いであること、TAセッションは単位化していないが有効に機能している旨の回答があった。

最後に、本学の羽野学長から、大学院教育の充実は急務であり、GPの組み方や注意すべき点について大変有意義なご講演をいただいたとのことのお礼の挨拶があった。

④ 参加者名簿

所 属	氏 名
経済学部	江崎光男、下田憲雄、宮町良広、市原宏一
医学部	井出知恵子、三重野英子、岡本修、藤原作平、波田野豊、泉達郎
工学部	井上正文、飯尾心、小林正、真鍋正規、大賀恭、富来礼次 越智義道、田中康彦、工藤孝人、
その他	羽野忠(学長)、嘉目克彦(教育担当理事)、西村善博、岡田正彦、 中川忠宣、尾澤重知、牧野治敏(本センター) 漆間幸一、河野美奈、岩政亮、倉本将、湯澤麻起子(学生支援課)

なお、講演会の終了後、意見交換会が教養教育棟学生センター会議室を会場として17時より開催された。約1時間にわたり、講演会の内容を元に、より具体的かつ詳細に申請書の作成や審査についての意見交換が行われた。

(4) 学部独自に実施されたFD活動

平成20年度に、学部独自で実施されたFD活動について調査したところ、以下のような回答が、各学部から寄せられた。(調査時期 平成21年3月末)

経 済 学 部

FD事業名	FD事業の種類	実施時期	参加者数
基礎演習のためのFDワークショップ	ワークショップ	平成20年 4月1日	25人
キャリア支援プログラム報告会	検討会	平成21年 2月26日	10人
高大連携と入試動向に関する講演会	講演会	平成21年 3月26日	60人
危機管理講演会・ワークショップ	講演会、ワークショップ	平成20年 6月18日	10人

医学教育センター

FD事業名	FD事業の種類	実施時期	参加者数
第10回 大分大学挾間キャンパス心 肺蘇生処置(CPR) + AED 講習会	講習会	平成20年 6月27日	23名
大分大学医学部医学科 臨床実習討論会	講演会、討論会	平成20年 7月9日	49名
大分大学医学部医学科 臨床実習討論会	講演会、討論会	平成20年 10月24日	34名
第5回大分漢方医学指導者養成講座	講演会	平成20年 8月21日	16名
第6回大分漢方医学指導者養成講座	講演会	平成21年 2月19日	15名
OSCE評価者講習会	講習会	平成21年 3月5日	47名
Advanced OSCE 評価者講習会	講習会	平成20年 8月4、5日	36名
第3回大分県医師臨床研修指導医講 習会	ワークショップ	平成20年 10月4日、 5日	49名

第4回大分県医師臨床研修指導医講習会	ワークショップ	平成21年 3月14、15日	52名
--------------------	---------	-------------------	-----

工 学 部

FD事業名	FD事業の種類	実施時期	参加者数
知の創造プロジェクト主催 メディア教育研修会	講演会 講師：西村昭治氏 (早稲田大学人間科学学術院 教授)	平成21年 3月9日	30人
知の創造プロジェクト主催技術講演会 「ソフトウェア産業活性化プラン ーソフトウェア産業を再構築し、 世界レベルの産業を育てるー」	講演会及び意見交換会 講師：竹内克志氏 (リアルコム株式会社 取締役執行 役員CTO(最高技術責任者))	平成21年 3月27日	13人

(5) 学生による授業改善のためのアンケート調査

(ア) アンケートの実施

学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計分析を行った。

平成20年前学期と後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

前学期

- ・教養教育科目：身体・スポーツ科学、医学部基礎教育科目
- ・教育福祉科学部：Cグループ（授業担当者の名前 ハ行～ワ行）
- ・経済学部：各学科3番目の講座の科目、学科共通科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

後学期

- ・教養教育科目：
- ・教育福祉科学部：Aグループ（授業担当者の名前 ア行～カ行）
- ・経済学部：各学科1番目の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

① 平成20年度調査概要

平成 20 年度前学期「授業改善のためのアンケート調査（学生による授業評価）」の集計結果

分類	対象 授業科目	対象 科目数	実施 科目数	実施科目 登録者数	有効回答数	回答率(%)	一科目当り 回答数
教養教育	身体スポーツ・医学部基礎教育	34	29	1777	1506	84.7	51.9
教育福祉 科学部	Cグループ 授業担当者の名前 は～わ	91	71	1652	1426	86.3	20.1
経済学部	各学科 3 番目の講座の科目	21	20	2250	1705	75.8	85.3
医学部	医学部提出科目	11	8	450	406	90.2	50.8
工学部	全科目	179	146	8065	6515	80.8	44.6
合計		336	274	14194	11558	81.4	42.2

平成 20 年度後学期「授業改善のためのアンケート調査（学生による授業評価）」の集計結果

分類	対象 授業科目	対象 科目数	実施 科目数	実施科目 登録者数	有効回答数	回答率(%)	一科目当り 回答数
教養教育	身体スポーツ・医学部基礎教育	14	11	1734	933	53.8%	84.8
教育福祉 科学部	Aグループ 授業担当者の名前 あ～こ	122	66	2997	1386	46.2%	21.0
経済学部	各学科 1 番目の講座の科目	24	20	437	1170	49.4%	58.5
医学部	医学部提出科目	11	5	635	258	40.6%	51.6
工学部	全科目	153	123	8318	6198	74.5%	50.4
合計		324	225	14121	9945	62.0%	44.2

※「回答率」は、授業評価が実施された科目（実施科目）の登録者数に占める有効回答数の割合。「一科目当り回答数」は、有効回答数を実施科目数で割った値。

② 平成20年度前期授業評価提出科目

教育福祉科学部

- 精神保健福祉論I (橋本美枝子)
基礎ゼミII (橋本美枝子)
精神保健福祉援助演習I (橋本美枝子)
精神保健福祉論III (橋本美枝子)
精神保健福祉援助実習 (橋本美枝子)
共生と言語 (橋本美喜男)
言語獲得と言語障害 (橋本美喜男)
基礎ゼミI (橋本美喜男)
数学特講I (長谷川考志)
数学科授業論 (長谷川考志)
算数科指導法(小) (長谷川考志)
線形代数I演習 (馬場清)
数学特講I (馬場清)
応用代数 (馬場清)
計算機数学演習 (馬場清)
線形数学 (馬場清)
線形代数I (馬場清)
書道概論 (樋口義行)
福祉と方言 (日高貢一郎)
日本語学I (日高貢一郎)
方言学研究 (日高貢一郎)
国語学概論 (日高貢一郎)
公民科指導法(高) (平田利文)
社会科教育学入門 (平田利文)
比較教育文化論I (平田利文)
社会科教育学演習I (平田利文)
社会科教育学演習III (平田利文)
社会福祉原論I (平塚良子)
社会福祉特講I (平塚良子)
社会福祉援助技術論III (平塚良子)
構成IIA (b) (広瀬剛)
デザインIII (a) (広瀬剛)
造形表現I (広瀬剛)
基礎デザインIA (a) (広瀬剛)
デザインIIB (b) (広瀬剛)
社会保障論II (深田聡)
環境物理学 (藤井弘也)
マルチメディア情報処理 (藤井弘也)
計算物理学入門 (藤井弘也)
応用数学 (藤井弘也)
教育メディアの心理学 (藤田敦)
心理学概論 (藤田敦)
精神保健学I (藤田長太郎)
近代文学演習 (藤原耕作)
近代文学特講 (藤原耕作)
芸術療法概論 (藤原志帆)
音楽科教育研究法 (藤原志帆)
ソルフェージュI (藤原志帆)
音楽基礎実技I (藤原志帆)
器楽(小) (藤原志帆)
保育学I (実習及び家庭看護を含む)
(掘越紀香)
保育環境論(家庭看護を含む) (掘越紀香)
家族関係学 (掘越紀香)
家族関係学I (掘越紀香)
国語科教育研究法 (堀泰樹)
国語科授業論 (堀泰樹)
最新発達心理学演習 (前田明)
人間工学 (前田寛)
日本理科教育史 (牧野治敏)
理科授業研究 (牧野治敏)
音楽史II (松田聡)
器楽(小) (松田聡)
表現と文化 (松田聡)
音楽鑑賞法I (松本正)
芸術と鑑賞I (松本正)
地域芸術文化研究 (松本正)
表現教育概論 (松本正)
心理検査の理論と実際 (溝口剛)
人格心理学 (溝口剛)
英語科教育研究I (御手洗靖)

英語の社会スキル (御手洗靖)
英語コミュニケーションIII (ミシェル・ポール)
英語コミュニケーションI (ミシェル・ポール)
環境教育 (三次徳二)
生活環境福祉関連外書講読 (三次徳二)
地質学概論 (三次徳二)
基礎ゼミI (三次徳二)
地球科学 (三次徳二)
建設法規 (村田俊一)
スポーツ栄養学 (望月聡)
栄養学 (望月聡)
人間栄養学 (望月聡)
基礎ゼミI (望月聡)
食生活論 (望月聡)
現代生活論 (望月聡)
国語史 (森脇茂秀)
児童福祉論II (矢頭美子)
英語教育演習II (柳井智彦)
英語教育演習I (柳井智彦)
社会教育特講I (山岸治男)
社会教育課題研究 (山岸治男)
社会教育特講I (山岸治男)
社会教育実習 (山岸治男)
教育社会学演習 (山岸治男)
社会教育演習 (山岸治男)
生涯学習概論I (山岸治男)
法律学特講 (山崎栄一)
法学概論I (山崎栄一)
法律学概論I (山崎栄一)
教育行政学 (山崎清男)
教育学研究法I (山崎清男)
教育制度・経営論 (山崎清男)
情報処理演習I (山下茂)
学校保健 (吉岡義正)
体育学研究法I (吉岡義正)
教育臨床実習I (渡邊亘)

経済学部
公共経済学I (高見博之)

証券論 (金珍奎)
国際会計論I (田中敏行)
国際金融論I (鳥谷一生)
産業と経済I (相浦洋志)
管理会計論I (大崎美泉)
簿記I (栢田龍三)
簿記I (田中敏行)
経営学入門 (藤原直樹)
財政理論 (小野宏)
租税論 (井田知也)
会計学I (栢田龍三)
会社会計論I (中村美保)
英語コミュニケーションセミナーI (ヌートバー・ジュリー)
現代フランス社会論 (安田俊介)
経済学I (下田憲雄)
経済学III (佐藤隆)
社会政策論I (石井まこと)
イギリス言語文化論 (河上敏博)
情報社会論I (豊島慎一郎)
経済学II (五十嵐副夫)

医学部

看護学概論 (原田千鶴)
生活行動論I (原田千鶴)
成人看護学概論 (福井幸子)
看護アセスメント学II (原田千鶴)
老年看護方法論I (三重野英子)
老年看護方法論II (三重野英子)
ケアマネジメント論 (福井幸子)
母性看護方法論I (水谷幸子)
看護過程 (宮崎史子)
成人看護方法論III (脇幸子)
リハビリテーション看護学 (三重野英子)

工学部

エネルギー変換機器 (後藤雄治)
プログラミング (原正佳)
基礎理論化学I (大賀恭)
機構力学 (今戸啓二)

建築総論 (福祉建築全教員)
 代謝生化学 (天尾豊)
 代数学I (末竹千博)
 熱力学 (近藤隆司)
 無機化学I (豊田昌宏)
 基礎設計工学 (岩本光生)
 計算機科学概論 (宇津宮・伊藤・越智)
 建築環境計画I (大鶴徹)
 建築材料 (大谷俊浩)
 材料力学基礎・演習 (後藤真宏)
 電子回路II (上見憲弘)
 電子回路II (秋田昌憲)
 流れ学I (山田英巳)
 力学基礎演習I (佐久間俊雄)
 データサイエンス基礎 (和泉志津恵)
 メカトロニクスII (小川幸吉)
 応用解析IV (沖野隆久)
 材料と弾性の力学 (後藤真宏)
 材料力学 (佐藤嘉昭)
 材料力学 (今戸啓二)
 電気回路III (佐藤輝被)
 電磁気学I (大久保利一)
 電力エネルギー工学 (金澤誠司)
 都市計画 (佐藤誠治)
 機械製図 (木下和久)
 計算力学I (石松克也)
 建築計画設計演習II
 (仲摩・鈴木・小林・姫野)
 原子と分子 (飯尾心)
 原子力システム工学 (上宇都幸一)
 言語理論 (藤田米春)
 情報理論 (川口剛)
 電気回路I (鍋島隆)
 電磁気学IV (榎園正人)
 プログラミングI (西野浩明)
 応用解析III (沖野隆久)
 建築構法 (井上・佐藤・菊池・小林・大谷)
 人間システム計測工学 (榎園正人)
 電気電子計測工学 (榎園正人)
 電気電子工学入門 (電子全教員)
 電気電子数学I (柴田克成)
 電気電子物性工学 (小林正)
 プログラミング (佐藤輝被)
 応用解析II (福田亮治)
 人間工学 (前田寛)
 人工知能プログラミング (中島誠)
 電気電子制御工学I (柴田克成)
 電気物性工学I (江崎忠男)
 アルゴリズム論 (中島誠)
 データサイエンス演習 (和泉志津恵)
 応用解析III (福田亮治)
 応用解析IV (沖野隆久)
 化学工学 (平田誠)
 機械力学基礎・演習 (劉孝宏)
 熱力学I (上宇都幸一)
 半導体工学 (益子洋治)
 流体工学I (山田英巳)
 オペレーティング・システムI (宇津宮孝一)
 機械工学概論I (的場哲)
 機械要素設計学 (岩本光生)
 建築耐震システム (菊池・江藤)
 情報論理学I (牟田征一)
 電気回路II (小川幸吉)
 力学I (後藤善友)
 解析学II (開憲明)
 推論方式 (末田直道)
 代数学II (田中康彦)
 代数学II (末竹千博)
 鉄筋コンクリート構造 (菊池健児)
 電気回路I (金澤誠司)
 電気理論基礎 (浜本 誠)
 電子回路II (中野忠夫)
 エネルギーシステムデザイン (後藤雄治)
 システムプログラミング演習II (宇津宮孝一)
 解析学I (開憲明)
 電磁気学I (厨川明)

応用解析II (福田亮治)
 建築環境工学I (富来礼次)
 高分子化学II (氏家誠司)
 電気回路III (戸高孝)
 電気電子制御工学I (古賀正文)
 有機化学II (石川雄一)
 計算機工学I (緑川洋一)
 計算言語学 (藤田米春)
 建築環境工学I演習 (富来礼次)
 建築設備計画I (真鍋正規)
 多変量解析 (原恭彦)
 伝熱学I (岩本光生)
 伝熱学I (田上公俊)
 電気電子英語 (マクビー・ウィリアム)
 高電圧工学 (野本幸治)
 電気電子基礎実験I (電子全教員)
 機械工学概論I (的場哲)
 建築CAD製図II
 (佐藤(誠)・鈴木・小林・姫野)
 電気回路 (牟田征一)
 波動と光 (後藤勝)
 建築施工学 (上田賢司)
 材料力学 (今戸啓二)
 力学I (小林正)
 力学I (長屋智之)
 システム解析 (松尾孝美)
 ヒューマン・インタフェース (伊藤哲郎)
 工業英語(建築) (福祉建築全教員)
 高分子化学I (守山雅也)
 電磁波工学I (工藤孝人)
 物理学基礎 (近藤隆司)
 物理学基礎 (後藤勝)
 物理学基礎 (小林正)
 物理学基礎 (長屋智之)
 物理学基礎 (野本幸治)
 流れ学基礎・演習 (鹿毛一之)
 流体機械 (濱川洋充)
 エンジンシステム (浜武俊朗)
 データベースシステム (二村祥一)

基礎構造 (佐藤嘉昭)
 構造力学II (井上正文)
 人間システム信号処理 (上見憲弘)
 超伝導エネルギー工学 (江崎忠男)
 通信工学 (秋田昌憲)
 電磁気学I (浜本誠)
 音響工学 (秋田昌憲)
 計算機工学I (中野忠夫)
 身体運動機能学 (岡内優明)
 弾性力学 (土居滋)
 電気工学概論 (工藤孝人)
 システム制御基礎 (黒岩和治)
 画像処理 (行天啓二)
 基礎数学 (開憲明)
 基礎数学 (田中康彦)
 基礎数学 (末竹千博)
 機械工作法 (木下和久)
 視覚画像工学 (行天啓二)
 電気回路II (高坂拓司)
 プラズマ工学 (浜本 誠)
 解析学II (開憲明)
 情報理論 (田中充)
 代数学II (田中康彦)
 応用化学入門 (応化全教員)
 応用物性工学 (長屋智之)
 建築法規 (村田俊一)
 現代制御工学 (松尾孝美)
 測量学実習 (児玉伸彦)
 電気電子数学II (柴田克成)
 熱力学基礎・演習 (浜武俊朗)
 力学I (今野宏之)
 システム設計工学 (岩本光生)
 プログラミング言語処理系 (川口剛)
 機械振動学I (上宇都幸一)
 機械設計学基礎 (木下和久)
 原子と分子 (大賀恭)
 情報数学 (越智義道)
 電気工学I (小川幸吉)
 電気電子英語 (マクビー・ウィリアム)

電気電子工学入門 (電気全教員)	数学Ⅰ (岡田忠成)
福祉環境計画 (鈴木義弘)	数学Ⅲ (岡田忠成)
コンピュータグラフィックス (西野浩明)	物理学Ⅰ (佐野孝之)
コンピュータプログラミング (富来礼次)	物理学Ⅲ (谷川雅人)
計算機システムⅠ (肥川宏臣)	物理学実験 (佐野孝之)
材料強度学Ⅰ (土居・堤)	物理学実験 (佐野孝之)
情報処理概論 (松尾孝美)	化学Ⅰ (久保田直治)
人間システム工学 (上見憲弘)	化学Ⅱ (下田恵)
電気工学概論Ⅰ (戸高孝)	化学Ⅴ (久保田直治)
電気電子工学実験Ⅰ (電子全教員)	生物学Ⅰ (池田八果穂)
Cプログラミング (池内秀隆)	生物学Ⅱ (長谷川英男)
建築計画Ⅰ (鈴木義弘)	生物学実験 (長谷川英男・池田八果穂)
電気機器設計・製図 (槌田雄二)	生物学実験 (長谷川英男・池田八果穂)
物理学実験 (小林・近藤)	人間生物学Ⅰ (倉掛重精)
機械工学概論Ⅰ (木下和久)	人間生物学Ⅱ (長谷川英男・松尾哲孝)
図学 (今永和浩)	医療情報システム学 (江島伸興・島岡章)
電磁気学Ⅲ (厨川明)	医療情報学Ⅱ (江島伸興)
英語Ⅰ (園井千音)	健康運動科学 (稲垣敦)
英語Ⅰ (園井千音)	生涯スポーツを实践する (大庭恵一)
英語Ⅰ (園井千音)	レクリエーションスポーツと健康づくり (松元義人)
英語Ⅱ (園井千音)	打球運動の科学Ⅰ (古城建一)
英語Ⅱ (園井千音)	スポーツと健康づくりの科学 (住田実)
英語Ⅰ (園井千音)	サッカーと運動生理 (石橋健司)
	春・夏の野外活動 (前田寛)
教養科目	イギリスで生まれたスポーツ (島田義生)
健康運動科学演習Ⅰ (吉村良孝)	バレーボールの科学 (岡内優明)
健康運動科学演習Ⅱ (吉村良孝)	生涯スポーツへの足がかりⅠ (島田義生)
医学のための倫理学 (西英久)	キャンプの理論と実践 (前田寛・岡内優明)
医学のための心理学Ⅰ (上野徳美)	
医療・健康心理学 (上野徳美・林智一)	

③ 平成20年度後期授業評価提出科目

教育福祉科学部	アートマネージメント (麻生和江)
スポーツ医学 (明石光伸)	総合アートマネージメント演習 (麻生和江)
アートセラピー演習Ⅱ (麻生和江)	舞踊概論 (麻生和江)
表現教育演習Ⅰ (麻生和江)	ダンスⅠ (麻生和江)
表現教育演習Ⅱ (麻生和江)	ダンスⅡ (麻生和江)
表現指導演習 (麻生和江)	ダンスⅢ (麻生和江)

身体表現実習 (麻生和江)
 舞踊創作演習 (麻生和江)
 舞踊表現研究I (麻生和江)
 舞踊表現研究II (麻生和江)
 舞踊表現研究III (麻生和江)
 舞踊表現研究IV (麻生和江)
 言語・外国語(中) IV (甘利弘樹)
 世界史演習II (甘利弘樹)
 英書講読 (甘利弘樹)
 言語・外国語(中) IIa (甘利弘樹)
 英書講読 (池内宣夫)
 言語・外国語(独) IV (池内宣夫)
 言語・外国語(独) IIa (池内宣夫)
 金属加工学(製図及び実習を含む) (池崎八生)
 情報と職業 (池崎八生)
 コンピュータ英語 (池崎八生)
 コンピュータ制御入門 (池崎八生)
 基礎ゼミII(スポーツ・健康) (石橋健司)
 運動生理学実習 (石橋健司)
 環境生物学II (泉好弘)
 生物学II (泉好弘)
 小学校授業論 (伊藤安浩)
 教育方法・技術論 (伊藤安浩)
 教育学研究法II (伊藤安浩)
 英語史と文学 (稲用茂夫)
 木質構造 (井上正文)
 漢文学演習 (牛尾弘孝)
 漢文学講読 (牛尾弘孝)
 博物館実習II (内田裕子)
 美術鑑賞論 (内田裕子)
 図画工作(小) (内田裕子)
 美術科授業論 (内田裕子)
 調理学 (梅木美樹)
 ライフスタイルと栄養 (梅木美樹)
 特殊栄養論 (梅木美樹)
 アジア経済発展論 (江崎光男)
 障害児教育課程 (衛藤裕司)
 知的障害児の教育と指導法 (衛藤裕司)
 障害児心理演習 (衛藤裕司)
 データベース基礎 (大岩幸太郎)
 プログラミングと言語 (大岩幸太郎)
 情報通信 (大岩幸太郎)
 コンピュータ概論 (大岩幸太郎)
 情報科学I (大岩幸太郎)
 教育情報科学 (大岩 太郎)
 情報統計学 (大隈ひとみ)
 数理統計I (大隈ひとみ)
 情報数学演習 (大隈ひとみ)
 英書講読 (大嶋誠)
 言語・外国語(仏) IV (大嶋誠)
 現代国際事情II (大嶋誠)
 世界史演習I (大嶋誠)
 西洋文明論II (大嶋誠)
 世界史概説I (大嶋誠)
 西洋史概説 (大嶋誠)
 社会学概論II (大杉至)
 英書講読 (大杉至)
 現代社会論II (大杉至)
 教育本質論 (岡田正彦)
 基礎解析 (緒方武秀)
 数学特講II (緒方武秀)
 数学要論 (緒方武秀)
 経済学概論II(含国際経済) (小野宏)
 公的扶助論 (垣田裕介)
 アメリカとアメリカ文学II (金子光茂)
 教育数学II (川寄道広)
 数学特講II (川寄道広)
 環境科学入門 (川野田實夫)
 応用理科II (川野田實夫)
 教育哲学演習 (神崎英紀)
 教育学研究法II (神崎英紀)
 社会福祉援助技術論II (衣笠一茂)
 スクールソーシャルワーク (衣笠一茂)
 地域福祉論 (衣笠一茂)
 社会福祉援助技術現場実習指導 (衣笠一茂)
 社会福祉援助技術演習IIA (衣笠一茂)

- 社会福祉援助技術演習IIB (衣笠一茂)
 老人福祉論I (工藤修一)
 体験実習II (工藤修一)
 家庭科指導法(中) (久保加津代)
 住居学I(製図を含む) (久保加津代)
 住生活論(製図を含む) (久保加津代)
 家庭科指導法(小) (久保加津代)
 住居計画学 (久保加津代)
 生活総合演習 (久保加津代)
 絵画演習 (久間清喜)
 絵画IIIB(b) (久間清喜)
 造形表現II (久間清喜)
 絵画IIB(b) (久間清喜)
 コンピュータと芸術 (久間清喜)
 絵画基礎(b) (久間清喜)
 表現基礎実習AI(デッサン) (久間清喜)
 英書講読 (熊谷教子)
 思想史概論II (熊谷教子)
 哲学演習 (熊谷教子)
 比較思想論II (熊谷教子)
 声楽II(日本の伝統的な歌唱を含む)
 (栗栖由美子)
 声楽IV (栗栖由美子)
 グループ表現Ib (栗栖由美子)
 コーラスIIb (栗栖由美子)
 コーラスIb (栗栖由美子)
 合唱II (栗栖由美子)
 合唱IV (栗栖由美子)
 合唱VI (栗栖由美子)
 合唱VIII (栗栖由美子)
 表現構成演習IIb (栗栖由美子)
 表現基礎実習BI(声楽)b (栗栖由美子)
 声楽VI (栗栖由美子)
 宗教学 (黒川勲)
 哲学概論I (黒川勲)
 数学特講II (家本宣幸)
 基礎解析演習II (家本宣幸)
 位相入門 (家本宣幸)
 経済学概論II(含国際経済) (合田公計)
- 教育メディアとコンピュータ (凍田和美)
 教育メディアとコンピュータ (凍田和美)
 肢体不自由児の心理・生理・病理 (古賀精治)
 障害児の生理 (古賀精治)
 障害児臨床概論 (古賀精治)
 知的障害者教育総論 (古賀精治)
 特殊教育論 (古賀精治)
 障害児教育応用演習 (古賀精治)
 心理学特別研究 (古城和敬)
 教師学 (古城和敬)
 教育社会心理学 (古城和敬)
 レクリエーション指導論 (古城建一)
 生涯スポーツ演習I (古城建一)
 レクリエーション実技 (古城建一)
 健康スポーツ福祉論 (古城建一)
 生涯スポーツ総合演習I (古城建一)
 ソフトテニス (古城建一)
- 経済学部**
 統計学II (西村善博)
 外国書講読AII (江崎光男)
 ミクロ経済学II (五十嵐副夫)
 比較経営史II (松尾純廣)
 経営学入門 (藤原直樹)
 地域経営論II (奥田憲昭)
 経営情報論II (松岡輝美)
 マクロ経済学II (宇野真人)
 地域構造論II (宮町良広)
 地域と商業 (松隈久昭)
 比較地域分析II (城戸照子)
 法学入門 (二宮孝富)
 ゲーム理論 (下田憲雄)
 流通論II (松隈久昭)
 経営学II (薄上二郎)
 経済学III (丸山武志)
 経済学II (井田知也)
 株式会社論II (片山准一)
 経済学I (五十嵐副夫)
 政治経済学II (佐藤隆)

組織革新論Ⅱ (本谷るり)
経済学史Ⅱ (丸山武志)
都市経営論Ⅱ (高島拓哉)
社会分析論Ⅱ (嘉目克彦)
地域と経済 (市原宏一)
経済学概論Ⅱ(含国際経済) (市原宏一)

医学部

人間発達学 (穴井孝信)
健康科学 (島田達生)
看護理論 (佐藤和子)
疾病論Ⅴ (井上 亮)
地域看護方法論Ⅱ (井手知恵子)
地域看護方法論Ⅱ (志賀たずよ)
疾病論Ⅶ (穴井孝信)
疾病論Ⅲ (穴井孝信)
地域看護方法論Ⅳ (井手知恵子)
地域看護方法論Ⅳ (志賀たずよ)

工学部

電気電子計測工学 (一丸修)
建築CAD製図Ⅰ (後藤年則)
メカトロニクスⅣ (今戸啓二)
工業力学 (山田英巳)
流れ学 (鹿毛一之)
有機化学Ⅰ (守山雅也)
通信方式 (秋田昌憲)
オペレーションズリサーチ (越智義道)
電気回路Ⅱ (金澤誠司)
機械工学基礎・演習 (後藤真宏)
電力システム工学 (後藤雄治)
システム制御 (黒岩和治)
力学基礎演習Ⅱ (佐久間俊雄)
電気工学Ⅱ (小川幸吉)
生物化学 (天尾豊)
情報論理学Ⅱ (藤田米春)
電気回路Ⅱ (鍋島隆)
電磁気学Ⅱ (濱本誠)
身体ダイナミクス (岡内優明)

基礎電磁気学 (近藤隆司)
材料力学 (後藤真宏)
エネルギー変換工学 (後藤雄治)
画像理解 (行天啓二)
電子回路Ⅲ (佐藤輝被)
建築計画Ⅱ (佐藤誠治)
メカトロニクスⅢ (池内秀隆)
材料強度学Ⅱ (土居滋)
建築環境計画Ⅲ (富来礼次)
数値解析演習 (原恭彦)
電気回路Ⅰ (小川幸吉)
物質の状態と変化 (大賀恭)
構造力学Ⅰ (大谷俊浩)
建築環境工学Ⅱ (大鶴徹)
電子機器 (鍋島隆)
工作機械 (木下和久)
機械工作法 (齋藤晋一)
情報構造論 (伊藤哲郎)
応用化学入門 (宇田泰三)
応用解析Ⅳ (沖野隆久)
電磁気学Ⅳ (厨川明)
並列処理システム (川口剛)
構造力学Ⅰ演習 (大谷俊浩)
建築環境工学Ⅱ演習 (大鶴徹)
情報回路論 (藤田米春)
反応速度論 (永岡勝俊)
電磁気学Ⅲ (榎園正人)
電気物性工学Ⅱ (江崎忠男)
確率統計 (福田亮治)
基礎数学 (末竹千博)
建築構造設計Ⅱ (菊池健児)
倫理感性工学 (宮川浩臣)
流れ学Ⅱ (山田英巳)
建築材料実験 (大谷俊浩)
応用解析Ⅱ (福田亮治)
建築構造設計Ⅰ (菊池健児)
電気回路Ⅳ (佐藤輝被)
流体工学Ⅱ (山田英巳)
情報英語 (西野浩明)

CAD概論 (池内秀隆)	プログラミングII (二村祥一)
機械設計製図 (濱川洋充)	機械計測工学 (濱川洋充)
データ解析 (越智義道)	鉄骨構造 (井上正文)
構造解析 (菊池健児)	電子回路 (江崎忠男)
電気工学概論II (柴田克成)	人間システム制御工学 (松尾孝美)
都市システム工学 (小林祐司)	機械力学 (劉孝宏)
人工知能基礎 (末田直道)	電気電子材料 (戸高孝)
伝熱応用設計 (齋藤晋一)	応用解析I (佐藤静)
電気電子物性工学 (益子洋治)	機構学 (山本隆栄)
数理計画論I (越智義道)	流体工学 (鹿毛一之)
技術者倫理 (大谷俊浩)	メカトロニクスI (松尾孝美)
電気電子制御工学II (古賀正文)	電気回路IV (大久保利一)
化学結合論 (氏家誠司)	計算機工学II (中野忠夫)
確率統計 (福田亮治)	電子回路 (牟田征一)
情報ネットワーク (宇津宮孝一)	解析学I (開憲明)
応用解析III (沖野隆久)	プラズマ工学 (金澤誠司)
伝熱学II (岩本光生)	数値解析I (原恭彦)
建築環境計画II (真鍋正規)	解析学I (高阪史明)
電子回路I (中野忠夫)	解析学I (佐藤静)
エネルギー発生工学 (野本幸治)	聴覚音声工学 (上見憲弘)
工業英語 (HARRAN THOMAS JAMES)	解析学I (田中康彦)
電気電子基礎実験II (工藤孝人)	解析学I (末竹千博)
塑性設計法 (江藤啓二)	数理計画論II (和泉志津恵)
建築計画設計演習I (佐藤誠治)	基礎数学 (開憲明)
応用解析I (佐藤静)	集積回路工学 (後藤淳恵)
品質管理 (甲斐章人)	電磁気学II (大久保利一)
代数学I (高阪史明)	情報代数系 (田中康彦)
代数学I (佐藤静)	リハビリテーション工学 (永野敬喜)
代数学I (田中康彦)	力学II (今野宏之)
代数学I (末竹千博)	力学II (小林正)
基礎電磁気学 (野本幸治)	生体運動制御論 (前田寛)
建築設計演習 (山口隆史)	物理化学II (瀧田祐作)
電磁気学II (厨川明)	応用熱力学 (濱武俊朗)
代数学II (田中康彦)	木質構造 (井上正文)
情報処理 (高坂拓司)	福祉機器工学II (宮川浩臣)
電子回路I (秋田昌憲)	電気回路I (高坂拓司)
電子回路I (上見憲弘)	電気電子制御工学II (柴田克成)
建築ワークショップ (真鍋正規)	生物有機化学 (石川雄一)
電磁波工学II (田中充)	計算機システムII (川口剛)

基礎理論化学II (大賀恭)
現代物理学 (長屋智之)
電気電子数学 (田中充)
先端科学材料システム工学 (土居滋)
プログラミング (緑川洋一)
住居論 (鈴木義弘)
ソフトウェア工学 (吉田和幸)
電気機器工学I (戸高孝)
エネルギー制御工学 (松尾孝美)
人間システム制御工学 (松尾孝美)
電気電子工学実験II (厨川明)
数値解析 (工藤孝人)
物質の状態と変化 (飯尾心)
認知科学 (牟田征一)
解析学II (高阪史明)
言語意思表現 (松田修明)

教養科目

フランス入門 (安田俊介)
日本語はおもしろい (日高貢一郎)
言語文化学入門 (柿原武史)
人間関係学 (吉村匠平)
いやしの音楽 (田村洋彦・藤原志帆)
水彩画の魅力
(佐脇健一・長田明彦・久間清喜・内田裕子)
青年の心理 (西山佐代子)
中国史学緒論 (甘利弘樹)
アメリカ文学 (雲和子)
大分県の歴史II (末廣利人)
アカデミックスキル (尾澤重知)
器楽の楽しみ (田中星治・西村一・松本正)
話しことばの文化 (堀泰樹)
芸術と生活 (貞包博幸)

(イ) 教員による自己点検レポート集の作成

授業改善のためのアンケート結果を本学の教育改善に活用する方法の一つとして、「教員による自己点検レポート集」を作成している。平成18年度より、前期と後期分を1冊として刊行している。平成20年度前期の自己点検レポートについては、56件のレポートが寄せられている。後期分のレポートの寄稿は次年度にズレこむため、平成20年度の自己点検レポート集は、21年度に刊行予定である。

4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

本センターにおける生涯学習関連業務は、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の2部門が連携して実施している。生涯学習関連業務においては、本学の教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、緊急且つ重要な事業、日常的に行う事業等に分類し、軽重をつけて実施することとし、次の2部門において生涯学習社会の形成に向けてセンター業務を推進した。

①大学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放の推進を行う。

②生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援するためのシステム化を行う。

ただし、生涯学習を推進するためには、学習機会を提供する側の機能（本学）と学習機会を活用する側（県民及び行政）のニーズとを適切に結びつけることが必要であり、本センターにおける取り組みも、大学開放推進部門と生涯学習支援システム部門の共同で協議を行い、連動して業務を推進してきた。また、高等教育関連部門との連携による生涯学習関連の情報提供の充実をはじめとして、公開講座・公開授業の充実を中心とした本学の大学開放推進部門会議との連携、地域共同研究センターとの情報交換等、生涯学習に関わる学内の諸部局との連携を行った。

さらに、両部門の推進の基盤となる調査研究においても、県及び市町村教育委員会生涯学習行政との連携によって、現代的な課題に関する調査分析を行いつつ、生涯学習・社会教育計画の作成や指導者の育成等に関する指導的業務を担ってきた。

(1) 大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取り組みを行った。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する講座と市町村教育委員会と連携で行う出前講座となっている。

平成20年度の公開講座は前期14講座、後期4講座の計18講座を実施した。内訳は、成人対象講座6講座で受講者279名、子ども・家族対象講座12講座で受講者261名となった。

平成21年度大分大学公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数
1	出前講座－大分大学米水津塾－	米水津地区公民館 大分大学内	6/15～2/15 (8回)	15時間	43
2	肺に影があるといわれたら	大分市コンパルホール	7/5	3時間	33
3	乳がん手術で郭清されるリンパ節をみる	大分市コンパルホール	7/7	2時間	63
4	腎移植医療の実際とその問題点	大分市コンパルホール	7/9	2時間	33
5	薬で治る・手術で治るパーキンソン病	大分市コンパルホール	7/12	3時間	72
6	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7/26～11/8 (8回)	18時間	28
7	泳げない男の子の水泳教室	大分大学内	7/23～7/30 (7回)	21時間	22
8	泳げない女の子の水泳教室	大分大学内	7/23～7/30 (7回)	21時間	23
9	ちびっ子スイミング男子	大分大学内	7/23～7/30 (7回)	21時間	11
10	ちびっ子スイミング女子	大分大学内	7/23～7/30 (7回)	21時間	7
11	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校	8/11, 8/12	6時間	50
12	高校生のための数学・物理学かんどころ講座	大分大学内	8/7	5時間	20
13	身近な大分の化石収集～化石が出る理由から、化石掘り、標本づくりまで	大分大学内 採石場：緒方町	8/10, 8/23, 8/24	9時間	107
14	楽しくつくろう！木工教室	附属中学校	8/22～8/26	10時間	16
15	これからの社会と法	大分市コンパルホール	10/16～11/27 (7回)	9.3時間	37
16	身近な数学 －数学の面白さにふれよう－	大分大学内	11/8～12/6 (4回)	6時間	0
17	食育とコミュニケーションを親子 一緒に考えるセミナー	ゆふの丘プラザ	12/20, 12/21 (2回)	9時間	10
18	生涯スポーツとしてのスキーをやって みよう	広島県めがひらスキー場	1/23～1/24	6時間	2

2) 公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各学部及び個々の教員からの申請で実施している。

平成20年度の公開授業は、前期56講座、後期42講座の計98講座であり、平成12年度から徐々に増加してきている。受講生は前期が41名、後期が23名となった。

○平成20年度大分大学公開授業

前期			後期		
番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数
1	臨床心理学	9	57	臨床心理学演習	4
2	精神保健福祉論Ⅰ	4	58	生活環境とホルモン	2
3	人間関係論	4	59	世界史演習Ⅱ	2
4	西洋美術史	4	60	MOT特論Ⅲ	1
5	西洋文学論	2	61	いやしの音楽	1
6	現代アジア論	2	62	漢文学講読	1
7	生命観の変遷	1	63	言語・外国語(独)Ⅱa	1
8	教育本質論	1	64	言語・外国語(独)Ⅳ	1
9	言語・外国語(独)Ⅰa	1	65	現代中国社会論	1
10	基礎中国語Ⅰ	1	66	工業英語	1
11	解剖学	1	67	国際関係論Ⅱ	1
12	住環境論	1	68	地域と情報	1
13	バロック音楽の世界	1	69	中国史学緒論	1
14	大野川Ⅰ	1	70	日本東洋美術史	1
15	大分大学の人と学問	1	71	表現形式総合論Ⅱ	1
16	言語・外国語(独)Ⅲ	1	72	老年看護学概論	1
17	国際関係論Ⅰ	1	73	漢文学演習	1
18	言語・外国語(独)Ⅰb	1	74	消費生活論	1
19	成人看護学概論	1	75	英語科授業論	0
20	地球と生命の歴史	1	76	英語ゼミナール15	0
21	漢文学概論	1	77	応用英語E	0
22	基礎中国語Ⅰ	0	78	応用中国語Ⅱ	0
23	児童生活論	0	79	大野川Ⅱ～大野川から世界へ～	0
24	生涯学習論入門	0	80	家庭科指導法(小)	0
25	教養ドイツ語Ⅰ	0	81	機械と文明	0
26	環境物理学	0	82	企業ファイナンス論Ⅱ	0
27	レクリエーション概論	0	83	基礎中国語Ⅱ	0

28	比較経営史 I	0	84	基礎中国語 II	0
29	体育学概論	0	85	教育社会学	0
30	博物館学概論	0	86	教育本質論	0
31	打球運動の科学 I	0	87	教養ドイツ語 II	0
32	哲学概論 II	0	88	言語・外国語(独) II b	0
33	マルチメディア情報処理	0	89	健康保持の社会システム	0
34	現代天文学と SET I	0	90	現代ドイツ社会論	0
35	エレクトロニクスの世界 I	0	91	身体表現実習	0
36	福祉と工学技術	0	92	数値解析	0
37	応用中国語 I	0	93	スポーツ社会学	0
38	労使関係論	0	94	哲学概論 I	0
39	地域の住まい学習	0	95	統計学 II	0
40	化学物質と環境影響	0	96	都市経営論 II	0
41	家族関係学 I	0	97	人間と教育	0
42	漢文学研究	0	98	労働関係法 II	0
43	応用英語 E	0			
44	消費者教育	0			
45	企業ファイナンス論 I	0			
46	地域看護学概論	0			
47	電気工学概論	1			
48	漢文学史	0			
49	身体表現基礎	0			
50	英語ゼミナール 14	0			
51	現代資本主義論 II	0			
52	労働関係法 I	0			
53	生涯学習概論 I	0			
54	都市経営論 I	0			
55	東洋史概説	0			
56	身体感覚の知覚演習	0			

3) センター事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援を行った。

① センター主催公開講座

前述した公開講座のうち、本センターが市町村教育委員会と連携し現地で開催する講座として「出前講座」がある。過去には「大野路夢魅塾」も実施していたが、今年度も継続して実施している講座が

「米水津塾」である。現在は佐伯市教育委員会との連携となっており、米水津地区のみならず、旧佐伯市内、鶴見町、弥生町など市内各地区からの受講がみられる。本年度は45名の受講生で、学習成果の活用や大学との連携などを通じた地域づくりや地域活性化等の地域課題、バリアフリーな住まいや日常の運動習慣など現代的な課題に関する講座が実施された。また、20年度は初めての試みとして「米水津の植物探訪」というテーマで間越（はざこ）地区での実習を行った。身近な地域の植物について実際に目で見、手で触れながらの講座が好評であった。このような体験型の講座は今後も充実させていく計画である。

近年の傾向として、青少年対象やその家族をも含めた講座―学内で実施する水泳教室や木工教室、自然体験や生活経験を充実させる講座―などを強化している。社会全体の傾向として、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘されており、大分県においてもその傾向が強い。子ども達の自然体験・生活経験を充実させるためには家族全体のライフスタイルを転換する必要があることから、家族単位で参加する講座も充実させている。

また、講座の企画・運営を基軸に、県内の諸機関・団体等との連携を推進している。

② 大学教育と生涯学習の接続・連携

○生涯学習・社会教育に関する授業の実施

・生涯学習論入門

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開するための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義している。（担当：岡田）

○本学及び学部の授業・講習との接続

・教育本質論

「教育本質論」は教員免許状取得の必須科目であり、基本教職に関する科目に位置づけられている。教員免許状取得を希望する学生が最初に受講する科目になる。例年通り、前期には教育福祉科学部の情報社会文化課程と人間福祉科学課程、教育福祉科学部以外の学部を対象に開講し、後期には教育福祉科学部の学校教育課程を対象に開講した。（担当：岡田）

・「教師学」

教員免許状取得の必須科目である「教師学」に参画して、「求められる教師像」に対して、生涯学習の観点から、社会教育との連結という視点での指導を行った。（担当：中川）

・教員免許状更新講習

現職の教職員の免許状更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義を行った。（担当：中川）

平成21年度は新規に、調査研究を基にした「社会教育から見た教育の協働」及び、その取り組みを具体化するための「成人教育方法入門」の2授業を実施することとしている。

○学生の学習ボランティア活動

平成20年度は学習ボランティアに登録する学生が20名であり、こうした登録者を中心にして、学内での研修会や活動ニーズの調査を基にして、佐伯市米水津の地域イベントや本学大学開放イベントでの交流、「学び直し講座」の運営、県内生涯学習実践交流会でのボランティアと参加者との交流、更には阿蘇青少年交流の家での研修会への参加など積極的な活動を推進した。こうした活動を通して、学生の学習ボランティアとしての力量の形成とともに、学生が大学開放事業に関わることの効果を大学教員も実感し、受講者にも感じてもらうことができた。

- ・公開講座「食育とコミュニケーションを親子一緒に考えるセミナー」企画・運営
(社会人1名、学生5人)
- ・佐伯市おさかな祭り(2人)
- ・大学開放イベント米水津コーナー(6人)
- ・活力・発展・安心デザイン実践交流会ボランティア(5人)
- ・大分市「学び直し講座」での社会人大学院生のボランティア(1人)
- ・阿蘇青少年交流センター研修生として参加(1人)

③ 情報収集提供・学習相談活動

ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などを行った。また、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に2回作成して、大分市を中心に配布した。

今後、本センターが実施する事業のPRの充実とともに、県内外の生涯学習・社会教育に関する情報を提供して学生への参加の呼びかけ、生涯学習関係者の相談活動を充実していく。

4) 市町村・団体等との共同・連携事業

① 「学び直し講座」(大分市からの受託・6回)

本講座は大分市が市民講座として立ち上げたものであり、本学が1講座を受託し、佐藤誠二副学長、高島拓哉准教授(経済学部)、中川忠宣教授・岡田正彦准教授(本センター)がメンバーとなって「私たちが出来る『地域づくり活動』講座」として実施した。受講者15名のうち11名が修了し、今後の学習活動へと発展する組織化ができた。本講座の運営には学習ボランティアである社会人院生が運営補助者として参加してくれた。地域づくりの様々な側面にふれつつ、受講者との交流を通して有益な研修とすることができた。

実施事業名	私達が出来る「地域づくり活動」講座
担当部局	大分大学
実施責任者	大分大学高等教育開発センター教授 中川忠宣
趣旨・目的	大分駅南地区再開発が目指す「街づくり」をベースに、行政が行うハード整備と住民が実践できる「環境」「コミュニケーション」づくりの両面から「住みたい街・大分市」づくりについて学び直し、学習者自らが「地域づくり」に参画するための活動を考え、個人又はグループとして公民館活動や自治会活動と連携した活動へ発展させることを目的とする。

対 象	団塊の世代を中心とした高齢者及び壮年者	
実施日	講座内容（講義及び自主学习）	講師
11月2日（日）	「人づくり」とおとした「地域づくり」	中川忠宣（大分大学教授）
11月9日（日）	県都大分の「街づくり」～都市計画と景観～	佐藤誠二（大分大学副学長）
11月16日（日）	道づくり・みどりづくりと「街づくり」	亀野辰三（大分高専教授）
11月23日（日）	地域コミュニケーションと「街づくり」	高島拓哉（大分大学准教授）
11月30日（日）	私達が出来る「地域づくり活動」	岡田正彦（大分大学准教授）
		中川忠宣（大分大学教授）
12月7日（日）	私達が取り組む「地域づくり活動」	岡田正彦（大分大学准教授）
		中川忠宣（大分大学教授）
その他	5～6回目は「地域づくり」のために地域住民が出来る（行うべき）活動を整理し、学習者自らの今後の活動や、活動のためのネットワーク化（組織化）の方策を協議して活動計画を作成する。	

② 地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会

行財政改革の中で、平成の大合併が一応終結したが、このことによる地域の活性化の取り組みにもさまざまな課題が浮き彫りになり、今まさに、地域づくりは「官から民へ」の時代となった。そこで、「民」という立場でアイデアを発揮し、県内活動グループや機関等のネットワークを築き、素晴らしい「デザイン」を描きながら取り組んでいる県内の個人・団体・グループの活動情報を共有し、新たに「我がまちづくり」に生かしていくエネルギーを高めていくために、東国東デザイン会議と大分大学等とが連携して実践交流会を開催し、92名（延べ132名）の参加があった。学習ボランティアの学生5名が受付や分散会への参加などを行い、各地で熱心に活動している人々に触れることで、よい刺激を受けることができた。

会場 「梅園の里」（国東市安岐町）

平成21（2009）年2月28日（土）～3月1日（日）

日	時間	内 容
一	15:00	受付
日	15:30	基調講演「『地域からの学校への支援』の意義と方策」
目	17:30	大分大学高等教育開発センター教授 中川 忠宣氏
二	9:40	開会行事
日	10:00	特別講演「少子高齢化に対応した地域社会システムの構築方策」
目	11:20	九州共立大学生涯学習研究センター教授 古市 勝也氏
		実践事例発表
		第1分散会：地域・産業を体験させる活動
		会場：ホールC
		①県立九重青少年の家
		②番匠川流域ネットワーク
		③中津市下郷地区公民館
		④明日を見つめる'あき21

	<p>第2分散会：文化・スポーツ・交流の場づくり活動 会場：天文台研修室</p> <p>①大分市大南公民館 ②国見田舎歌舞伎保存会 ③佐伯市弥生振興局地域振興・教育課 ④杵築市向野地区公民館</p> <p>第3分散会：教育の協働による子どもを育てる活動 会場：ホールA</p> <p>①佐伯市立蒲江小学校 ②豊後大野市清川地区学校支援地域本部 ③ゆふいん父ちゃん会 ④国東市教育委員会武蔵分室</p>
--	--

③ 津久見市公民館講座への講師派遣

津久見市教育委員会との連携の一環として、津久見市における公民館講座の一つの柱である高齢者学級に大分大学から講師を派遣している。本年度は以下の4名を講師として派遣した。今後の課題としては、個別の講師派遣ではなく体系的な連携を推進する必要がある。

津愛大学4月学習会 高等教育開発センター岡田正彦准教授「成人の学びのすすめ」

黒潮学園7月学習会 教育福祉科学部麻生和江教授「ダンスで健康増進」

津愛大学9月学習会 武井雅宏大分大学名誉教授「命を守る食生活」

ふれあい学園10月学習会 高等教育開発センター中川忠宣教授「地域での協育に向けて」

津愛大学12月学習会 教育福祉科学部田畑千秋教授「言葉の力ー言霊の文化ー」

④ サイエンスカフェ

「大分に青少年科学館をつくる会」および「NPO法人大分水フォーラム」と連携し、7月12日に「サイエンスカフェ2008summer」を、12月8日に「サイエンスカフェ2008autumn」を開催した。

(2) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、地域の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取り組みを行った。

1) 生涯学習支援ネットワーク化の取り組み

① 県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育委員会生涯学習課との連絡会を年間2回実施するとともに、個別の施策に関する打ち合わせ会を県教育委員会及び本センターで実施するなどして、連携を深める取り組みを行った。さらに、県教育委員会生涯学習課が実施する市町村との会議への出席や市町村訪問への参加をとおして市町村への情報提供や調査依頼等を行い、18市町村とのネットワーク化を図った。今後、こうした基盤をさらに深め、生涯学習推進上の地域貢献を充実するための県及び市町村とのネットワークシステムを構築していく。

② 「大分県社会教育主事有資格者ネット」の組織化

県内の社会教育主事の資格を有する現社会教育主事や教職員のネットワーク化を進めるために、県立生涯教育センターとの連携によって「大分県社会教育主事有資格者ネット」を立ち上げた。メンバーは40名で、今後、相互の活動情報の交換や研修活動などを推進することとしている。

③ 県内高等教育機関のネットワーク化

現在休止中である大分地域大学等生涯学習協議会の再開に関して、その意義と目的、活動内容について協議を行ったが、引き続き検討することとしている。

2) 生涯学習推進と社会的活動の取り組み

県及び市町村の教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取り組みを行った。

① 県教育委員会生涯学習行政との連携

【生涯学習関係者研修事業】

○県教育委員会研修事業

- ・文部科学省が実施する「学校支援地域本部事業」に係る「コーディネーター養成研修会」（4回シリーズ）のスーパーバイザーとして研修の企画に関わると共に、各研修会での講演、ファシリテーター等を行った。この取り組みは3年間継続することとなっている。
- ・各教育事務所ごとに実施する、家庭、学校、地域社会の教育の協働を推進する「地域協育フォーラム」の津久見会場での開催に、パネルディスカッションのコーディネーターとして参加して支援した。

○県立生涯教育センター等研修事業

- ・社会教育主事有資格者研修は、県内の社会教育主事の資格を持つ教職員、教育委員会職員等を対象に実施するもので、その企画及び講師として参画した。
- ・地域人材活用研修会は、教職員を対象として地域の教育力を活用したより豊かな学校教育活動を実現するための研修会で、その企画及び講師として参画した。
- ・新任社会教育委員研修は、県及び市町村の3年未満の社会教育委員を対象に実施するもので、その企画及び講師として参画した。
- ・おおいた県民アカデミア大学は、県民を対象として県内各地で開催し、学習の成果を生かした地域活動を促進する学習機会提供事業であり、生涯学習の推進に関する講師として支援した。

【委員等への就任】

○県教育委員会生涯学習課関係

- ・大分県社会教育委員（岡田）
大分県社会教育委員として、地域協育の振興について検討を行った。
- ・大分県「放課後子どもプラン」推進委員会委員長（岡田）
大分県「放課後子どもプラン」推進委員会において、事業の推進のあり方について検討を行い、現場で放課後子どもプランの推進にあたっているコーディネーターの研修も担当した。

○県立生涯教育センター関係

・調査研究委員会（岡田）

平成19年度からの継続研究課題である「市町村社会教育計画等およびその実践化過程の研究」を継続し、とりまとめた。19年度に行った市町村中長期社会教育計画の分析に加え、市町村単年度事業計画を分析し、中長期社会教育計画と単年度事業計画の間のつながりを検証した。また、研究の成果を活かした研修プログラム「社会教育計画立案基礎研修会」で講師を務めた。

・おおいた県民アカデミア大学講師（岡田）

生涯教育センターが実施している「おおいた県民アカデミア大学」の講座の内、県内6ヵ所で実施された「地域人材育成講座」の第1回講座（4ヵ所）、第7回講座（2ヵ所）の講師を担当した。

② 市町村教育委員会生涯学習行政との連携

【生涯学習関係者研修事業】

- 豊後高田市：家庭、学校、地域社会の教育の協働に関する大会での講師（中川）
- 国東市：公民館学級生、人権同和教育推進者、PTA指導者研修会での講師（中川）
- 杵築市：青少年の宿泊体験活動に関わる指導者に対する研修での講師（中川）
- 大分市：教職員、婦人会、社会教育関係者の研修会での教育の協働に関する講師（中川）
- 津久見市：公民館学級での少子高齢化への対応に関する講師（中川）
高齢者大学における学習成果活用に関する講師（岡田）
- 佐伯市：家庭、学校、地域社会の教育の協働に関する大会での企画・講師（中川）
- 竹田市：学校へのボランティア活動に関する研修会での講師（中川）

【委員等への就任】

- 由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）

③ 団体、機関、大学等との連携

【生涯学習関係者研修事業】

- ・文部科学省「学校支援地域本部研究協議会」（九州会場）に係るパネリスト（中川）
- ・熊本県における「学校支援地域本部事業」に関する研修会においての講師（中川）
- ・沖縄県における「学校支援地域本部事業」に関する研修会においての講師（中川）
- ・熊本県「放課後子ども教室コーディネーター等研修」講師（岡田）
- ・宮崎県都城市社会教育振興大会講師（岡田）
- ・徳島大学大学開放実践センター研究会講師（岡田）
演題：「大学開故事業の運営と地域生涯学習支援システムの接続にむけて」
- ・福岡県南筑後地区公民館長・職員等研修会講師（岡田）
- ・香川県地域支援指導者セミナー講師（岡田）

【委員等への就任】

○国立教育政策研究所社会教育実践研究センター関係

- ・「新たな『公共』の形成に資する社会教育のあり方」調査研究委員会委員（岡田）

国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが実施した「新たな『公共』の形成に資する社会教育のあり方」調査研究委員会に参加し、研究を行った。研究プロジェクトとリンクする形で、9月10日～12日に行われた「新たな公共の形成に資する社会教育プログラム開発研究セミナー」において研究協議のファシリテーターを務めた。

○その他

- ・中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（中川）
- ・地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川）
- ・子育てネットおおいた委員（岡田）
- ・おおいた水フォーラム事務局（岡田）

4) 学内のネットワーク化

大学開放を推進するための学内のネットワーク化については、20年度は大規模な取り組みは行えなかった。基礎調査として大分大学における生涯学習に協力してくれる教員のネットワーク化に関する検討を開始した。また、個別的取り組みとして以下の取り組みを行った。

- ・大分水フォーラムを通じた連携
- ・工学部技術職員研修での講師

(3) 調査研究

① 「新たな『公共』の形成に資する社会教育のあり方」

国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが実施した「新たな『公共』の形成に資する社会教育のあり方」調査研究委員会に参加し、研究を行った。研究推進の具体的方策を検討する小委員会の委員も務めた。

近年、行政機能の縮小や市民活動の機能向上などを受けて、「新たな『公共』の形成」が課題となっている。この研究は、社会教育の領域における新たな「公共」の形成を検討する調査研究である。

事例調査として、佐賀県のNPO法人ステューデント・サポート・フェイスの調査を行い、事例研究を行った。また、事例を横断する形で新たな「公共」の形成に向けた社会教育事業の方向性を検討した「事業の構造」について検討し執筆した。

② 市町村社会教育計画等およびその実践化過程に関する研究

～市町村社会教育計画等の実践化過程の分析～

平成19年度からの継続研究課題である「市町村社会教育計画等およびその実践化過程の研究」を継続し、とりまとめた。19年度に行った市町村中長期社会教育計画の分析に加え、市町村単年度事業計画を分析し、中長期社会教育計画と単年度事業計画の間のつながりを検証した。

市町村社会教育計画は、計画行政としての取り組みを導くものである。しかし、中長期計画に示される抽象的な理念や方向性を実現するためには、それを具体的な目的や目標につなげ、それを達成するための事業を策定する必要がある。中長期教育計画が射程とする期間を見通した年次進行も考慮する必要がある。

実際の計画をみると、中長期計画と単年度事業計画との間に適切なつながりが確保できていない箇所も散見された。また、計画策定にあたり必要な作業や担当者間の共通理解・申し送りなどの重要性も明らかになった。社会教育計画を「計画のための計画」に終わらせず、社会教育行政の計画的・発展的取り組みに有効な資料として活用するためには、各計画の質を向上させるとともに、計画間の連関を十分に保障することが必要である。

③ 家庭、学校、地域社会の教育の協働に関する調査分析の報告

～学校支援活動に関する由布市及び別府市の実態調査から～

現在、文部科学省及び大分県教育委員会が推進する「学校教育活動への地域からの支援システムの構築」（「協育」ネットワーク）に関して、平成19年度に文部科学省委託事業「学校支援を通じた地域の連帯感形成のための特別調査研究事業」を、由布市と別府市が受託して実施した際の意識調査を分析したものである。本意識調査は、児童生徒、教職員、地域住民（保護者）それぞれを対象にして実施したものである。分析にあたっては、大分県教育委員会が推進する「教育の協働」の推進システムの構築という観点から、地域住民からの学校支援活動に直接関係すると考えられる調査項目を選定し、事業実施後の状況（2月実施）を基に、由布市の調査を中心にして報告することとした。なお、別府市の調査については関連事項のみを報告することとした。今後、本学の授業においてこの報告書を活用して、社会教育と学校教育の連携の課題と方策に関する学びを深めていくこととしている。

④ 生涯学習社会の形成を目指す教育の協働に関する報告

～大分県における「学校支援地域本部事業」に係る意識調査から～

教育振興基本計画では、教育基本法第13条の規定をふまえ家庭、学校、地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させることが謳われた。そこでは「地域ぐるみで学校を支援し、子どもたちをはぐくむ活動の推進」という施策のもとに、学校と地域との連携・協力体制を構築し、地域全体で学校を支え、子どもたちを健やかに育むことを目指し、「学校支援地域本部事業」等の取り組みを促している。

そこで家庭、学校、地域という三者における教育の協働を効果的に推進するために、本事業を実施する地域の児童生徒、教職員、地域住民（含保護者）を対象にアンケート調査を行いその結果を提示し、生涯学習社会形成の一助となることを試みた。本報告書ではアンケート調査の結果とそこから見える問題点、さらに家庭、学校、地域の三者が効果的な協働を推進していく筋道を確立するための方策に関し若干の示唆を提示している。また、平成20年度日本生活体験学習学会10回研究大会において分析の一部を発表した。

今後、この報告書を活用して、地域の教育の協働の推進を支援するとともに、本学の授業での社会教育と学校教育の連携の課題と方策に関する学びを深めていくこととしている。

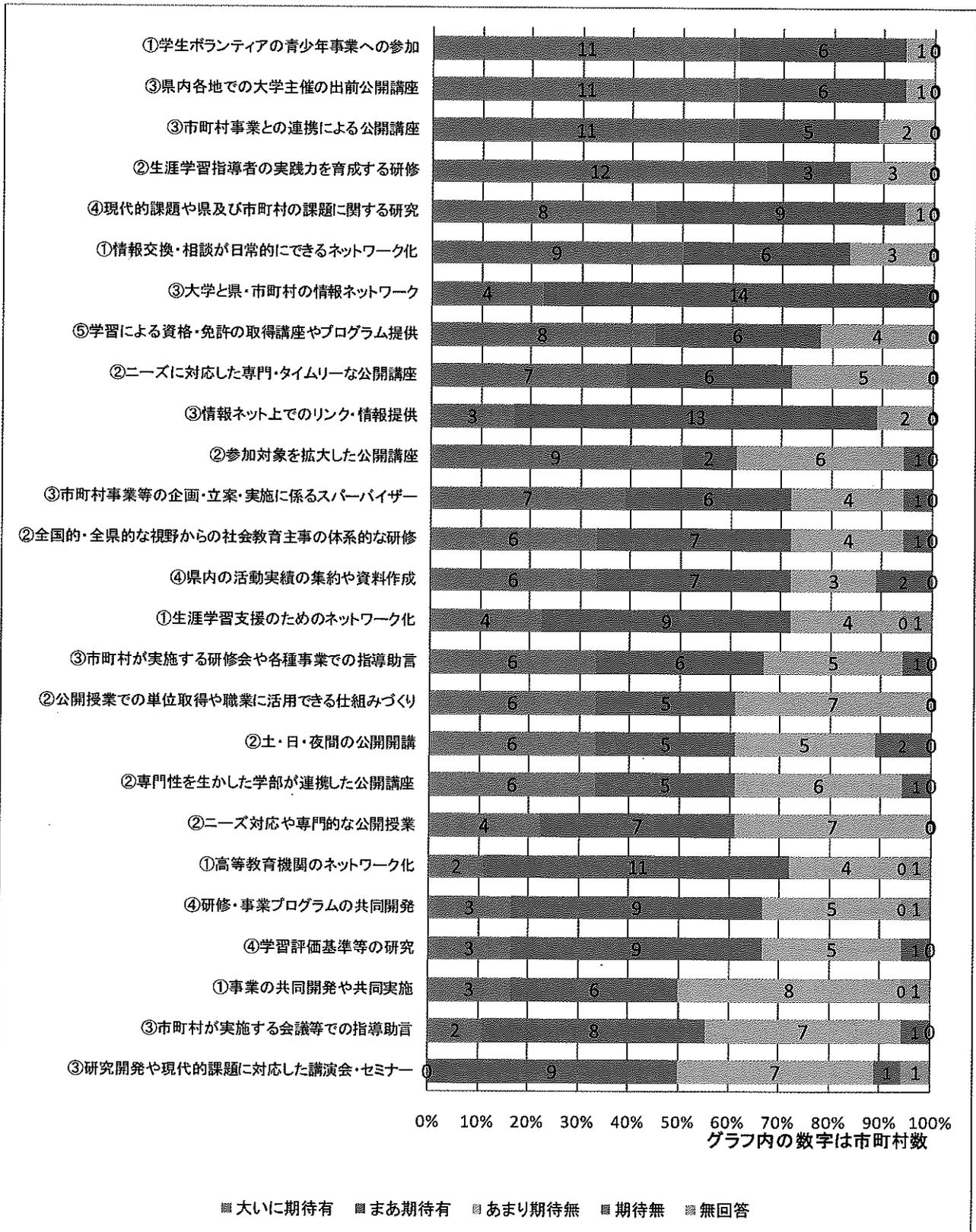
⑤ 県民の生涯学習支援のための「生涯学習関連業務」に関する一考察

～県及び市町村教育委員会生涯学習推進担当部署の意識調査から～

中央教育審議会答申、改正教育基本法及び国の「教育振興基本計画」において、生涯学習支援を体系的に推進することが求められている中で、生涯学習支援のための関連業務の「縦」の接続や、「横」の連携を推進する生涯学習支援のシステム化、そのために必要な体系的な取り組みが何なのかを再検討する必要がある。そのため、生涯学習関連業務としている各種業務も含め、本センターに求められる機能及びその機能を発揮するシステムについて、地域生涯学習支援を日常的に直接推進する県及び

市町村との連携を強化していくという視点から調査し（図）、本学の生涯学習関連業務に関する考察を行った。今後、県民のニーズに対応した公開講座や公開授業等の大学開放事業や、県及び市町村と連携した生涯学習支援の方策について、大学の持つ機能を十分に発揮していく検討することとしている。

図 生涯学習支援に関する大分大学への期待



Ⅲ 特別報告

特別報告では、各部門での位置づけが難しい、本センター全体として取り組んだ事業等について報告を行う。

本章で報告するのは、以下の2点である。

1. 平成21年度特別教育研究経費所要額調（教育改革）
2. 高等教育開発センターの統合効果の検証について

1. 平成21年度 特別教育研究経費所要額調 (教育改革)

重点事項の順位	法人番号：79 法人名：大分大学
事業名	<p>授業・講演会等のオンディマンド化とFD活動の推進にもとづく教育環境の質的な改善に向けての取組み</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>授業のオンディマンド化、オンラインによるFD、教育力の向上、メディア教材の開発、意欲ある学生・社会人学習者の支援、リメディアル教育</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【概要】 本事業は、平成20年度政策課題対応経費で実施した事業の拡充である。授業・講演会等のオンディマンド化とFD活動を結びつけ、FD活動による教員の教育力の向上とメディア教材の整備にもとづき教育環境の質的改善を図る。</p> </div>
事業実施主体	高等教育開発センター
事業計画期間	平成21年度(1年)
概算要求額	<p>平成21年度概算要求額 15,080千円</p> <p style="text-align: right;">(事業実施経費総額 17,216千円)</p>
平成20年度政策課題対応経費における事業名	授業のオンディマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組み

1. 事業の必要性

本事業は、平成20年度政策課題対応経費による事業「授業のオンディマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組み」の拡充である。

本事業の基本コンセプトは、教員が自己の授業スタイルを見直すため授業のオンディマンド化をFD(ファカルティ・ディベロップメント)活動の一環として位置づけるとともに、モデル授業の実施とその成果を、FD活動を通じて他の授業の改善に活用することによって、教員の教育力の向上やオンディマンドコンテンツ(メディア教材)の整備・充実を図り、教育環境の質的な改善を推進することである。

本事業は、これを発展させ、①FD活動のより効率的な実施のためにオンラインによる公開授業検討会(すなわち、オンラインによるFD)を導入すること、②意欲ある学生・社会人学習者の学習の機会を充実させるとともに学習困難を抱える学生などのリメディアル教育の機会を充実させること、の2つの方向性で事業を拡張する。その際、既存コンテンツの利活用を図るなどこれまでの取り組みの成果を生かしつつ、コンテンツの対象領域を拡大し、専門的職業人の学習ニーズに対応したプログラムも整備することで、一般学生のみならず社会人学習者への学習支援をも充実させる。

【目的・目標】

そこで本事業では、(1)授業のオンディマンド化とFD活動を関連づけた事業を基本に据え、(2)オンディマンド化の新たな分野を設定し、教育環境の質的な改善を図る。

(1)に関しては、①平成20年度と同様に、授業のオンディマンド化をFD活動の一環として位置づけ、学内で広く実施を図るとともに、センター教員等が担当する「大分大学の人と学問」「大分大学を探ろう」などをモデル授業とし、その成果を他の授業の改善に活用する。②コンテンツの質的な向上や既存コンテンツの利活用に取り組む。③FD活動については、オンラインによる公開授業検討会や事業評価に関わるFD集会の実施を企画し、一層の充実を図る。

(2)に関しては、①社会人学習者向けの学習プログラムやキャリア形成教育に関する講演会等に、オンディマンド化の範囲を拡張する。②専門的職業人の学習プログラム支援策として、オンディマンドコンテンツを活用し、受講の利便性向上や補習、継続学習などでの活用を推進する。

【必要性・緊急性】

今日の多様化した学生に対して、授業のオンディマンド化や授業改善の取組みの普及に基づき、教員個々人の教育力の向上を図ることは、きわめて社会的ニーズが高い。また、専門的職業人の学習プログラム支援策として、たとえば、平成21年度から本格化する教員免許更新制における更新講習の支援として、オンディマンドコンテンツの利用を導入することは、受講者にとって授業の理解度を増進させることに役立つ。専門的職業人向けに作成したコンテンツ、キャリア形成教育に関する講演会・社会人学習者向け学習プログラムについては、一般の学生にとって、就職活動への支援や大学における学習方法の習得といった観点から意義がある。

【独創性・新規性等】

本事業の基本コンセプトを維持しながら、オンディマンド化の範囲をキャリア形成教育に関する講演会や社会人学習者・専門的職業人向け学習プログラムに拡張する。こうした観点から教育環境の改善を総合的に推進するという着想は、きわめて独創的、新規的といえる。

【中期目標及び中期計画との関連性】

本学では、中期目標・計画として、センターを中心に、「FD研修会等の定期的かつ継続的な企画・開催」等のFD活動の推進事項や「eラーニングシステム等の有効活用を検討し、学生の学力レベルに合った教材を開発、提供する」といったeラーニング推進事項がある。また、生涯学習関連項目のなかで、社会人学習者に対する学習支援、専門的職業人の学習ニーズへの対応が課題となっている。本事業はそれらの具体的な取組みである。

2. 事業の取組内容

〔全体計画〕

① 授業のオンディマンド化の推進とFD活動

本事業では、授業のオンディマンド化をFD活動の一環と位置づけ、授業全体あるいは授業1回分のコンテンツ化を進め、学内外に授業を公開する。

本学における授業のオンディマンド化は、平成18年度の9科目27タイトルから、19年度前後期では約20科目約100タイトルに増えている。20年度は、授業1回分のコンテンツ化を30科目程度、学期を通じた授業全体のコンテンツ化を15科目程度（180タイトル程度）作成し、そのうち5科目程度は、著作権に配慮しながら学外へ発信する。

平成21年度に新たに作成するコンテンツは、既存コンテンツの利活用や高品質化をめざすため、量的には減少の見込みである。すなわち、授業1回分のコンテンツ化を20科目程度、授業全体のコンテンツ化を15科目程度（150タイトル程度）とし、うち5科目程度は学外配信を計画している。

また、対象科目については、オンディマンド化による学習支援の領域を大学教育全体に拡張するため全体の3割程度を専門科目で占めるよう調整を図る。コンテンツの作成には、基本的に、センターに既

に導入している教育支援システムを利用する。

FD活動に関しては、授業のオンディマンドコンテンツの相互視聴（したがって擬似的な授業の相互参観）に基づく公開授業検討会（オンラインによるFD）の実施によって、現在、通年で2回程度開催している公開授業検討会を、年間10回程度にまで増やすことが可能である。さらには、本事業の評価に関わるようなFD集会を企画・実施する。

② 教授法の改善に資するモデル授業の実施とFD活動

センター教員等が担当する授業「大分大学の人と学問」「大分大学を探ろう」などにおいて、一方通行型の授業の弊害を防ぐような教授法の試行を積み重ねてきている。平成21年度もそれらの授業を企画・実施し、その成果を、授業公開FDワークショップや本学の学生・教員合同授業改善検討会（きっちろむフォーラム）といったFD集会等で報告し、新たな教授法に関心をもっている教員への情報提供を行う。

③ キャリア形成教育に関係する講演会や社会人学習者対象の学習プログラムのオンディマンド化

本学のキャリア形成教育に関係する授業（例：「キャリアデザイン入門」）の中で実施している講演会等を対象に、オンディマンドコンテンツを5タイトル程度作成し、それらを公開する。

また、本学の社会人学習者向けの学習プログラムのなかで、一般の学生にとっても有意義と考えられるものがある。たとえば、「子どもへの接し方・伝え方」は教職志望の学生に役立つ。社会人学習者向けの「論理的文章の読解と作成」は一般学生にも必要なトレーニングといえる。この種のオンディマンドコンテンツを15タイトル程度作成し、社会人学習者並びに一般の学生に提供する。

④ 専門的職業人対象の学習プログラムのオンディマンド化

専門的職業人対象の学習プログラムとして、教員免許状更新の講習会で実施される授業のオンディマンド化を行い、その視聴を受講生の学習の補完として位置づけることにより、受講生の便宜を図り、補習や継続的学習を可能にする。当面、50タイトル程度のコンテンツ作成を予定している。なお、これらは一般学生にも視聴可能なものとする。

⑤ オンディマンドコンテンツ（メディア教材）の提供

従来、センターでは、授業のオンディマンドコンテンツを「グローバルキャンパス」という名称のWebページに一括掲載し、学生に提供している。本事業では、新たな分野として、専門的職業人の学習プログラムとして教員免許状更新の講習会に関わる授業をオンディマンド化することや、既存のコンテンツの再利用を考慮に入れると、一般学生向けと社会人向けで、分散処理を行なうことが効率的である。また、一般学生向けについても、本学ではキャンパスが二つに分かれている（旦野原、挾間）ので、それに対応した処理が効率的である。したがって、社会人向けのwebページを新たに作成し、コンテンツの管理・運用も新しいサーバーで行なう。さらに、一般学生向けについても、二つのキャンパスに対応して、別個のサーバーによりコンテンツの管理・運用を図る。

3. 事業の実現に向けた実施体制等

【実施体制】

オンディマンドコンテンツの作成にあたっては、高等教育開発センターに導入済みの教育支援システムを利用する。本事業では、専門科目のコンテンツ化の割合を増やすことや、より効率的にビデオ収録を行なうため、3つの教室にカメラを固定設置し、授業記録を収集する（講義記録システムの増強）計画である。

センターでは、ビデオ収録やコンテンツ作成のために学生アシスタントを活用する。学生アシスタントは学業を優先しているため、常時、一定数のアシスタントを確保することは難しいのが実情である。今回、平成20年度よりも事業を拡張していることや、コンテンツの作成に際して、著作権処理の問題が引き続き発生することが予想される。したがって、学生アシスタントに加えて、非常勤職員や弁理士の雇用等が必要である。

教授法の改善策を検討するために、教員が、毎回の授業で、学生から効率的に授業の評価や意見を収集することは意味があるので、授業評価に関するシステムを、教育支援システムの拡張として導入する計画である。

キャリア形成教育に関係する講演会や社会人学習者向け学習プログラムのオンディマンド化についても、センターで既に推進している事業をベースにしている。社会人対象の学習プログラムの実施機関は、本学では、旧生涯学習教育研究センターであったが、平成20年4月に、それが旧高等教育開発センターと統合された。このため、従来、旧生涯学習教育研究センターで、取り組んでいた事業を積極的に活用できる連携体制が整備されている。

【工夫改善の状況】

オンディマンドコンテンツの作成に当たっては、これまでセンターで蓄積してきたノウハウを活用することができる。学生アシスタントについては、センターで必要なスキルを養成のうえ実務を担当させており、平成18～20年度の実績を活用できる。新たな教授法への取組みについてもモデル授業の開講により、センター教員等がそのノウハウの修得に努めているので、その成果を活用できる。さらに本事業では、平成21年度、学内負担により約200万円を支出し、全体の1割強を自助努力でまかなう予定である。

4. 事業達成による波及効果等（学問的効果、社会的効果、改善効果等）

（平成20年度までの実績及び成果の発信・効果）

オンディマンドコンテンツの大きな利点は、ビデオを収録した科目の担当教員が、自分の授業の改善点を直接的かつ客観的に把握することができることであり、気がついた点をその後の授業の改善に生かすことができることにある。

他方、学生にとっては、もう一度聞きたい話や理解が難しかった授業を繰り返し視聴することにより、あるいは止むを得ず欠席した場合、時と場所を選ばずに視聴できることにより、学習効果を高めることができる。学生が、受講科目以外の「グローバルキャンパス」に掲載された授業を視聴することによって、他の科目への関心が喚起されるという効果もある。

こうした点は、『大分合同新聞』平成20年2月4日付夕刊「一石二鳥、大分大、授業録画ネットで公開」で取上げられ、その後、「グローバルキャンパス」に掲載している高等教育開発センターHPへのアクセス数が急増するなど、社会的な反響を呼んでいる。

平成20年度では、センター担当授業「大分大学の人と学問」をモデル授業として位置づけ、授業方法の改善の取組みとその普及を図っている。当該科目については、センターが授業担当となった平成19年度から、授業方法の改善に取り組んでおり、多人数授業へのグループ学習の導入といった取組みを行なっている。学生による授業改善のためのアンケート調査結果において、一般の教養科目よりも高い評価を得ている。

その取組みについては、センターの尾澤准教授を中心に、「オムニバス形式型導入教育の再編成とその評価」（報告者：尾澤重知・牧野治敏・西村善博、第14回大学教育研究フォーラム、京都大学、平成20年3月26日～27日）、「教育改善に向けたICTの利用」（ICTによる教育改善やその支援のためのFD活動をめぐるシンポジウム）（報告者：尾澤重知、第30回大学教育学会大会、目白大学、平成20年6月7日～8日）等で、その紹介と成果を発表しており、参加者から大きな関心と注目を集めた。また、尾澤准教授は、平成20年6月30～7月7日、オーストラリアで開催された、教育へのマルチメディア活用に関する国際会議においても、「大分大学の人と学問」での試みを発表した（Shigeto Ozawa, Oita University, Japan, “A Trial Evaluation of Blended learning Using On-demand Omnibus Lectures and Face-to-face Group Learning”, ED-MEDIA (World Conference on Educational Multimedia and Hypermedia)）。

さらには、センターの平成19年度年報（平成20年4月刊、82～98頁）に、尾澤重知「オムニバス形式

型導入教育の再編成とその評価」を掲載し、学内外へのモデル授業での取組みを紹介し、啓発を行なっている。

平成20年度においては、高等教育開発センターが旧生涯学習教育研究センターと統合し、生涯学習部門を併せ持ったセンターとして新たに出発したため、提供可能なコンテンツの内容に大きな変化が現れた。旧生涯学習教育研究センターがそれまで実施してきた公開授業（平成20年度約100科目）や公開講座（平成20年度約20講座）の主要なものをコンテンツ化することにより、グローバルキャンパスの拡充が図られている。

これにより、公開授業の受講者の学習の幅を広げることが可能になっている。他方、公開講座（米水津塾等）においては、より地域住民密着型の講座を開設しており、それがコンテンツ化されることによって、受講者の学習に対して役立つとともに、一般の地域住民への生涯学習の提供という効果を期待できる。

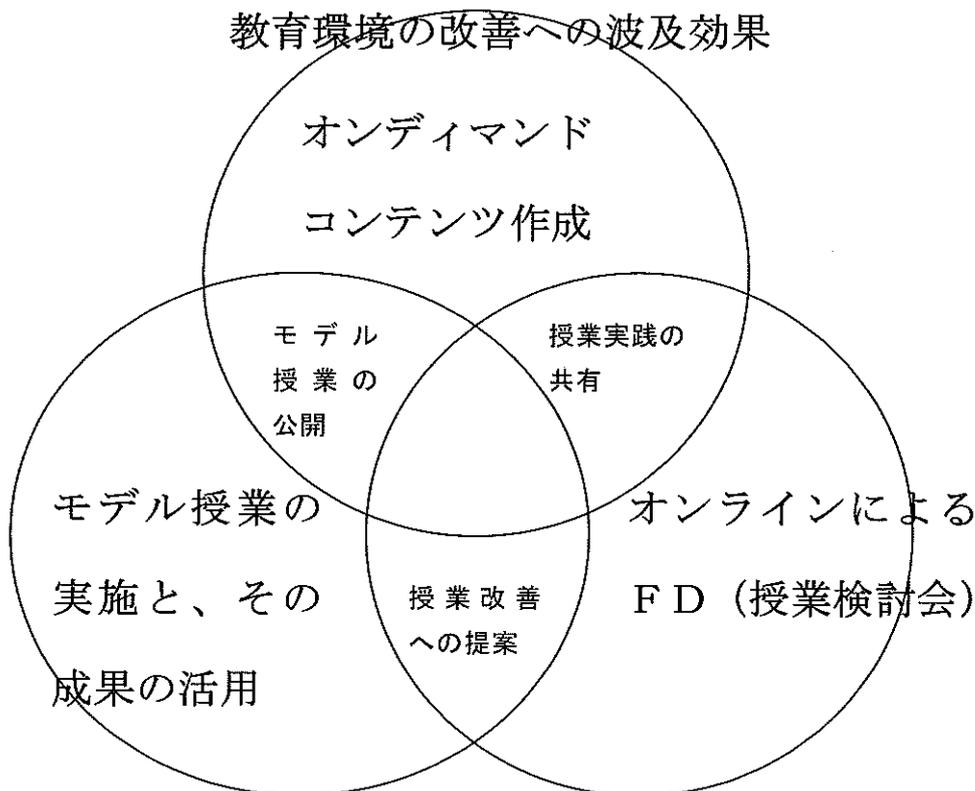
また、学内で実施されている学生主体のプロジェクト発表会（大分大学生き2プロジェクト'07成果発表会等）やキャリア形成教育に関する講演会を対象にビデオ収録し、オンディマンド化を図ることにより、学生の関心の喚起や就職活動に役立たせている。そして、そうしたコンテンツを学外にも発信することで、一般社会に対するアピール効果も生じている。

（平成21年度の取組みと期待される効果）

平成21年度の取組みについても、平成20年度と同じような方針で行なう計画である。ただし、平成21年度においては、オンラインによる公開授業検討会を企画・実施する予定である。これによって、FD活動の幅を広げるとともに、その効果をより高めることが期待できる。

コンテンツの対象領域の拡大に関して、平成21年度には、本格的に授業以外の講演会を対象に含める予定である。とりわけ、教員免許状更新の講習会のオンディマンドコンテンツ化は、学習時間の限られる現職教員にとっては、きわめて有効な学習支援方策であると考えられる。

3分野の結合によるFD活動の推進と



2. 高等教育開発センターの統合効果の検証について

平成21年2月16日

- (観点1) 統合の際に設定した目標及び課題
- (観点2) 目標及び課題に対する平成20年度の取組及び成果
- (観点3) 想定した統合のメリットとその結果
- (観点4) 今後取り組む改善事項

(観点1) 統合の際に設定した目標及び課題について

「センター統合構想」(平成20年2月)において、「2. 統合の理念、(3)大学を取り巻く情勢の変化と求められるニーズ」として、次のことが記載されていた。

「現在、社会における大学および高等教育の位置づけ、あるいはそれらに対する社会的ニーズが大きく変化しており、両センターに対して課せられるべき課題や役割についても当然ながら見直しが求められる。とりわけ、他機関が行う生涯学習関連事業・活動とは差別化しつつ有効な連携を推進する事業展開が求められている。

他方、平成21年度の教養教育改革においては、全学教育機構が動き出す予定になっている。この全学教育機構は教育担当副学長を長として、各学部教務委員会・教養教育担当教員、教育関連の学内共同教育研究施設である高等教育開発センター等の代表によって構成され、学士課程教育の基本方針案の策定、教育課程等の運営に関する事項の調整、教育方法の検討その他関係委員会等の支援を行うものとなっている。」

(目標)

これを受け、統合の理念(目標)を以下のように定めた。

- 両センターがこれまでに担ってきた各機能・役割の一層の充実を図るとともに、連携強化を通じて、大学に期待される新たな諸課題への対応を進める。
- 全学的な教育課題(全学教育機構関連の課題を含む)に係る企画力・調整力の強化を図る。(同構想、「2. 統合の理念(4)統合に向けての理念と実施体制」)

さらに、これを受けて、同構想においては、業務の方向性に関して、次のような「(1)活動の方針」と「(2)業務の方向性」を策定していた。

(1)活動の方針

- ① 大分大学における教育課題の推進について、センター固有の役割を発揮するとともに、学内諸組織、とりわけ全学教育機構と連携し、本学の教育活動の充実・発展に寄与する。
- ② 大分大学における高等教育・生涯学習に関する調査、研究及び開発を行う。
- ③ 大分大学が行う生涯学習関連事業および大学開放事業の推進を通じた地域貢献活動の発展に寄与する。

(2)業務の方向性

- ① 全学教育機構の設置に伴い、センターの全学的な教育課題に対する企画・調整業務の重要度が増すことが見込まれる。

- ② 全学教育機構の設置により、新しい教育課題として、キャリア教育、環境教育、高大連携といったものに関与せざるをえなくなる。
- ③ 高等教育開発センターが担ってきたFD活動、授業評価、eラーニングの推進については、今後もその重要性に変化はない。
- ④ 業務の連携強化を図る。すなわち、生涯学習の事業プログラムと高等教育関連事業との関連付けを図り、事業の高度化を行う。たとえば、本学学生に対する生涯学習の視点からの学習支援や学習機会提供、社会人学生に対する学習支援、既存分野で重複する業務（例：遠隔教育、FD講座）の整理統合や生涯学習における重要な取組みのコンテンツ化を両センターの協力のもとで実施する。
- ⑤ 公開講座・公開授業をはじめとする大学開放事業の内容について社会の変化や地域のニーズを適切に反映して質的にも量的にも充実させる。
- ⑥ 大学開放を効果的に行える学内の仕組み作りについて検討を継続し、システム化する。
- ⑦ 地域の生涯学習支援システムの機能を高度化させるために、本学がリーダーシップを発揮して関係機関等のネットワーク化や連携の取組みを推進する（以上同構想、3.業務の方向性、(1)活動の方針、(4)業務の方向性から）

(課題)

上記の理念（目標）として統合構想から引用した「活動の方針」と「業務の方向性」がまた課題でもある。ただし、二つの旧センターが取組んでいた事業からみて、近いところにある課題なのか、遠いところにある課題かの違いがある。換言すれば、旧センターのルーチンワークを展開させたものか、統合を契機に新たに取組むべき課題かの違いがある。

この観点から、上記の(2)「業務の方向性」の各事項を分類してみる。

●上記の(2)「業務の方向性」における事項①と②について

これは全学教育機構が平成20年度に活動を開始したことに伴い、センターとしても新たな取組みと言える。

●上記の(2)「業務の方向性」における事項③について

これはいわば、旧高等教育開発センターが取り組んできた事業の継続であり、いわばルーチンワーク的な位置づけとなる。ただし、その中でも、全国的な動向も踏まえ、新機軸というような取組みもある。

●上記の(2)「業務の方向性」における事項④について

これは統合を契機とした、まったく新たな取組みといえる。

●上記の(2)「業務の方向性」における事項⑤⑥⑦について

これは従来の旧生涯学習教育研究センターでの取組みの継続であるが、それをより展開させるものである。

すなわち、(2)「業務の方向性」における事項③⑤⑥⑦については、旧センターでも取組んできた種類の事業である。ただし、それらを一層、充実させたり、新たな取組みを含むものである。他方、(2)「業務の方向性」における事項①②④については、統合が契機となった、あるいは統合の開始時と重なり、新たな取組みといえる。

(観点2) 目標及び課題に対する平成20年度の取組及び成果

センター事業は、現行、中期計画の年度計画として具体化されており、以下では、高等教育開発センター担当分で、平成20年度の「年度計画」の成果として記載する。

(前記事項①②関係：教務部門会議／全学教育機構における活動、及び前記事項③のうち授業評価関連事項)

中期計画 (教育 3)	導入教育の充実を図り、学習の動機付けを高める。
年度計画	全学教育機構は、平成 19 年度策定した導入教育を含む改革案にそって、具体的なプログラムを策定する。
中期計画 (教育 35)	大学教育開発支援センターを改組した高等教育開発センター(仮称)において、教育内容及び教育方法に関する企画・開発、教育支援、教育評価の見直し等を行い、教育改革を推進する。
年度計画	全学教育機構は高等教育開発センターの支援のもと、平成 19 年度に策定した改革案の具体化を図る。

年度実績	<p>●教務部門会議にセンターから2名(センター長、次長)、全学教育機構運営会議にセンターから2名(センター長、次長)、全学教育機構主題科目専門部会にセンターから3名(センター長、次長、専任教員1名)が選出され、平成20年度の教養教育科目の策定作業に参加し、カリキュラム作成に貢献した。</p> <p>●教養教育科目の担当及び支援 (導入教育関連)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大分大学の人と学問」(前学期) ・「大分大学を探ろう」(前学期) ・「アカデミックスキル(調査法入門)」(後学期) <p>(キャリア形成教育関連)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生涯学習論入門」(前学期) ・「キャリアデザイン入門」(後学期) <p>(環境教育関連)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大野川Ⅰ(大野川～川から学び、川で遊ぶ～)」(前学期)(センター支援授業) ・「大野川Ⅱ(大野川～大野川から世界へ～)」(後学期)(センター支援授業) <p>(その他支援授業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「裁判・裁判員制度」(前学期) ・「人間関係学」(後学期) <p>● 授業評価関連</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成20年度前後期の授業アンケートの実施 ・平成20年度前期の授業アンケート調査結果、速報版の発表(2009年2月) ・平成19年度『自己点検レポート集』の刊行(2008年11月) ・平成19年度授業アンケート調査結果報告書の刊行(年度末予定) ・センター部会を中心に、授業アンケートの一部見直しに着手
------	---

	●平成 22 年度概算要求書「教養から専門への動機づけとプロセスを重視した教養教育開発—学生のふりかえりと見通しを促すシステムの開発—」の作成において主たる支援センターとして参加することを計画
--	--

(前期事項③のうちeラーニング関連事項)

② 中期計画 (教育 25)	FD 研修を一層充実させるとともに、教員が相互に授業を参観し研修する公開授業等を実践する。
年度計画	引き続き、高等教育開発センターにおいて、公開授業及び授業記録システムを活用した FD 研修を実施する。
③ 中期計画 (教育 49)	高等教育開発センター(仮称)を中心として、FD 研修会等を定期的かつ継続的に企画・開催し、教材、学習指導法等の一層の充実を図る。
年度計画	FD の義務化に伴い、また、FD 活動の定期的な継続性を確保するために、引き続き高等教育開発センターを中心に、各部署の要望を踏まえたFD研修等を企画・実施する。

年度実績	<p>● FD 研修等の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部・大学院担当教員対象の FD として、「WebClass 講習会」(4 月中旬、10 月～12 月随時実施)、「大分大学ティ칭ング・カフェ」(7 月 20 日)、「オンライン FD」(10 月前半)、「先進的 eラーニング研究会」(11 月 14 日)、「学内合同 FD 研修会:きっちよむフォーラム 2008」(11 月 26 日)、「FD と eラーニングに関する講演会」(1 月 30 日)を実施した。 ・大学院FD講演会として、「大阪大学大学院における教育改革」(7 月 24 日)、「メンタルヘルス講演会 学生とのよりよい関係を目指して」11 月 7 日(ただし大学院・学部合同の講演会として実施) ・各部署からの要望の収集については、実施する事業内容や関係する部門会議の開催実績等により、違いがある。 ・WebClass の講習会は各部署や各教員からの要望に応じて随時対応している。本年度は、4 月中旬、10 月～12 月に、要望に応じている。 ・学部・大学院担当教員対象の FD に関しては、主に、教務部門会議で検討を行っている。すなわち、FD 活動のスケジュールを諮り、実施報告を行い、各学部からの意見聴取に努めている。 ・大学院 FD 講習会に関しては、所轄の大学院部門会議の開催数が少ないことから、各研究科の代表者から、昨年度末(2008 年 2～3 月)、実施希望の FD のテーマを収集し、それにもとづき本年度の全学対象の大学院 FD 講演会を企画・実施している。
------	---

(前期事項③のうちFD活動関連事項)

中期計画 (教育 40)	教養教育委員会で教養教育の施設・設備の更新を計画的に行い、学習環境の整備を図るとともに、各学部も整備計画を策定する。
-----------------	--

年度計画	平成 19 年度実施の ICT 機器等の更新による学習環境の整備をより確かなものにするために、必要に応じて改善策を講じる。
中期計画 (教育 42)	多様なメディアを利用した教育を行うため、教務委員会及び教養教育委員会の検討を経て、教授会の了承のもとに講義室・演習室の機器・設備の状況を点検し、総合情報処理センターと連携して全教室への情報ネットワークシステムの整備等の具体的な計画を策定する。また、教育効果を高めるため、教務委員会及び教養教育委員会で SCS, e-Learning 等ネットワークの活用方法を検討する。
年度計画	全学教育機構は、高等教育開発センターとともに、ネットワークシステム等を整備した教室での ICT を活用した授業の一層の推進を図る。
中期計画 (教育 51)	高等教育開発センター(仮称)で e-Learning システム等の有効活用を検討し、学生の学力レベルに合った教材を開発、提供するとともに、定期的な見直しにより、グレードアップを図る。
年度計画 (教育 55-1)	特別教育経費で拡充した授業記録システム等により、授業のオンデマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組を推進しながら、FD とともに授業記録システム等の利用拡大にも取り組む。また、平成 19 年度に導入した LMS との連携も進める。また SA の育成も充実させ、教員の利用支援に取り組む。
中期計画	高等教育開発センター(仮称)が中心になって SCS や MINCS の利用を促進するとともに、遠隔授業システムを積極的に活用する。
年度計画 (教育 55-2)	生涯学習教育研究センターと統合し、業務を更新した高等教育開発センターにおいて、大学への関心を高める方策として、社会人・高校生に向けて、公開講座のビデオコンテンツ化、その活用手段・方法等について検討を行う。 他大学との遠隔講義においては、運用改善を図り、安定した実施に努める。また、講義の運用においてはワーキンググループを中心に充実を進める。
年度実績	<ul style="list-style-type: none"> ● 特別教育研究経費で拡充した授業記録システム等にもとづき、授業のオンデマンド化及びモデル授業の実施に基づく教育の質の改善に向けた取組を推進することで、FD の推進とともに授業記録システム等の利用拡大に取り組んだ。また、平成 19 年度に導入した LMS との連携や SA の育成を充実させ、教員の利用支援に取り組んだ。(以下、具体的な実績) ● 授業のオンデマンド化、モデル事業の実績 10 月に、モデル事業としてオンライン授業公開・授業検討会を実施した。授業のオンデマンド化は、前期 10 科目、後期 8 科目実施した。 ● FD、授業記録システムの利用拡大実績 実施した FD 講演会、フォーラム等についてオンデマンドコンテンツを作成し、公開した。経済学部、キャリア開発課、学生支援課が中心となって実施した講演会について、収録とオンデマンド公開を実施した。 ● LMS との連携推進実績 WebClass と、オンデマンドコンテンツの連携を、看護学科の 2 授業、並びに大分県立

	<p>看護科学大学との遠隔授業で行い、実証評価を行った。</p> <p>●SAの育成実績 公募で募ったアシスタント12名を育成し、継続的に講習を行った。</p> <p>●教員の利用支援実績 医学部(医学科、看護学科)、工学部に対しては学科単位でeラーニングコンテンツの作成支援を行った。</p> <p>●公開講座のビデオコンテンツ化実績及び活用手段・方法等の検討実績 「大分大学の人と学問」について全てのコンテンツをオンデマンドで一般公開したこと、オンデマンドでの配信について誰もが利用できる配信形式へ変更したことをあげることができる。また、本学HPのトップページに、本学の紹介として最適な「人と学問」へのリンクをはることで、より広範囲の人々に本学への関心を高めていただけるような措置をとった。</p> <p>●遠隔授業の運用改善策 障害が生じていた機器を特定し、入れ替えを行った。遠隔授業担当教員に対する個別支援を行った。</p> <p>●遠隔学習プログラムの実施体制の整備実績 整備の一環として、「米水津塾」第1回講座を収録し、配信を行った。また、本学HPのトップページに、「米水津塾」へのリンクをはった。</p>
--	---

(前記事項⑤⑥⑦関連事項)

中期計画 (教育 67)	生涯学習の観点から、増加する社会人学生に対して、学習機会へのアクセシビリティを向上させるとともに、学生の特性・個性に応じた支援を行う。
年度計画	社会人学生に対する学習支援を継続する。
中期計画 (教育 106)	学部及び研究科と連携して、社会人の再教育や生涯学習の場を拡充する。
年度計画	自治体や諸団体との連携を継続し、社会人や生涯学習の場の整備を進める。
中期計画 (教育 107)	社会のニーズをもとに、教育・福祉、経済学、工学、医学・看護学・医療等に関する教育サービスを行い、本学と産業界並びに地域社会の連携・協力を図る。
年度計画	大学の専門性を生かした大学開放事業の推進を継続する。
中期計画 (教育 195)	地域社会のニーズに即した公開講座・公開授業を充実することや学内施設の開放を進め、受講料や施設使用料の増加を図る。
年度計画	これまでの事業を継続させるとともに事業の方法・内容についての検討を行い、事業の改善を図る。
年度実績	<p>●社会人学生に対する学習支援の実績 ①社会人学生の学び方(研究生、科目等履修生等)の情報公開をHP上に設置、②学習相談、③学習支援プログラムの実施(図書館の活用等)を行った。そのほか、社会人学生を本学が実施する講座等にスタッフ・ボランティアとして参加させ、現場の社会人やまちづくり事業との交流を行った。</p> <p>●自治体や諸団体との連携実績</p>

- ・県の事業に参加するなどして、日常的に支援するための市町村と大学のネットワーク化を進めた。
- ・県及び市町村との共同による調査研究を行った(4研究)。
- ・県内の社会教育主事有資格者による情報交換等のネットを組織した。
- ・県及び市が実施する研修事業・会議等にスーパーバイザー(委員)として参画し、企画・実施した。
- 社会人や生涯学習の場の整備実績
 - ・大分市が実施する学び直し講座を受託して、企画・実施した。
 - ・東国東デザイン会議と共同で生涯学習に係る全県的な実践交流会を実施した。
 - ・県、市町村、諸団体の各種研修会に参画・参加して指導助言を行った
- 大学開放事業の推進実績
 - ・大学開放事業として、①公開講座・授業を推進するとともに、②自治体(佐伯市、大分市、津久見市)との連携事業の企画・運営を行った。
- 大学開放事業のあり方の検討実績
 - ・これまでの大学開放事業の継続を行うとともに、これまでの事業の方法・内容に関して検討を行った結果、事業の改善措置として、受講料の特例措置にしたがい、研究開発的講座や青少年対象の講座について受講料の減免を行った。

(観点3) 想定した統合のメリットとその結果

統合したセンターの業務の方向性のポイントとして、「大学を取り巻く情勢の変化と求められるニーズ」に記載されたように、生涯学習関連事業として、「他機関が行う生涯学習関連事業・活動とは差別化しつつ有効な連携を推進する事業展開」であり、他方で、センターが全学教育機構への関与を増すことにより、本学の教育改革に一層の責任をもつことが求められている。

(1) 生涯学習関連事業への取組

センターが主体となり企画・実施した事業として、具体的には、前記の実績のうち、以下のようなものを提示することができる。

年度実績	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会人学生に対する学習支援の実績 <ul style="list-style-type: none"> ①社会人学生の学び方（研究生、科目等履修生等）の情報公開をHP上に設置、 ②学習相談、③学習支援プログラムの実施（図書館の活用等）を行った。そのほか、社会人学生を本学が実施する講座等にスタッフ・ボランティアとして参加させ、現場の社会人やまちづくり事業との交流を行った。 ● 自治体や諸団体との連携実績 <ul style="list-style-type: none"> ・ 県及び市町村との共同による調査研究を行った（4研究）。 ・ 県内の社会教育主事有資格者による情報交換等のネットを組織した。 ● 社会人や生涯学習の場の整備実績 <ul style="list-style-type: none"> ・ 大分市が実施する学び直し講座を受託して、企画・実施した。 ● 大学開放事業の推進実績 <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学開放事業として、①公開講座・授業を推進するとともに、②自治体（佐伯市、大分市、津久見市）との連携事業の企画・運営を行った。 ● 地域諸機関との連携による研究の推進 <ul style="list-style-type: none"> 大分県教育庁生涯学習課・大分県立生涯教育センターとの共同研究として、「市町村社会教育計画等およびその実践化過程に関する研究」を企画・実施した。
------	---

また、平成20年度から「地域生涯学習支援システム」の研究開発・整備やネットワーク化を担当する専任教員が配置され、県内の生涯学習システムの構築に向けての調査・研究を進めた。

(2) センターの全学教育機構を通じての本学教育改革への貢献

平成20年度発足の全学教育機構運営会議にセンターから2名（センター長、次長）、全学教育機構主題科目専門部会にセンターから3名（センター長、次長、専任教員1名）が選出され、平成20年度の教養教育科目の策定作業に参加し、カリキュラム作成作業に貢献した。また、センター次長は旧生涯学習研究教育センター専任教員であり、センター次長が学内の教育改革の動向を認識する良い場となっている。

全学教育機構は新年度の全学の教養教育のカリキュラム編成を行ったが、センターとしても、その策定作業に貢献したといえる。また、平成22年度概算要求「教養から専門への動機づけとプロセスを重視した教養教育開発—学生のニーズに対応した実社会体験・学生参画型授業の取組—」において主たる支援センターとして参加し、計画の一翼を担う予定である。

なお本年度は、法人評価（6年に1度）が実施され、新年度に認証評価が実施予定であるが、センター長（一部、次長も含む）は「中期計画の目標達成状況報告書」の教育関係事項の作成作業に08年3月～6月にかけて、「認証評価に係る自己評価書」の教育関係事項の作成作業に08年11月以降、他の各学部教務委員長とともに参加している。

(3) 旧センター間の交流と事業の高度化に向けて

(1)(2)のほかに、旧センター間の交流と事業の高度化もまた今回の重要なテーマであった。交流という点では、旧生涯学習教育研究センターの専任教員をセンター次長として据えたことは意義があったと思われる。全学教育機構・教務部門会議への参加だけではなく、センターの運営の全般にわたり、センター長との合議をもとに、方針を決めた。また、平成19年度センター年次報告書の作成にあたり、旧生涯学習教育研究センターの事業概要を記載し、かつ次長が責任編集を担当した。さらには、専任教員間の交流を図るために、本年度当初から、毎週金曜日の午後3時以降に、教員と事務職員参加の連絡会議を設けた。こうした措置によって、2つの旧センターに所属していた専任教員の交流が図られ、相互の仕事内容の理解に役立つものと思われる。

事業の高度化に向けての措置として、たとえば、遠隔学習プログラムの実施体制の整備の一環として、「米水津塾」第1回講座を収録し、配信を行ったことを挙げることができる。

(観点4) 今後取り組む改善事項

(1) 旧センター間の交流と事業の高度化について

センターが作成・提出した平成21年度概算（特別教育研究経費）「授業・講演会等のオンディマンド化とFD活動の推進にもとづく教育環境の質の改善に向けての取組み」が採択されたが、この計画は、現在、実施中の概算要求（平成20年度分）の拡充であり、コンテンツの対象領域を拡大することにより、一般学生のみならず社会人学習者への学習支援をも充実させることを目標としている。したがって、次年度、2つの旧センターに所属していた教員間の交流をさらに進め、高等教育が関与することによる生涯学習部門の事業高度化、生涯学習が関与することによる高等教育部門の事業高度化の双方を進めることが可能と思われる。

また従来、旧生涯学習教育研究センターが担当してきた公開講座のVOD化は1タイトルのみにとどまった。その理由として、該当の講座が大学外で、かつ夜間、あるいは土日に実施されるため、ビデオ収録の人員不足がある。今後は、問題点を分析し、可能であれば、ビデオコンテンツの増加を図る方向に進めたい。

ただし、今年度も予想しなかった作業負担が生じていることも事実である。たとえば、大分県立看護科学大学、医学部との間の遠隔授業において、機器の不調のために、長期間にわたりセンター専任教員が拘束されたこと、他の部局や事務局からの作業依頼も増える傾向にあること、センター長は法人評価や認証評価作成のための非公式的なワーキング作業に従事しており、その間のセンター運営に支障をきたしていることである。センター本来の業務を越えた作業負担に対して、センターの人員はあまりにも過少であることも事実である。作業量の増大に対処するために、非常勤職員の採用といった措置をとることも必要であると思われる。

(2) 本学の教育改革の推進者として

法人評価に示されたように、eラーニングへの評価は高いものがある。したがって、これについては今後も継続した取組が必要となる。概算要求の実施もあり、より多数の教員がVODの作成等に参加いただけるような環境づくりが急務となっている。

センターの概算要求の獲得は、グループワークを組み込んだ「大分大学の人と学問」におけるようなモデル授業の実践によるところが大きい。新年度にむけ、本センター教員による教養科目の開設は4科目程度の増加を見込んでいる。それらの科目のなかで、授業改善に結びつくようなモデル授業に取り組みたい。

IV 付 録

1. センター関係諸規則

(1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関係に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

(2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
- (7) 大分大学地域共同研究センター運営委員会から選出された者 1人
- (8) 研究・社会連携部長
- (9) 学生支援部長
- (10) その他センター長が必要と認めた者

2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

(会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

(3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

(趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という）紀要（以下「紀要」という）の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

(紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等（実践報告を含む）を掲載するものとする。

(投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。

- (1) 本学教員
- (2) 本センター客員研究員
- (3) 本センターが依頼した人
- (4) 本センター運営委員会が認めた人

(執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

(刊行)

- 5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

(刊行費)

- 6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。

- (1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合
- (2) 別刷が50部を超える場合

附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

(4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

1) 投稿枚数

投稿原稿は、単独執筆または共同研究に関わらず、原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが、その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は、題目、要旨、キーワード、図表、注、参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし、原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお、当該日が休日の場合、次の勤務日を期限とする。

3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は、センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて、加筆、修正、削除を求めることがある。

4) 原稿の提出

原則として、原稿はワープロソフトを使用して作成し、プリントアウトしたもの（1部）とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし、上30mm、左右20mm、下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり、40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合、その旨を明記する。

5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合、著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを、単行書の場合には、著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

6) 校正

校正は一校を原則とし、必要最低限の訂正、修正に留めるものとする。

7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には、執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

2. 高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	西村善博	高等教育開発センター長（経済学部）
委員	岡田正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
委員	中川忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	尾澤重知	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	松田聡	教育福祉科学部
委員	丸山武志	経済学部
委員	北野敬明	医学部
委員	石川雄一	工学部
委員	吉田和幸	学術情報拠点運営会議
委員	氏家誠司	地域共同研究センター運営委員会
委員	松田充功	研究・社会連携部長
委員	漆間幸一	学生支援部長

新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	西村善博	高等教育開発センター長（経済学部）
センター員	岡田正彦	高等教育開発センター次長

メディア・IT活用部門

部門長	尾澤重知	高等教育開発センター専任教員
センター員	家本宣幸	教育福祉科学部
センター員	藤井弘也	教育福祉科学部
センター員	高見博之	経済学部（～8/15）
センター員	藤村賢訓	経済学部（8/16～）
センター員	杉田聡	医学部
センター員	工藤孝人	工学部
センター員	吉田和幸	学術情報拠点

FD・授業評価部門

部門長	牧野治敏	高等教育開発センター専任教員
センター員	尾澤重知	高等教育開発センター専任教員
センター員	工藤修一	教育福祉科学部
センター員	市原宏一	経済学部
センター員	松隈久昭	経済学部（～8/15）
センター員	高見博之	経済学部（8/16～）
センター員	横井功	医学部
センター員	戸高孝	工学部

大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
部門長	中川忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
センター員	山崎清男	教育福祉科学部
センター員	田畑千秋	教育福祉科学部
センター員	仲本大輔	経済学部
センター員	藤木稔	医学部
センター員	劉孝宏	工学部

平成20年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発行 平成21年4月

編集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原700番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>